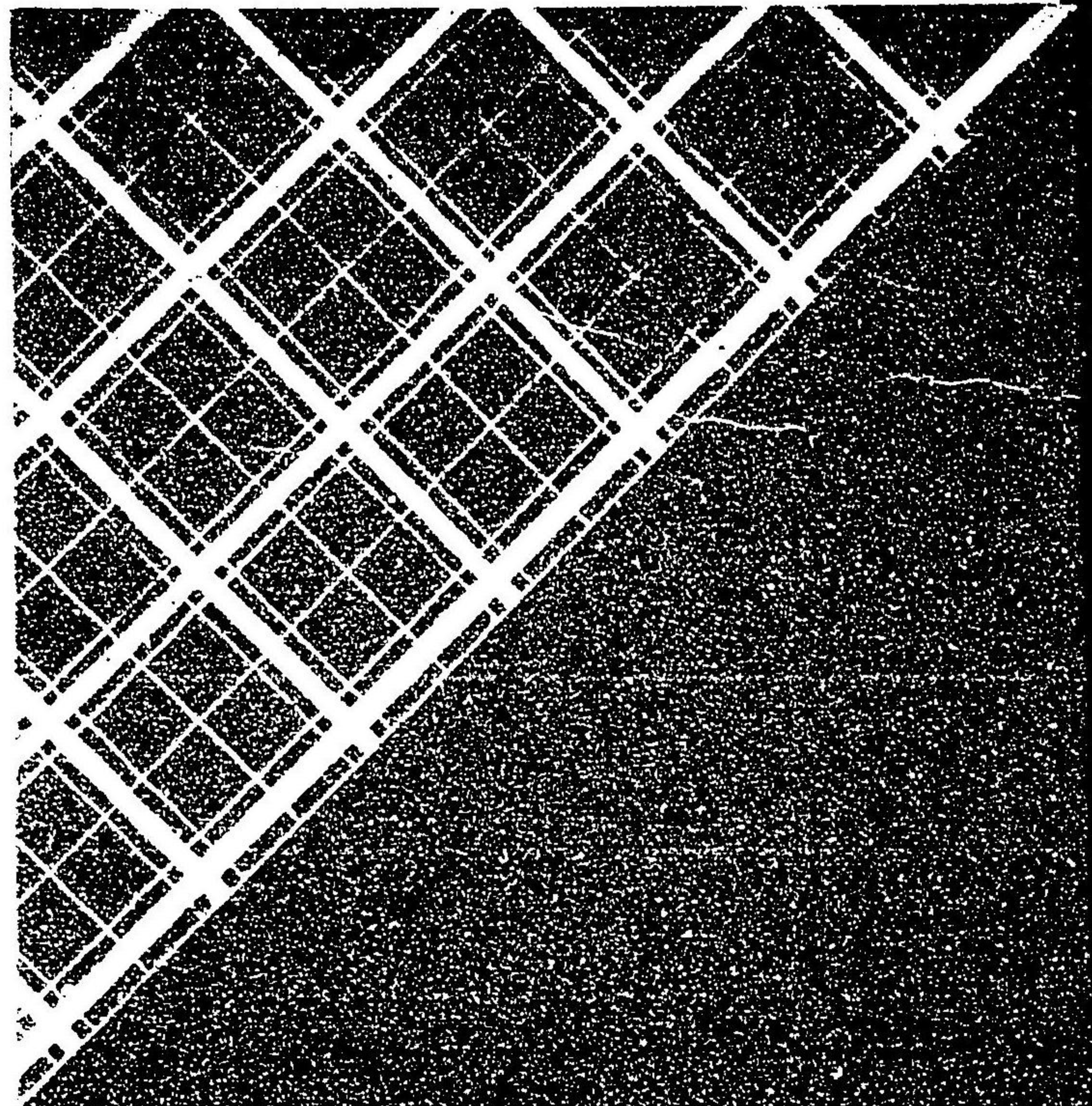


三十七、M32

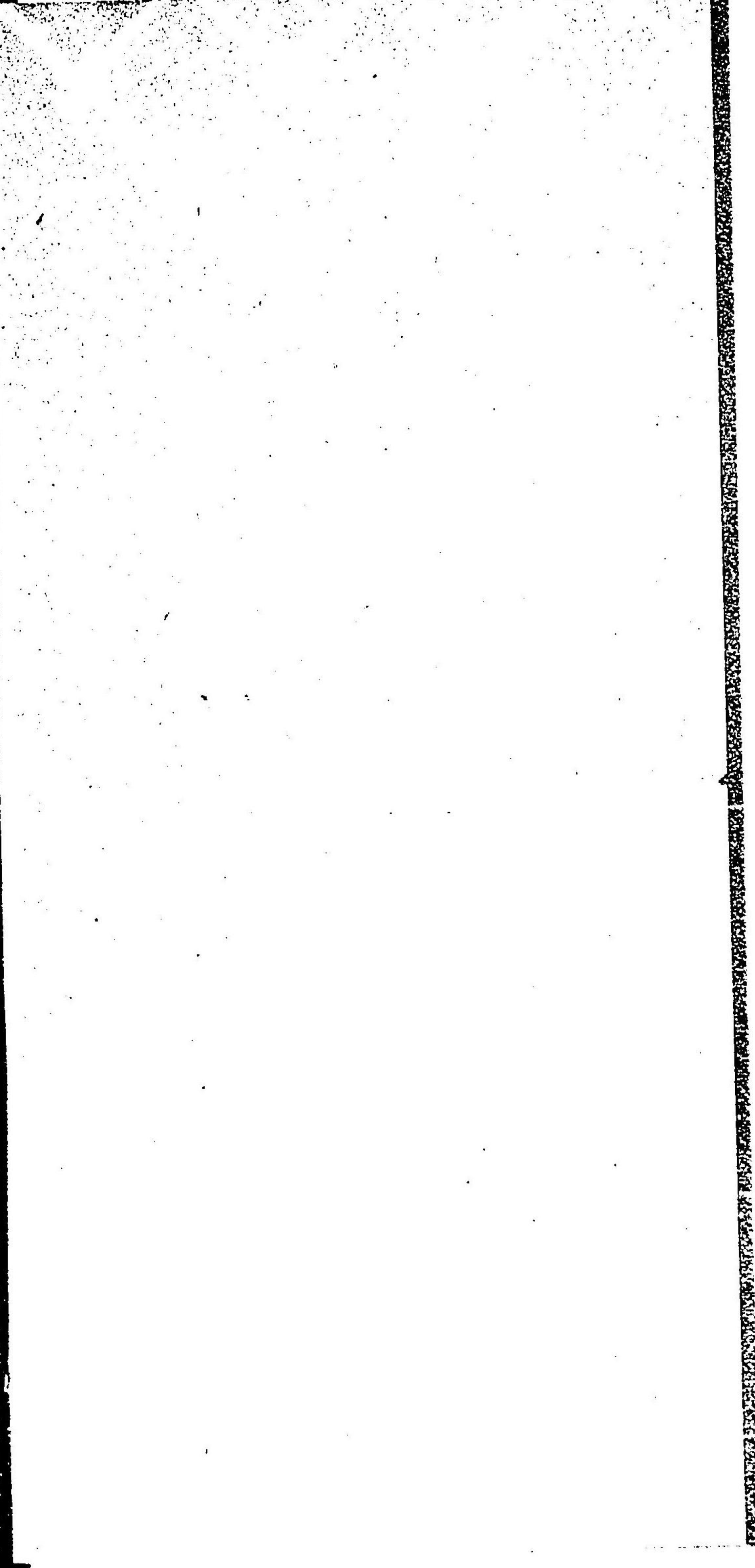
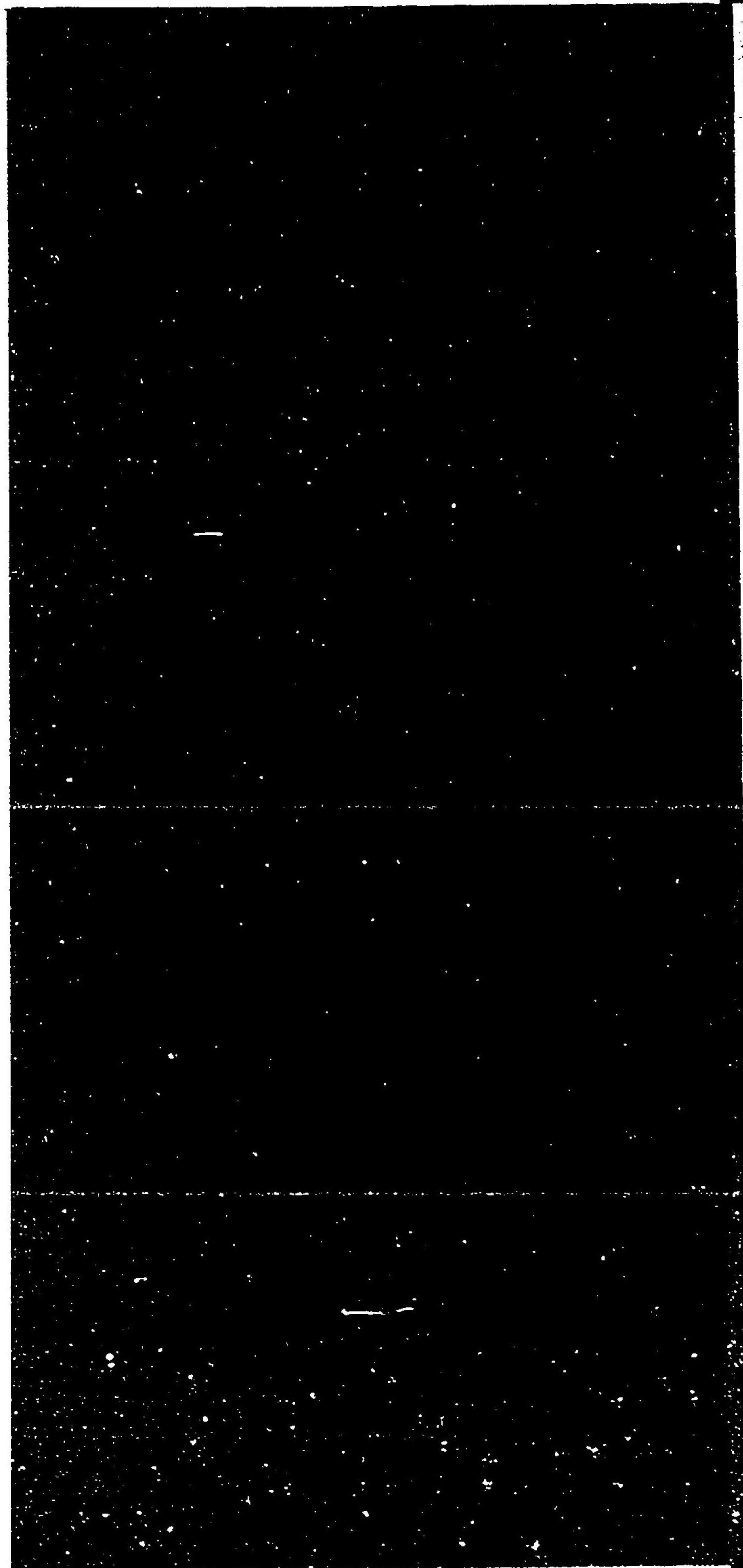
古今亭  
今輔  
落語會



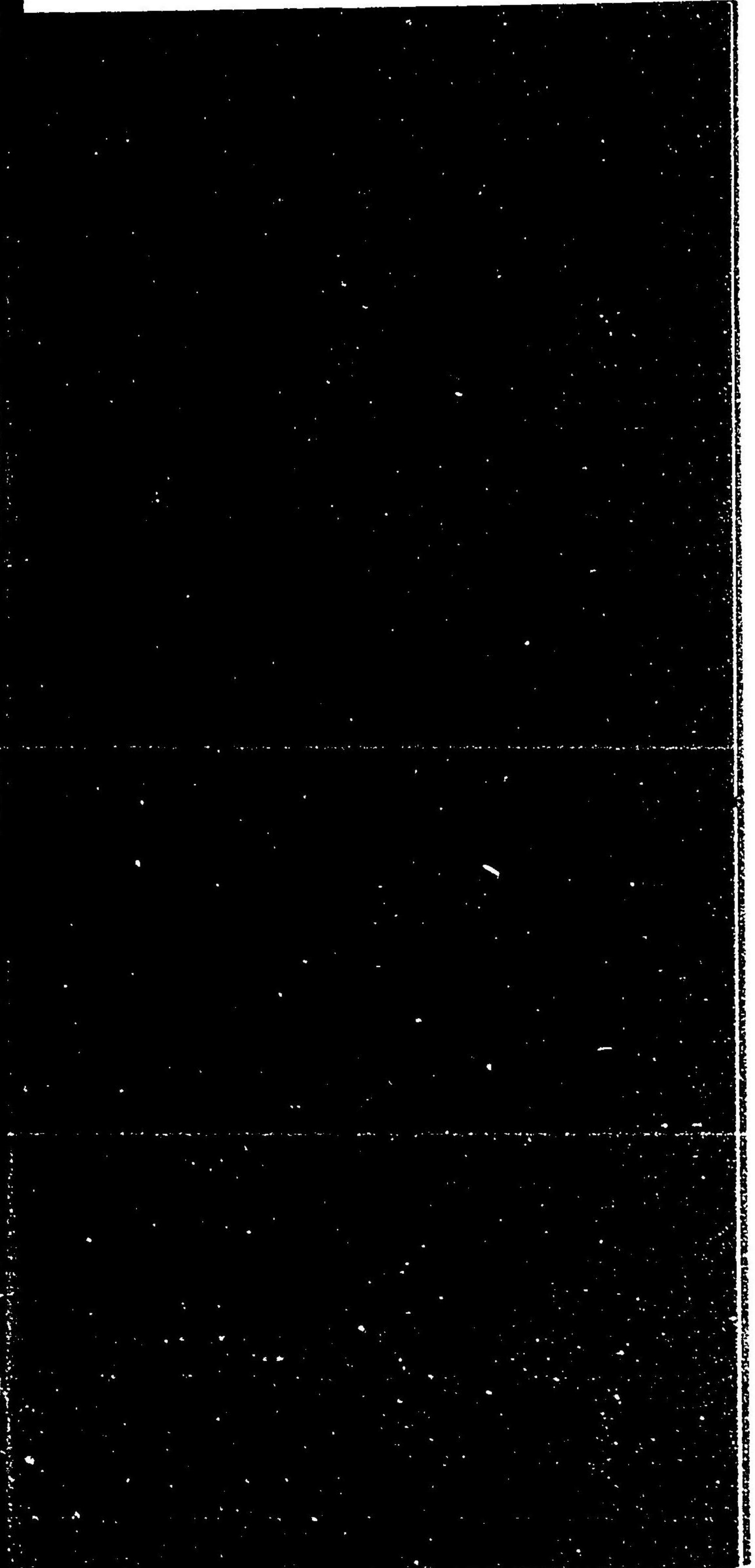




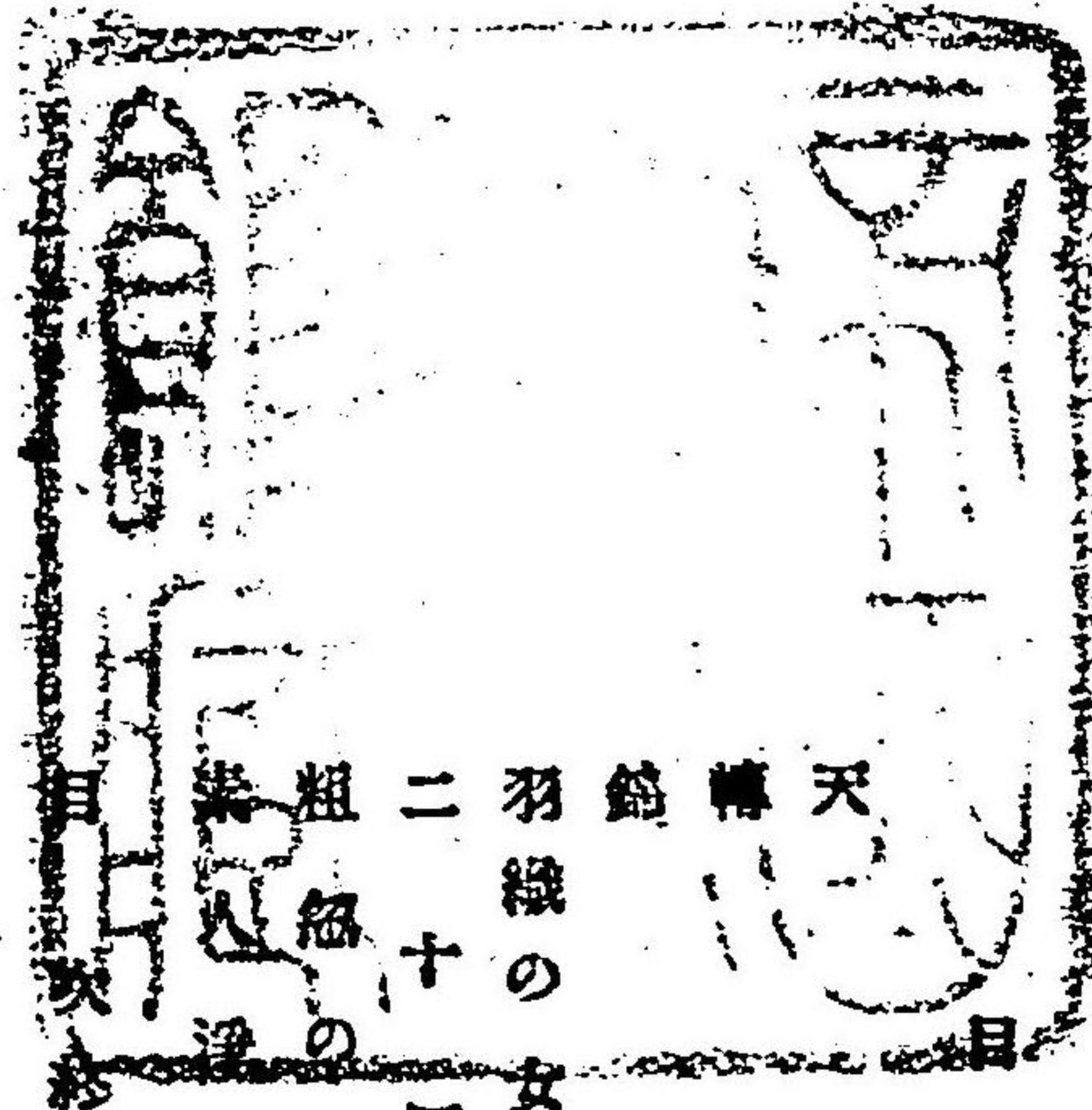










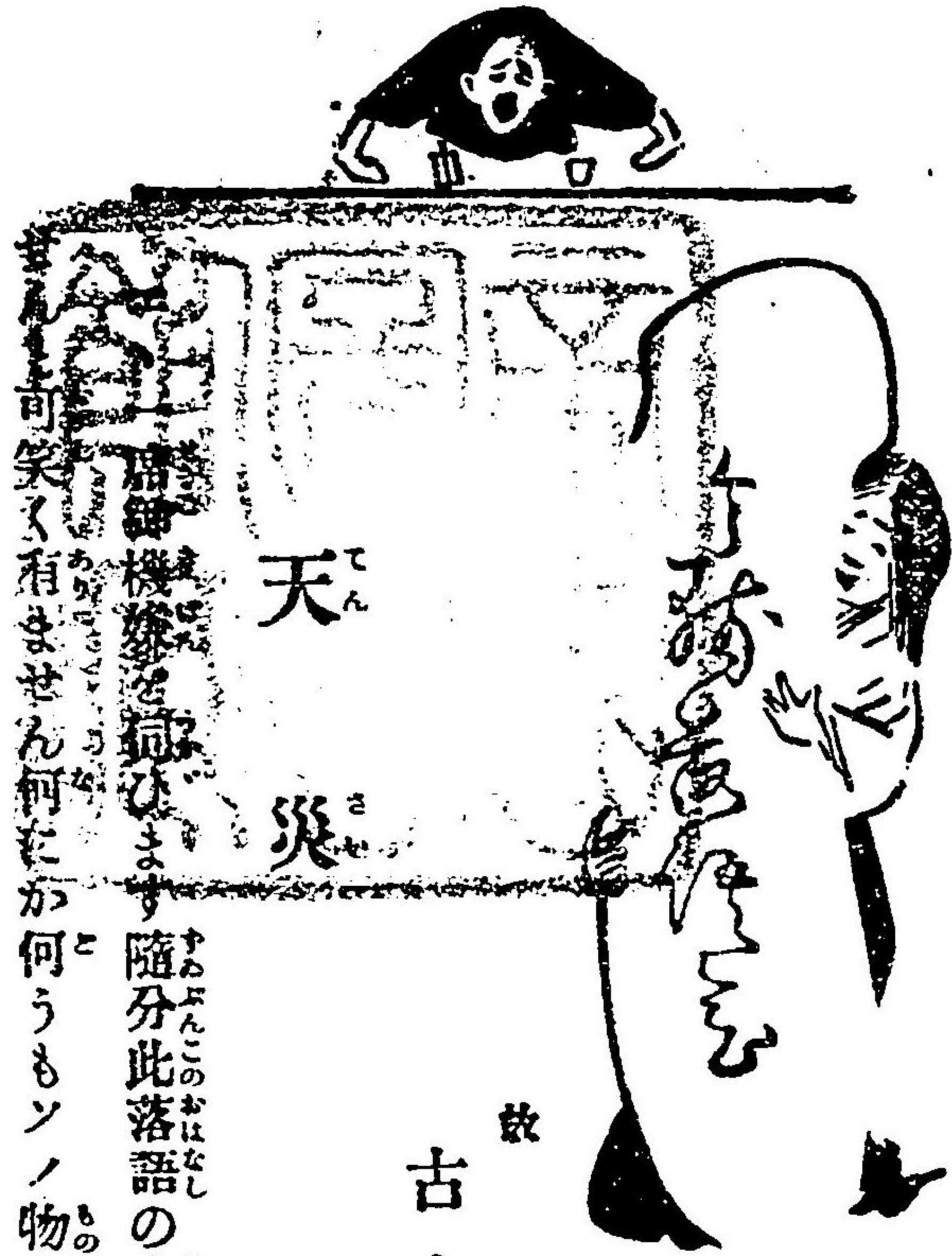


天	轉	館	羽織の女	組十	目次
災	宅	遷	買	孝	者
.....	.....	.....	.....	.....	.....
一	三	五	八	二〇	二八

明治  
43. 6. 30  
東京



持12  
753



可笑く有ません何にか何うもソノ物を知らなくッて知た假似をする  
 随分此落語の方は土臺馬鹿々々しい者が出ま

故  
古今亭今輔講演





杯と云ふ輩が往昔の<sup>か</sup>下等社會の亂暴者にはお話し<sup>はなし</sup>しい事<sup>こと</sup>が幾<sup>いく</sup>らも御座<sup>ござ</sup>います  
す別に翻案<sup>たくら</sup>まんでお話<sup>はなし</sup>に成<sup>なつ</sup>て居<sup>ゐ</sup>る事<sup>こと</sup>が幾<sup>いく</sup>らも御座<sup>ござ</sup>います

男「オ、凸凹<sup>でこぼこ</sup>ウ隠居<sup>いんきよ</sup>は在宅<sup>うち</sup>か

隠「亂暴<sup>らんぼう</sup>な男<sup>おとこ</sup>だノ突然<sup>いきな</sup>り這入<sup>はいつ</sup>て來<sup>き</sup>て凸凹<sup>でこぼこ</sup>てエのは何<sup>なん</sup>でげす予<sup>わし</sup>は介意<sup>かま</sup>はんが  
お客<sup>きゃく</sup>さまが入<sup>い</sup>らッしやるのに怪<sup>け</sup>しからん御挨拶<sup>ごあいさつ</sup>をなさらないか

男「エ……お寺<sup>てら</sup>さまけエ

男「醫道<sup>いどう</sup>の御先生<sup>ごせんせい</sup>だ

隠「ム、ウ井戸屋<sup>いどや</sup>さんけエ天窓<sup>あたま</sup>が圓頂<sup>まるも</sup>いから潜<sup>く</sup>りの方<sup>ほう</sup>なんで……穴藏<sup>あなくら</sup>の  
源太<sup>げんだ</sup>を御存<sup>ごぞん</sup>じでげすか



隠「コレ、失禮<sup>しつれい</sup>な言<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>ひなさるな井戸屋<sup>いどや</sup>ではない御醫者<sup>ごいしや</sup>さまだ

男「ムーン醫者<sup>いしや</sup>ッばうるるか

隠「何<sup>なん</sup>んだエ其様<sup>そのさま</sup>な言<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>て……尊公<sup>あなた</sup>御免<sup>ごめん</sup>下さいまし……熊<sup>くま</sup>さん和郎<sup>わらう</sup>  
何<sup>なに</sup>を怒<sup>おこ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>るのだエ

男「何<sup>なに</sup>をッて癢<sup>しゆく</sup>に障<sup>さわ</sup>らアなッてへ……

隠「如何<sup>どう</sup>しなすッた

男「なッてエ篋棒奴<sup>べらぼうめ</sup>エなッてエ……離縁<sup>りえん</sup>狀<sup>じやう</sup>を二本<sup>ほん</sup>認<sup>かい</sup>て呉<sup>く</sup>れ

隠「何<sup>なん</sup>だか和郎<sup>わらう</sup>の云<sup>い</sup>ふ言<sup>こと</sup>が些<sup>ちつ</sup>とも解<sup>わか</sup>りませんが那處<sup>そこ</sup>かで喧嘩<sup>けんか</sup>でもなすッた  
のかへ





男「ウン喧嘩ア爲たのサ癪に障るぢやアねへか和郎さん魚屋が好い鯨を持  
て来たから二本買って置いて小哥が湯から歸て喰と思ふと其魚がねへぢや  
ア御座エませんか嗅アの云ふにやア猫に取られツちまつたてエからちや  
んと納つて置いて取られたんなら量見するが汝仕舞はずに置いたらう其  
様な言を云ても取られちまつたもの仕方がねエと吐しやアがるから突然  
り横素頬ボカンと打毆て威勢が宜かつた  
男「詰らん所で自慢を爲て居なざる夫から如何なすツた  
男「此んな處には居られねエてエと猫又婆が口を出して毎時でも娘アを威  
壓める嗅アを打つなら妾を打てと斯う吐しやアがる



男「ムー感心な事だ世の中に嫁を悪む姑は幾らも有るが嫁に代つて打ては  
感心だ中々強氣なものだ如何して打てやア爲めへな打ちやア爲めへ  
男「蹴たア  
男「尙は悪い亂暴だ如何も怪からん事だ子夫れは宜いが離縁狀を二本書け  
とは如何云ふ譯だエ  
男「だからサ阿母も一緒に追出して仕舞ふんだ  
男「和郎さんの阿母さんぢやアないか  
男「戯談云ちやア往けねへ縁喜の悪いもつと粹な年増ならお袋と云ても宜  
いが





男 阿母さんではないのか伯母さんかへ

男 然うでもねへ

男 親戚の者でもないのかへ

男 なんでへ彼やア死んだ阿父の嬖アで御座エます

男 ぢやア和郎の阿母さんぢやアないか

男 考へて見れば……

男 考へなくても夫れに違ひないかお袋を一緒に離縁する杯は呆れ返る人

では無いか何にしる和郎の氣を柔らげなければならんが些と心學を聞いて

見なさるが宜い長谷川町の新道の煙草店の裏に紅菜坊なまる先生と云



ふのが有ます

男 甘ッだるくッて不可へ

男 何にを

男 新焼さだらう

男 新焼さではない心學……

男 心學てエのは何でへ

男 困りますな和郎の爲めに成るものだから往て御覽なさい氣の暴い人

の氣を柔らげるものだから此間から和郎さんを遣り度と思て茲に手紙を

認いて置いた悪い言を言はない手が頼むから……





離縁状は和郎が歸てから何本でも子が書いて遣ると云ひながら差出す手紙を不肖く受取り

男「汝が頼むから往て來やう左様なら……凹凸隠居は中々親切者だからな有難エ……何んとか云たッけ煙草屋の那處とか云たッけ忘れッちまつたオイ〜那處だツたネ

男「長谷川町新道の煙草屋の裏で紅菜坊なまる先生と被仰るのだ若し忘れたら紅屋の隠居てエは解るヨ

男「ちやア往て來やす……ム、茲に違エねへ煙草屋があらア……オイ  
オイ



煙草屋「へエ……何にか差上げますか

男「怒張るねへ年を老てやアがる癖に……篋棒に怒ける奴の居宅は那處だ

煙草屋「へエ……

男「なツてへ新焼きた

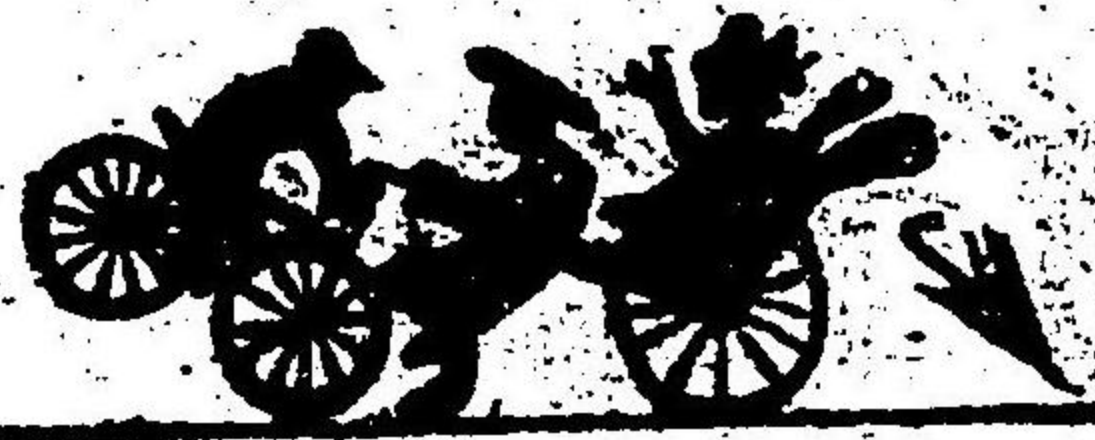
煙草屋「何んでげす

男「紅屋の隠居でへ

煙草屋「ハ、ハ、和郎さんの被仰るのは紅菜坊なまる先生でげせう

男「其位エ知てる癖に空アつきやアがッて





男「何にイ手紙を見ろくソラ……」  
 女「手紙を……ムウ神田の鈴木からお出に成たのかエ……ウン成程ア  
 ー左様か……マア此方へお昇んなさい  
 男「昇らんでも宜い、早く心學を演れ  
 女「マアお昇んなさい……和郎さんは大層異亂だそうだな  
 男「何にイ  
 女「大層異亂だそうだな  
 男「戯談云ちやア往けねへ外聞が悪イ乃公ア淫亂ぢやアねへ  
 女「大層氣が暴いそうだな能く衆人と喧嘩をなさるぢやアないか



煙草「先生のお宅は此裏を這入て奥から二軒目でげす  
 男「在宅けへ篋棒ウ……ヤイ誰か出て来い  
 女「誰かだへ  
 男「誰公でも宜い無性な野郎だ出て来い  
 女「亂暴な人だネ……和郎さんかへ  
 男「和郎さんだ  
 女「那方から  
 男「彼方から来たのヨ  
 女「何にしに





男「喧嘩ア日に三度位やつけなけりやア飯が旨く喰へねへ位いだ  
 な「短氣は損氣と云ふ事が有るから氣を暴く持ては往けません何にしる氣  
 を柔らかに持たなければなりません……（堪忍の成る堪忍は誰もする  
 成らぬ堪忍するが堪忍）だ（氣に入ぬ風も有らうに柳かな）で解りました  
 たか

男「何だか些とも解らねへもつと演れ面白い言を

な「堪忍の袋を常に首へ掛け破れたら縫へ破れたら縫へと

男「何だか些とも解らねへもつと面白言を演

な「困りました子……和郎さん往來を歩行いて居て往來の人が往來する

か杯する事が有ませう其時は如何爲ます

男「突然り先方の野郎を殴り附けるねへ

な「だからなんてツイ當つたら

男「ツイでも何んでも構はねへ此方が突當て殴り倒さア

男「亂暴だ不然な若し軒の下を歩行いて屋根から瓦が落ちて来て負傷を

なすつたら如何します

男「其處の家へ暴れ込まア

男「家の人が爲たんではないぜ

男「爲なくたツて介意ねへヤ奈是此んな瓦を屋根へ上げて置やアがるツて







先方の野郎を叩き毆らア

「亂暴だナア然んなら若し表へ水を撒て居る處へ出會ひ頭に着物の裏へ水を掛けられた時は如何します小兒でも打たり何にか爲ますが小兒なら勘辨しますか

男「小兒でも勘辨しねへ

も如何します

男「其家へ暴れ込むのヨなんでへ篋棒奴小兒に水杯を撒せて見やアがれ人の着物に打ッ掛けやアがッて汝が悪いんだッて喧嘩ア吹ッ掛けらア

「餘程亂暴だチぢやア和郎さん夏杯麻布邊へ往くと随分原が有ますが五

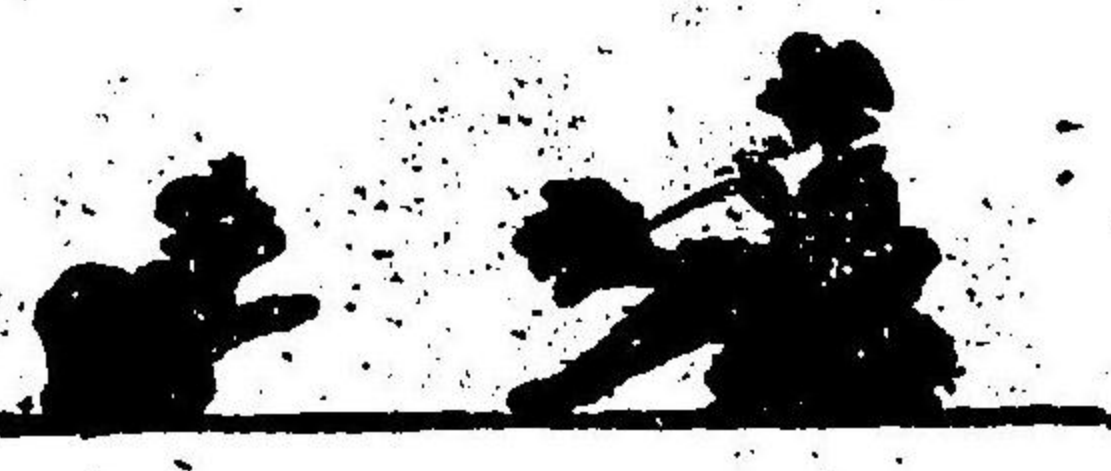
町四方も有る原中へ通り掛り俄の夕立で天窓から足の爪先までビッソヨリ濡れた時には和郎さん如何します

男「腕車が有らア

「イヤ腕車もなく人ツ子一人往來はなく和郎さん獨でビッソヨリ夕立の掛た時は如何爲ます誰を敵手に喧嘩を爲ますか

男「ム、……ウ、……(顔を撫で鼻を磨り)此ン畜生ウ驚せやアがッたなヤイ此ン畜生なんでエ此ン畜生……巧エ言を言やアがる驚いたなア此奴ア爲やうがねエ誰にも何共云言が出来ねエ

「夫れ御覽其處だて夫れが天災と云ふ奴で災難てエものはちやんと其日

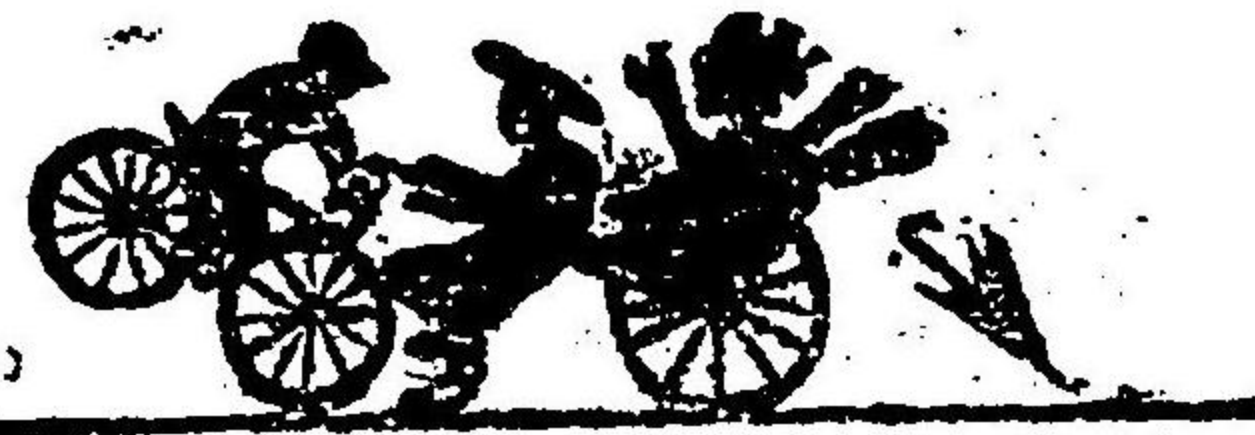






に在る事に極まつて居るのだ其處へ出會はずが謂ゆる災難天災と云ふ奴  
だ先に申した屋根から瓦の落た時も然うでげす態々此方から打附りに往  
くやうなものだ是も同じく災難天災と云ふ奴だ人間は天災でエ事を知ら  
んと往けませんダカラ何事も勘辨爲なければなりません

男「成程……驚いた千坊さん勘忍してお呉んなせエ小子ア何にも知らん  
もんだからボン／＼云て堪忍して下せエ成程天災だ千夫れに違エねへ天  
道さまがすると思へば腹の立つ事はねへ巧へ言を云もんだ堪忍してお呉  
んねへ是からまたチヨク／＼聴きに参りやすヨ  
／＼解て下されば予も誠に嬉しい何卒またチヨイ／＼遊びに来てお呉れマ



ア宜いやネお茶でも入れるから

男「ナニ天災を聞かねへ中なら茶でも入れろツてニんだが是も天道さまが  
お茶を入れないと思へば腹が立たねへ矢張り天災だ

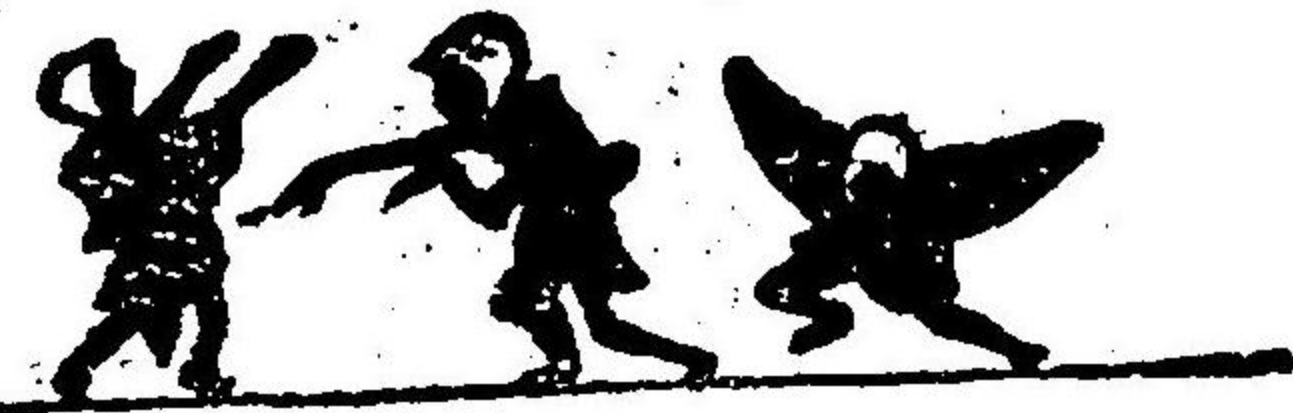
男「ハ、然う解て呉れば予も嬉しい……穿物が知れないかエ  
男「へエ何に草履が片ツ方……

男「此裏には悪い狗が居るから時々雪踏を咬へて往きます

男「ナニ宜しい／＼狗が咬へて往たと思へば腹が立つ天道さまが咬へて往  
たと思へば腹も立ちやせん是も天災／＼

男「然う解て呉れば誠に悦ばしい左様なら……





男「左様なら……有難エな天災を覚えちまつたから最う大丈夫だ……  
今歸た

女房「何んだか和郎眞實に呆れ返して仕舞ふヨ

男「天災だ最う打ちや爲ねへヨ

女房「本統に口ぢやア何にを云ても宜いから打つだけは止してお呉れ

男「大丈夫だよ

女房「阿母さんが心配してお在だよ

亭「有難エなア濟まねへアー天災だ

と獨で感に堪へて居ます一軒隔て隣の家にて登高の夫婦喧嘩

男「何にが如何爲やアがツた

女「何にイ何んだとへ……

亭「何んだく大變な騒ぎだなア

女房「ナニ奥の吉兵衛さんの家のお内儀さんが暫く田舎へ縁ぎに往て居たら

う其留守に吉兵衛さんが妙な女を曳張て來てエる處へ突然けにお内儀さ

んが歸て來たもんだから先刻から大喧嘩を爲てエるのサお内儀さんが大

變に打たれて可愛想だよ

亭「アノ吉の野郎天災を知りやアがらねへから乃公一トツ往て來る

女房「お止しヨ喧嘩にでも成ると不可いから







と留める手先を振放しドタバタ騒ぎを爲て居ます處へ飛び込み吉兵衛を押  
止め

亭「待て〜待てと云ふに

吉「ヤイ此ン畜生ウ……」

亭「マア〜待て

吉「放棄て置け〜」

亭「コレサ待てと云ふに待てヨ……お内儀さん乃公が来たから安心しね

へ……吉兵衛ちやんと其處へ坐はれマア沈着け

吉「放棄て置け〜」

亭「マア〜沈着けエ、一宜イかなッてへ奈良の堪忍ヨ駿河の堪忍だ

吉「何にイ

亭「氣に入らぬ風も有らうに蛙かなヨ

吉「何んでエ

亭「頭陀袋ヨ破れたら縫ふだらう

吉「何んでへ

亭「汝な軒下を通して屋根から瓦が落ちて打附るだらう

吉「間抜けぢやアねへか

亭「黙てるイなッてへ表を歩行いて水を打掛るだらう……着物が濡れら







ア

吉「何んだ」

吉「原の中で夕立に遭はア

吉「何う為やアがツたんだ

吉「夕立に遭て笠棒奴ビツシヨリ濡れたら如何する

吉「何んだ

吉「天災だらう

吉「ナニ天災ぢやアねエ先妻の間違ひだ

(完)

轉宅

エ、申上げますお話は大概落行きます處は愛情と慾情に纏絡つて出ます  
 ものか眞面目な人間ではお笑ひには成ませんが落語家は高座へ登りまして  
 お饒舌をすると云ふは餘程平生から作意んで置きます譯では有ません出た  
 成勝負で何にを云ふか知れませんが尤も落語をお聴き遊ばして之を悴の意見  
 の補足に爲やうのと云ふ譯には成ません大體根なし草と云ふ位で有ますが  
 人は一代名は末代人は死して名を残し虎は死して皮を残す落語家は借金を  
 残す其様な事は残さんでも宜しう御座います名を残すてエのは中々大變





な譯でげす同じ残すなら善い事で名を残し度う御座います往昔漢士で此方  
 には二十四孝てエものが有るが日本にも二十四孝が有るかッてんで遣した  
 時に日本は負惜みが強いから二十四不孝てエものを編纂て残餘は皆孝行だ  
 と云たので漢士でも驚きましたそんで夫から又先方から智恵の環を遣して  
 之を抜いて見ると云たのをバラクにして歸してやる時に馬の轡と錫杖  
 の頭を送て之を抜いて見ると云てやつたが未だに考へて居るそんでげすが  
 何んに成ても名を残すてエのは大變でげす我々の藝人社會でも随分親孝行  
 で名を残した者が有ます八代目團十郎は御褒美を戴いたそんで又岩井半四  
 郎も久米三と云た時分親孝行で御褒美を戴きました講釋師の方では南玉落



語家では今輔は……未だ御褒美を戴きません是から貰ひますので如何し  
 て名を残すてエのは中々大變な事で御座います彼の石川五右衛門は京都七  
 條の磧で油であげられましたと云ても天歎羅屋の元祖では在ませんが死ぬ  
 時の辞世に

石川や濱の眞砂は盡るとも

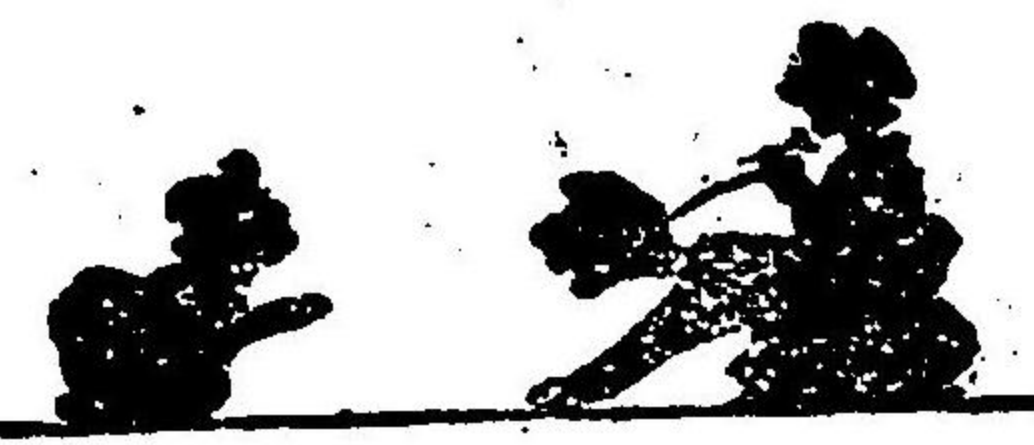
世に盜賊の種はつきまじ

と詠んで五右衛門の兄哥さんを六右衛門と申し深川で釜を製造て居ますが  
 阿兄の釜で弟が死ぬとは誠に過去の因縁でげせう夫から又熊坂長範は盜賊  
 ぢやア實に大したものでげすが彼の人は如何して名前を残したかと云ふと



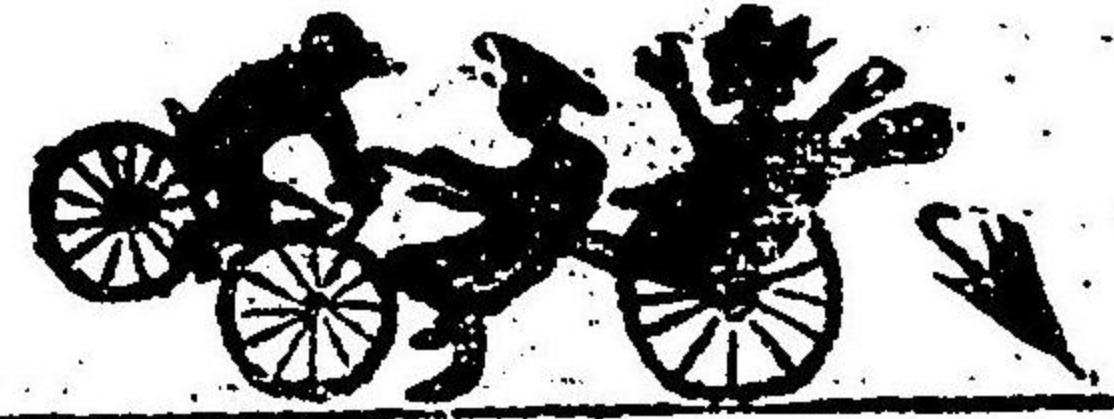


殺した人が宜い御曹司牛若丸の御佩刀の下に命を落したからで遂には九郎  
 判官源義經とお成り遊ばしますが幼稚い時は牛若丸と云ふ現今なれば  
 赤く書いて牛赤丸とでも云ふので御座いませうが鞍馬山で天狗さまに教は  
 つたてニ鞍馬八流の劍術だから確乎なもので尤も現今天狗さまは唐辛屋に  
 成て居ますけれども牛若丸は大したものので平家と源氏の戦ひの時矢島樞の  
 浦大物浦の戦の時は大した働きで彼人のお蔭で戦が勝たのでげす赤い旗  
 と白い旗とが両方に立てたので鐵道馬車はまごついたそんで何しろ牛若丸  
 は大したもののでげすが熊坂長範も覺悟が宜かつたと見えて斬られたが血を  
 出さないで鎧を出しましたソレは今坂で御座いますが平凡盜賊ぢやア不可



ません  
 細君「チヨイと貴郎  
 旦那「エ、  
 細「大變ですヨ、何にか臺所でガタ／＼音が爲てエますが泥棒ぢやア在ま  
 せんか  
 旦那「エー………カニ泥棒ぢやアない猫だらう  
 盗人「ニヤーゴ  
 細「アラ貴郎猫に爲ちやア大いぢやア在ませんか  
 旦那「ウン………狗だらう



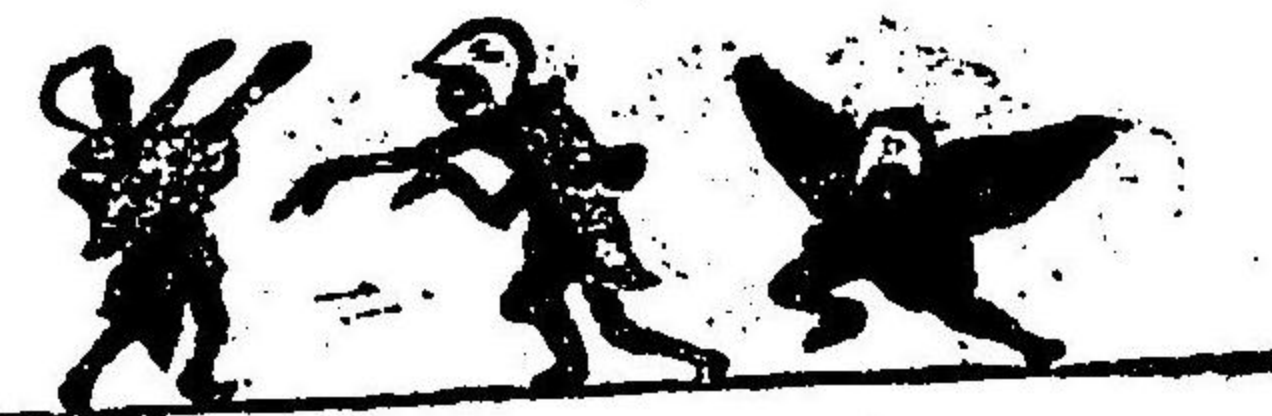


盗ウム……  
 と支へて仕舞ひ象の聲を知らないのでウム、ソ  
 且ソラ泥棒だと云ふので盗賊も驚き庭へ出ましたが逃げ場を失ひ泉水の  
 中へ飛込み首だけ出して居升所へ夫婦が参り何處へ行た〜〜  
 細オ池から首を出して居升ヨ  
 且ナアーニ泥棒の首ではない杭だらう  
 細イ、へ杭では在ません泥棒の首でス  
 且ナアーニ杭だらう  
 細イ、へ泥棒の首でス



盗ワン  
 細アラチヨイと狗にしても音が大きいぢやア在ませんか  
 且ぢやア馬だらう  
 盗ヒーン  
 細馬にしても音が大きいやうですヨ  
 且牛だらう  
 盗モウ  
 細牛にしても音が大きいぢやア有ませんか  
 且象だらう





旦アランだつてしようがない竿を取てよこせ  
細君竿を出す旦那はそれを取り泥棒の天窗を打つ

旦杭か泥棒か〜

盗杭〜

杭の真似迄致升間抜けな奴がある者でス是は神田小川町の新道に船板扉に見越の松がニユーと出て居る粹な家造にて奥から旦那を送り出た權妻は年頃二十三四になる西洋元服の眼の二個有る尤も眼が二個有るからつて羨しがつて云ふのぢやア有ませんから念の爲御断り申して置きますが美しい婦人でげす筑前の浴衣の上に縮緬の小袖を着まして旦那から貰ひましたか知ら



ないが男の帯をグル〜と胸高に巻きまして黄八丈の書生羽織を着左の手に雪洞を持って居ます

旦ぢやア五十圓の金子は宜いかへ

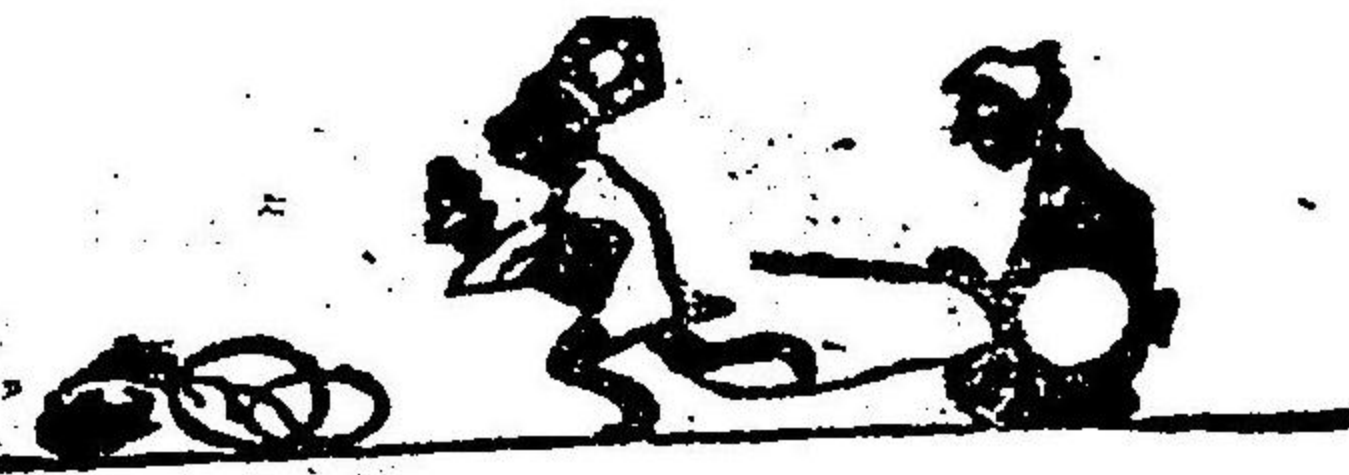
權ハア畏りました

旦今宵は少し用も有るから宅へ歸りますがまた明日参りますヨ

權ハア御心配なく……ぢやア直に就寝ますハア畏りましたアノ金子は慥かに遣しますから御心配なく……角から腕車に召して下さいまし左様なら……御機嫌宜しう

と權妻が旦那を送出して居るのを慥かに聞いた石川五右衛門の身内四右衛





門が開いちや遁さぬ地獄耳

四五十圓とは有難エ狗も歩行けば棒たア此事だと今塚に倚掛て居ますと  
宜い鹽梅しきにギイーと塚が開きましたから中へ這入り今まで旦那が座し  
て居ました布團の上へドツカと坐して膳の上に在ますものを無闇に喰べな  
から

「旨へ處へ飛込んで來たナ……ウン、ムシヤ……是は有難エ旨  
エ〜素敵だ……彼様な美しい婦人を寵愛して此様な贅澤の物を喰てやア  
がる……ホヤ麥酒杯を飲んでたナ……ム、ン是は香水の徳利だ一緒に  
茲へ置のは酷いや是は驚いた……此方の徳利は儲かたらう……ウン儲

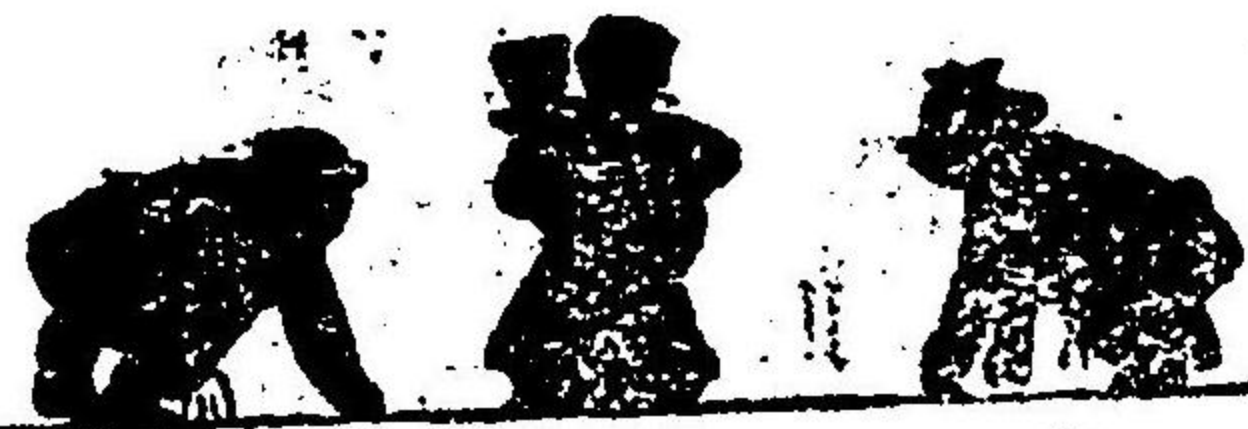


か〜……有難エなア、何にしる此又海老の具足養てエ奴は樂みなもの  
で、チユウ〜(売を酷め汁を吸ふ音)ウン旨へヤ……此方のは何んだ  
エ栗のきんとんか此奴ア下戸の喰ふものだが酒家も一個位は宜い、ムシヤ  
〜是は旨エ如何も素敵々々ウン旨エ〜餘程旨エ  
と有合ふ残物を摘喰ひしながら頼りに酒を飲んで居ます所へ權妻が戻て參  
り其體裁を見て呆れ返り

「アラマア……チヨイと思だネ如何爲たノ何んだエ和郎は

「静かに爲ろイ、静かに爲やアがれ無言で人の家へ這入てれば云はずと  
知れた窃盗だ蛇が見込んだ雨蛙旦那が置て往た五十圓の金をズラリと耳を





揃へて茲へ出して仕舞へバタバタすりやア二尺八寸強刀もの虚飾にやア差  
ねエズブラ〜とお見舞申すッ

權「可怖ことネ…………シタが和郎何にも差して居ないぢやアないか

盜「ナニイ…………へ、實は温泉へ忘れて来たア

權「粗々ツかしい泥棒ぢやアないか、イエ往ない匿したツて、和郎は泥棒

ぢやアない落語家か朝間に違ひないヨ、予が歸て其方が這入っていたらアレ

〜とか何んとか云ふだらうツて旦那に受命つて来たんだらう容ア見やアが

れ落語家泥棒ステ、コ泥棒メ

盜「人を馬鹿に爲やアがるナアー眞實の泥棒だぞ可怖ないか

權「オ、可怖〜

盜「人を馬鹿に爲やアがるナアー

權「和郎は何んてエ泥棒だエ

盜「乃公か乃公は石川五右衛門の身内で四右衛門てエのヨ

權「オヤ四イちやんてエのかエ

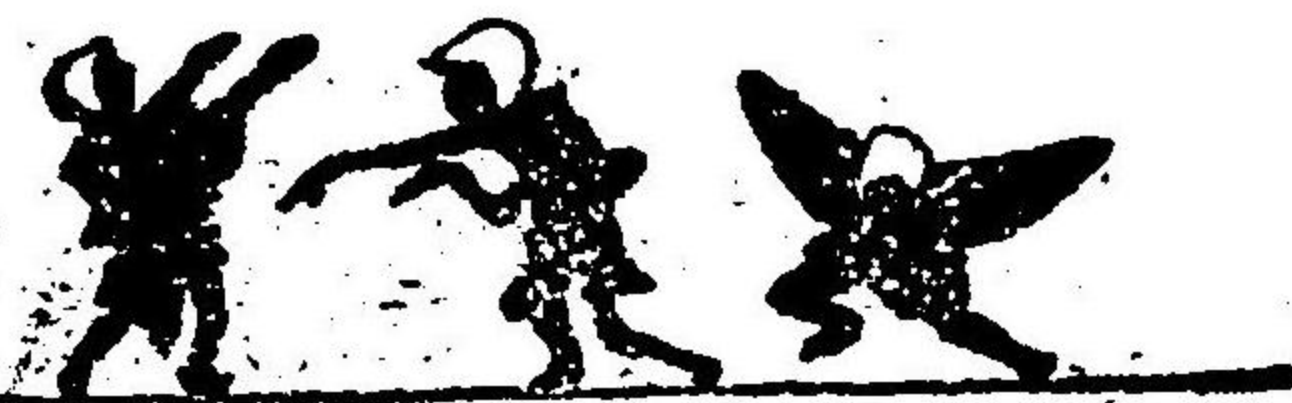
四「何んだ四イちやんとは此ん畜生…………

權「嬉しいぢやアないかネ大變に嬉しいノ妾は斯う見えても大變に泥棒が

好なノ泥棒の熱心家だヨ

四「人を馬鹿に爲やアがるナア…………此女は狂人か知ら





權「妾は斯う見えても和郎のお仲間だワ

四「エ……驚いたな仲間か其奴ア些とも知らなかつた堪忍して呉んねへ

權「妾は高橋お傳の妹サ

四「アノ群馬縣下の

權「ア、おでんの妹のお芋てエんだヨ

四「人を馬鹿に爲やアがるナアーおでんの妹のお芋てエのが在るけエ

權「夫れは虚言だヨ

四「泥棒に虚言を吐く奴が有るものか

權「ダカラ妾は懲役人を見ると無暗に岡惚れをするノ赤い着物に鎖の帯が

好く見えるの和郎さん後生だから五十圓計りのお金に眼を着けないで妾々

るみ窃んで往てお呉んなさいヨ

四「ウン大變な事に成た子夢ぢやアないか知ら、此飲んで居る麥酒が殊に

寄ると馬の尿 かも知れねへ

權「ぢやア忌かい

四「ナニ忌ぢやアねへ

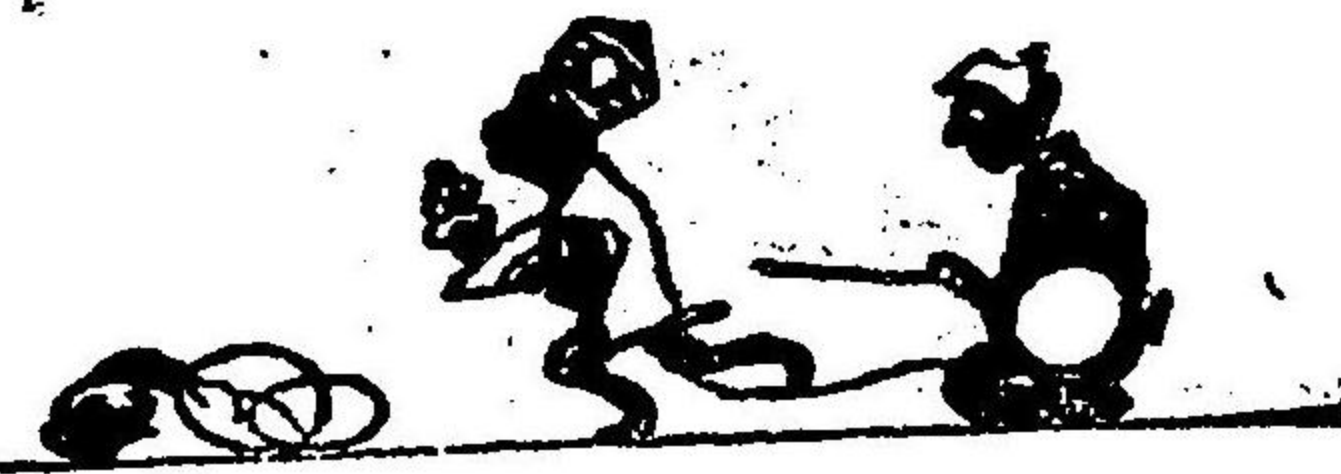
權「否でなければ宜いぢやアないか

四「本當かい

權「本當かッて女の口から一生懸命に是丈けの言を吐んだヨ







四「ウン驚いたな宜いかイ

「妾の口からは是丈けの言を云ふんぢやアないか

四「然んならば予は話をするがおれが爰へはいつた時は慄として身の毛が

よだつせ家に在る五十圓の金を奪た境に和女を……

「オヤ好い調子だこと忌だヨ、チヨイと虚言を吐くと肯ないヨ虚言を吐

くと泥棒に……最う或て居る千和郎が本當に然う云ふ氣なら何にも角も

スツカリ打明すが五十圓計りぢやアないヨ未だ有るヨ旦那から預たお金が

貳百圓に宅の所有物から何から何までスツカリこかせば五百圓位のは

有るヨ其妾の懐にも少しは有るから千圓のお金を持って逃げンぢまふぢや

アないか跡は野となれ山となれサアノ湯治に往うぢやアないか熱海は宜い

ネまた冬は熱海に限るヨ暖かくツて大變身躰の薬に成るとサまた伊香保も

宜いネ實に伊香保位好い處は餘りないと思ふワ夏は暑くなくツて蚊は居す

本當に好いちやアないか種々ナ落語家や講釋師が居て私は三遊亭圓朝で御

座います杯と云て克く視ると何んでもない落語家なの彼地の方の唄を聞い

て覺えてるが餘程不思議だヨ

盜「ヘエー

「予が村では五年已降不作が續き姉を賣うか妹を賣か姉は疤痕で金には

なアらぬ妹賣うと相談決定てノンマに蝶々の裾模様付けて卒や是れから參





るで御座る向ふの叔父さん叔母さんさアらば出て、来たのはサー三國の  
 峠……ヤツトコトン、トコトン〜（嘆し）

「然んな事をしたり種々な保養を爲て歸て来たら何にか始めたいと思ふ  
 がアノチヨイと藝者屋を爲やうぢやアないか和郎を藝者屋の主人さんにし  
 て遣るのだヨ併し多淫さうだから和郎は屹度宅の藝者を口説くだらう

盗「ナニ口説きやアしないヨ

権「口説くヨ

盗「口説かないヨ

権「屹度かい

盗「ア、

「然らう事が極れば和郎を兄哥さんに爲て遣らう結城袖打扮が何にかで好  
 い扮装をさせて懐にお金の五十圓も入れさせて置いてあげるヨ、だから交  
 際ひは外しちやア否だヨ劇場でも相撲でも寄席でも交際を外すと男の耻だ  
 から何處へでも往て下さい併し和郎の歸りが遅いと妾ア嫉妬を焦ヨ大變な  
 チン〜だから武者振付くヨ然らうすると打たり叩いたりするだらう妾は嗜  
 た男に打たれるのが嗜なの打て呉れるかい

盗「中々打ちやア爲ねへヤ

権「如何するノ





「盗」撫らア……………

「權」忌だヨお打ヨ宜いかイ

「盜」ア……………

「權」忌だヨ……………チヨイと大變な事が有るノ交際ひは何にを爲ても宜いが  
アノ女は容色が宜いから如何かしてやらうツて妻を本妻にさへして呉れ、  
ば權妻にして置くのは介意ないが一緒に居るのは妾ア忌……………何んでも爲  
て宜いから

「盜」ヨシ〜ウン〜宜いかイ本統かイ今夜は泊るゼ

「權」夫れは不可いヨ



「盜」奈是エ

「權」奈是だツて二階に間諜が居るぢやアないか

「盜」洋犬かア

「權」戲談云らやア不可いヨお芽出たいネ旦那と大變交情を睦してエるお友  
達が酔倒れて寐て居るノ

「盜」然うか些ども知らなかつた

「權」アノ鹿兒島暴徒の首を二十も討た剛勇中川參謀と二人で田原坂を破て  
來た程の人なノ

「盜」エ……………些とも知らないで先刻から大きな聲を出して





樞「大丈夫だヨ聞えないヨ金銀だ

盗「然んならば宜い

樞「未だ不可いヨ隣家に警部が五人居るヨ

盗「エ……………其奴ア驚いたなア……………

樞「今夜丈けは許して進るから吉原でも埋地へでも往てお出でヨ其代り妾と夫婦に成てから其様な事をするよ肯ないヨ

盗「ぢやア吉原へ往て来るヨ

樞「和郎はん幾らか持てるかい

盗「ウン他家で稼いで来たのが二十圓有らア



樞「其金を此方へお出しヨ夫婦に成て見れば亭主の物は女房のもの女房のものは亭主のものだヨ容ア見やアがれチンケータウめ唐の鶏と思てるから此方へお出なさいヨ

盗「アイヨ……………是りやア驚いたなア

樞「此中で以て妾が和郎に貳圓介給與るから……………サア

盗「僅た貳圓かア……………

樞「澤山だヨ餘り澤山持てくと家の經濟に拘るヨ

盗「ぢやアお内儀さん往て来るせ

樞「何んだネ忌な奴だネ妾は名が有るヨお梅てエんだヨ





盜「然うカイ……ちやアお梅さん

梅「女房にさんを附ける奴が有るかい曳掻く……」

盜「宜いヨウ……ちやア名を云ふヨ……何んだアノ……お梅……」

梅「何んだエ

盜「往て来るヨ……」

梅「チヨイ〜と未だ和郎に云て置くことが有るヨ何れ明日の朝歸て来るんだらう

盜「明日の朝歸て来て宜う御座いますかまた晩に参りまして宜しう御座いますませうか



梅「忌な奴だネ亭主だから和郎の權に任せて勝手におしなさいよ

盜「ちやア明日の朝勝手に直ぐに歸て来るヨ

梅「不可いヨ明日の朝は

盜「奈是エ

梅「奈是だツて旦那がもし来たら困るだらうソラ所有物をこかさなければなるまい

盜「ウン〜

梅「夫れだから旦那の居ない處で悉皆り仕末を附けて仕舞はなければならぬ……が若し旦那が来て居たら斯う爲やうぢやアないか





と云はれてボンと手を打ち

盗「ウン然う爲やう

梅「未だ何んとも云やアしないヨ、家の前に鹽を出して置くから其積りで宜いかイ夫れを目標にして鹽が出て居なかつたら威張て這入て來てお呉んなさいヨ

盗「ウンなかつたら

梅「後生だから貶度歸て來てお呉れヨ

盗「アイヨ……ぢやア鹽が有たら這入て來ません何處かで遊んで又來ら

ア

梅「然うサ鹽が無つたら構はずガラリと格子を開けて這入てお出ヨ

盗「ウン……ぢやア往て來るヨ

と泥棒はスツカリ此女に欺されて表へ出ましたが奴さんスツカリ色男の丁見に成つちまひ此晚吉原の小格子か何にかへ登樓まして翌る朝早く女郎家を出ましてニコニコ爲ながら

盗「どうも人間も間が宜くなれば斯う云ふ譯で

と腹の中で天狗を云ひながら歩いて來て見ますと鹽が出て居ますから

盗「オヤ〜此奴ア旦洲が來て居るな最う一ト廻り爲て來やう……何にしる有難エな婦人が甚く手に惚れてるからなア彼の婦人の處に金が千圓有





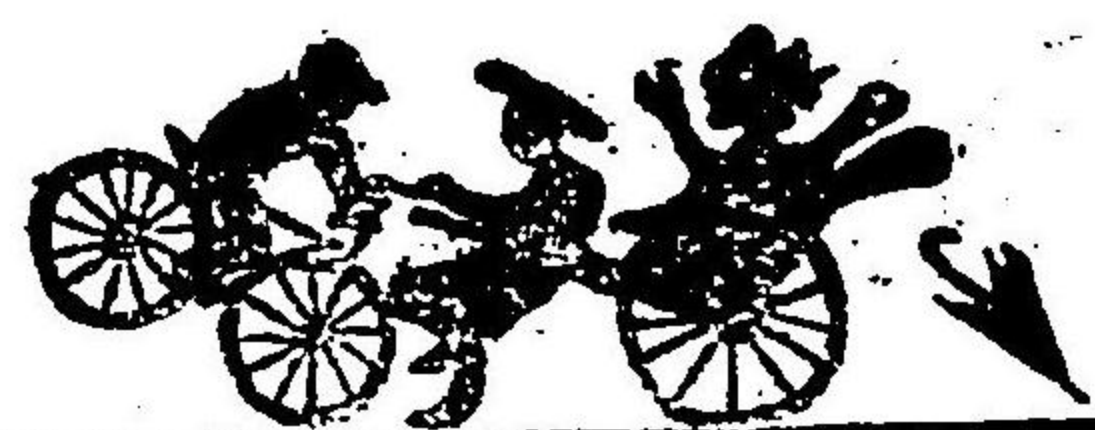


るんだが彼の位な粹な婦人を嬖アにして方々歩行いたら大變な譯のものだ  
 チウン手は方々へ往くに彼奴を連れて友達に看せて歩行かア劇場へも一人  
 ぢやア往ねへ予の嬖ア然と傍へ坐らせて衆人に羨ましがらせてやらア本統  
 に好いお内儀さんだ美しい女だと言れて見てへ……  
 往來「何を爲やアがる突當りやアがつて  
 盗「へエ……御免下さいまし……ア、未だ家の前に盜が出てエるが何  
 時まで何にを爲てエやがるんだらう……フ、彼奴め甘く胡麻化さうと  
 思て旦づくに種々な言を云てるんだ……ハア往けませんヨ女は予に惚れ  
 切てるから當りが悪いんで旦つくも心配に成て來るから種々な言を云て氣



を曳いても往けないヨ俺と云ふ情夫が茲に居るから如何な奴が來たッて仕  
 方がねへヤ……申戯ぢやアねへせ未だ盜が出て居らア驚いたな最う三時  
 問斗り經つが何時まで居やアがるんだらう爲やうがねへな最う一ト廻り廻  
 て來やう……併し何んだネ家へ往たら彼奴も悦ぶだらうし俺も嬉しいし  
 ハ、堪らねへな二人の中へ小兒でも出來た日にやア俺は最う盜賊は止め  
 るヨ然うして何にか商賣をするネ何んでも勝手の好い事を爲てへな俺の身  
 躰が樂で嬖にやらせる事でなければ往けねへが矢張り彼奴の云た藝者家が  
 宜らう女は出來るから……オヤ未だ出てエるか如何したんだらう申戯ぢ  
 やアねへせ何時までだか譯が解らねへやチヨイと覗いて見やうオヤ、誰





男「ハイお隣の何んで御座います明店で御座いますか  
 盗「イエ右方のお梅の家で  
 男「ハア和郎さんは梅と被仰るからにはお梅さんのお身内でお在なさいま  
 すか  
 盗「へ、ノマア左様で  
 男「マアお掛けなさいお隣のお梅さんの家には大變な珍説が有ますからマ  
 ア〜腰をお掛けなさい……………婆アさんまた笑ひ始めては不可へ……………ア  
 ノ通り昨夜から笑ひ續けて御座いますが今また云ひ出したら失笑してま  
 すが餘程可笑い話有ますからマアお掛けなさいヨ



も居ねへせ是りやア變的箇だぜ障子も何にも建て居ねへ此奴ア驚いたなア  
 何にも無へやうだぜ尤もこかす積りだから都合も有るだらうけれども併し  
 驚いたなア何うも變だア、居ねへ〜如何しやアがつたらう驚いたなア…  
 ……ハテナ……………隣の家で聞いて見やう……………へエ御免下さい……………  
 男「ハイお貰を上げますか  
 盗「ナニ俺は貰を買ひに來たのぢやアない少々お聞き申たい事が有て來ま  
 したが  
 男「へエ〜何んで  
 盗「お隣の家で御座います





「驚へエー如何なお話で

男「ナニ昨夜お隣のお梅さんの處へ宵の中旦那さまがお入來に成たさうで  
すが直さにお歸りに成ましたのでお梅さんが旦那を送出して奥へ來て見る  
と泥棒が火鉢の前の布團の上に大胡座を掻いて安座つてたさうで

驚へエー成程

男「何んだと思ふと其奴が泥棒で和郎さんマア五十圓とかのお金を旦那か  
ら預て居る事を立聞きしてエまして其金を出せ若し出さんければ二尺八寸  
強刀もの虚飾には差さぬへと威張たさうでお梅さんも突然だから驚いて如  
何しやうかと思つて漸々泥棒の氣を曳いて視ると人間が間拔けたから種々歎

したさうで

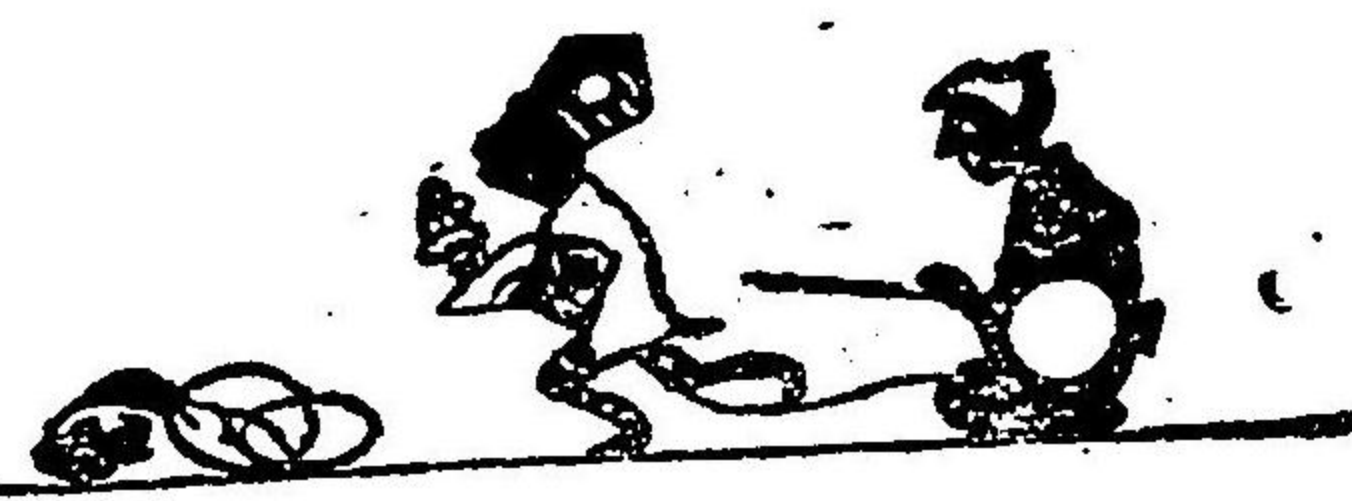
「驚へエー成程……」

男「處が彼は中々やつたもので前橋の方でも稼げば信州へ往たり静岡へ往  
たりして彼方此方の田舎を稼いだ婦人で義太夫語とか何んとか云ふので大  
變に方々遊んで來た人だから中々人間が摺れて居て下ッ腹に毛のない婦人  
だけに其泥棒を色仕掛けに爲たさうだが間拔けな野郎サ始めて這入た家で  
女に甘い言葉を掛けられたツて其言を本氣にする奴だから餘程間拔けの奴  
サネ

「驚へエー成程間拔けですネ







男「夫から和郎さんトウ〜欺して其泥棒を歸して仕舞ひましたとサ

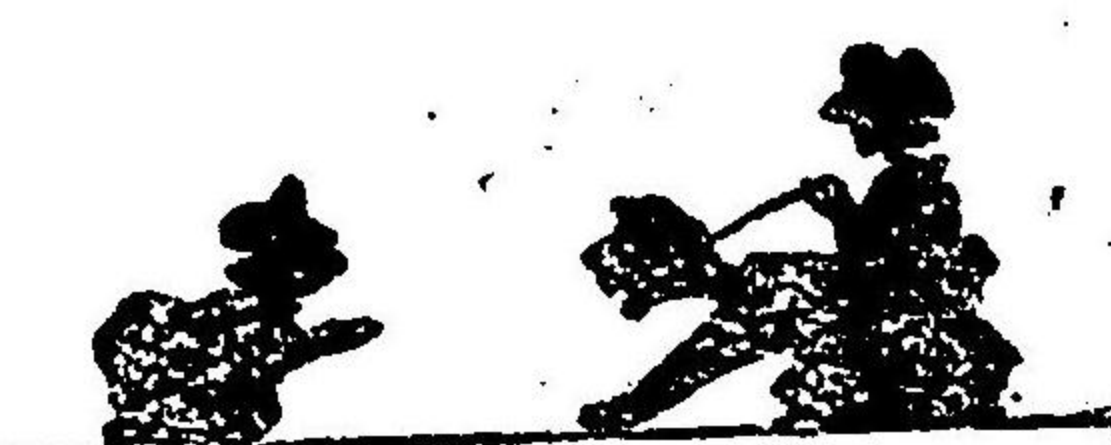
盗「へエー成程……」

男「直ぐに旦那を呼びに遣て斯う〜斯う云ふ譯だと云ふとナニ泥棒だから介意ないと云た處が和郎さんお梅さんが泥棒から金を貳拾圓取たとサ引合ひでも附くと不可い斯うしては居られないツて昨夜の内急に家を引拂たら宜からうてエのでガタビシ終夜私共では寝られませんでしたか明方に何處かへ轉宅をなさいました

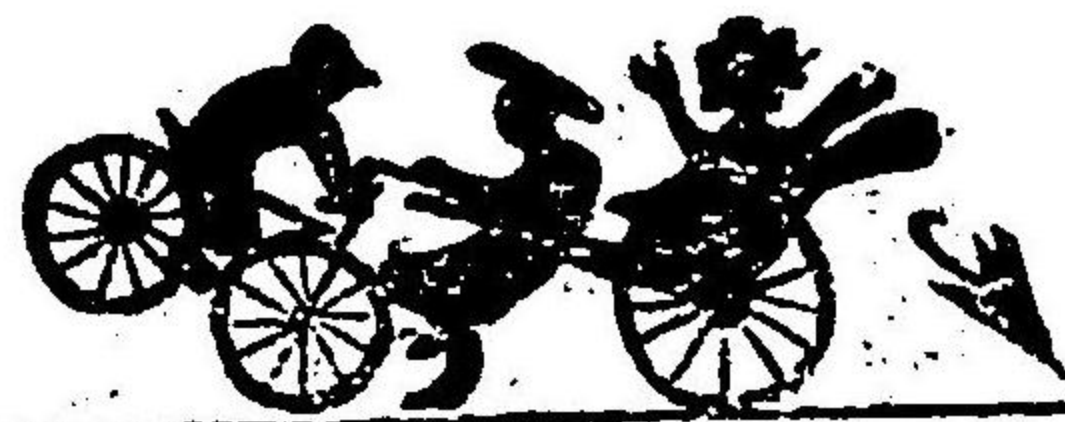
盗「エ轉宅(洗濯)をなさいましたと、道理で盥が出て居ました (完)

錦囊

エー一席伺ひますエー毎度お馴染のお咄を申上ますが往昔と只今とは違ひまして種々變化て参りました尤もお咄ばかりではムいませぬ萬事變化て参りて言葉迄變り當今では君だの僕だのと申し他人の事を君と言ひ自分の事を僕と申します夫れ第一お形装が變化て参り夫から情と云者が往昔とは大變に違つて居ます往昔はお女中を大層悪く致しまして女は三界に家なしとか申しまして宿無の様に致したんですが當今は然んな事は御座いませぬ男女同權とか申し夫を中には男女唐犬と間違へて亭主の向膳へ食ひ附くと







云ふ威勢に成りましたから情は大變に違つて参りました往昔は無暗に女中衆が殿方に惚れるにも眞實に彼人は鳥渡と様子が宜い彼人は奇麗だの彼人は裾捌きが柔らかで宜いのと詰らない處で惚ましたが當今では皆何うも容色には惚ません伶俐な人でなければ逆も往ませんで女中の方が氣が伶俐に成て居ます忠臣藏七段目のお輕に兄の平右衛門が向ひ

「平」コレお輕親父様は六月廿五日の夜人手に掛つてお果成れた又早野様はお腹を召ておなくなり成れた

と云はれてお輕は

野ムーン

と云て目を廻しますが此節のお輕は開化して彼な事は言ません進歩しましたから膽が坐つて居ます

「平」親父様は六月廿五日の夜人手に掛つてお果なされた

「輕」仕方がないやねエ年に不足はない彼な死様したが世の中にない事だと

諦めてお仕舞ひお主の體でも悪くすると往ないよ

「平」勘平さんは腹切て死んだはやイ

「輕」オヤ眞實に馬鹿げるヨ妾は否に成つちまつた一緒に逃げる時にアノ立廻りは氣障だヨシン／＼端折の形は能くないヨ夫れにどてッ腹を切てエのは間違て居る彼な人はない鐵砲疵か刀疵か能く見れば宜いのに眞面目に腹





を切て仕舞ひ仕様がなない彼な粗暴かしい人はないと思てるから安心してお  
呉れ妾は最と能い亭主を持ち往々は何か商賣でもする亭主を持つから安心  
してお呉れ……

平右衛門は困りましたお輕は目を廻しません

平「アレお輕

輕「何で御座います

平「其方に頼みがある聞いて呉れ外の事ではない百圓の金を貸して呉れ  
夫を聞いて御輕はウーンと目を廻しますと云ふ大變に違つて居ます往昔も  
今も變化りませんのが慾情で有ます慾も種々有ますが三段に有ますト等の



慾はお客様が彼人がアノ着物を持て居るが着て見たいアノ烟草人は持つて  
見たいと云ふのが上等の慾中等の慾は私共が大變に夜席掛持を致すのが中  
等の慾下等の慾は金錢に目が眩みます茲に舊幕の頃淺草の山谷堀に吉田屋  
と云ふ舟宿が有ります其家に船頭の熊五郎と云ふ者が有りますが毎晩の様  
に寐言を言つて又其寐言は奇天烈で

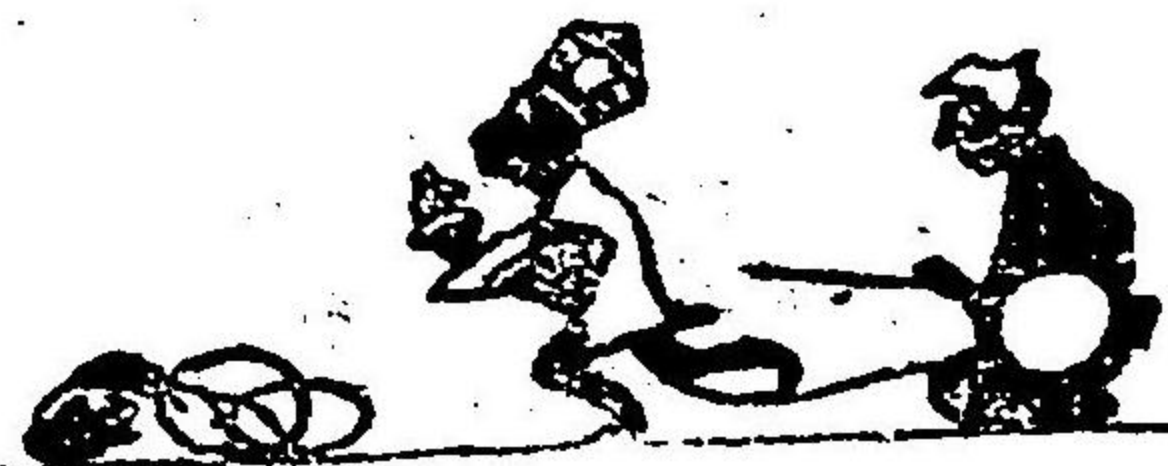
熊「欲しいなく金圓が欲しいな

吉「仕様がねへぢやアねへかお光

光「熊の野郎だらう眞實に呆れるよ無言つて寐ろ

熊「甘雨欲しいな誰か呉れ、ば宜いな……誰か呉れる





と頻りに寐言を言て居る所門口の戸を大聲でお武家様が年の頃三十計り眉尻の上つた春廣の羽織に舊弊頑固頭一邊に鬢附油の三十六本も入ると云ふ叩くとゴン／＼と云ふ音がする恰で番木を見た様な者で黒羽二重の紋付きと云へば體裁が宜いが黒が赤く成つちまつて赤羽二重の黒紋の羽織献上博多の帯と云つた所がと言つた切り跡は片なし淡島様を見た様に襦袢が下つて居ます大小を落し差に致し雪の降るのに唐牆で高端折素跣足で傍に居ますのが年の頃十六七に成ます娘宜い女でお召縮緬の小袖に蝦夷錦の帯を占め小紋のお羽織にお高祖頭巾を被ぶり文金の高橋柔和に製へブル／＼震へて居ます



武「ヤ心配せんでも宜いよ／＼心配しては往んトシ／＼」  
 武「一寸開けて呉れんかコラ一寸開けて呉れんか」  
 亭主「へエ」  
 女房「何で返事をするんだね」  
 亭「だつて開けて呉ると云から」  
 女「申戯ちやアねへ此頃は物騒だ方々へ押込が這入るヨア、大方二階で熊の野郎が甘雨／＼と云て居るから多分金の勘定でもして居ると思つて來たんだから泥棒に違ひないよ這入て來た日にやア大變だヨ返事をしちまつちやア仕方がない謝絶てお仕舞……只今二階で甘雨／＼と申して居ますの





はお金の勘定では御座いませぬ船頭が寐言を申して居ますとお謝絶成さい

亭「然う仕様……エー借ハヤ

女「軽業を見た様だね

亭「然旨く往ないよ……エー只今廿兩と申して居ますのは金子の勘定ではない熊と云ふ船頭が寐言を申して居ますお泥棒様此先の薪屋の隠居が金子を持って居ますから彼處へ御出張を願ひます

武「何を申すんだ開けんければ此戸を打破ッて這入るぞ

亭「エー打破ッて這入るとヨ

女「夫御覽よ大變だね

亭「何仕様ね

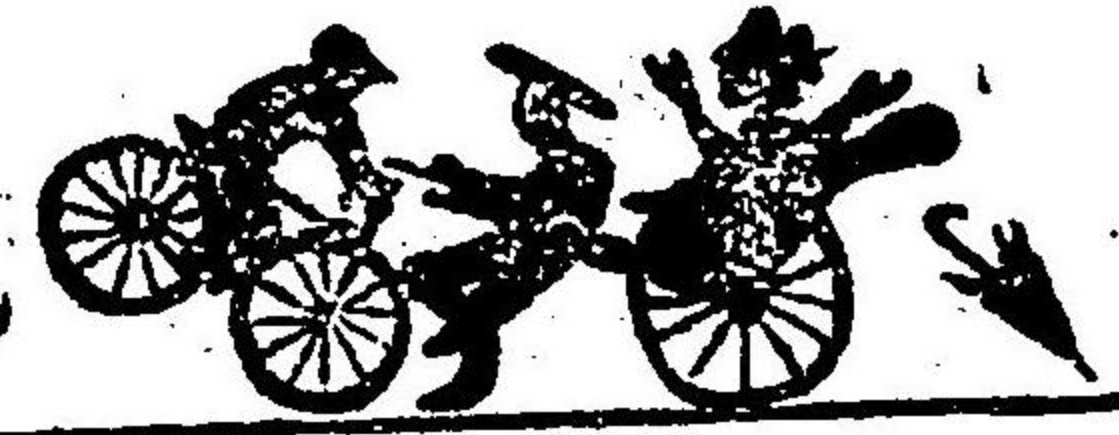
女「何仕様だつて仕方がない開け様若し泥棒だつたら金盃を持って大きな聲をして叩くんだ然すれば直に近所の者が起きて呉れるから知れない様に未だ叫いちやア早いよ……

と門の戸へ手を掛けましてガラリと開け

亭「お助け成すつて下さいまし

武「何だ

亭「命計りは何卒お助け成すつて下さいまし







武「此方は怪しい者ではない……」

女「然なら泥棒ぢやア有ませんか

亭「失禮な事を言ふな

女「ハア左様で御座いますか此方へお入り成さい

まし

武「今日妹を連れ芝居を見に参つたが遅くなり此雪で難澁を致すに由て

大橋迄屋根を一艘仕立て貰ひ度い

亭「入らつしやいまし……お客様だよお光

光「ソラ御覽成さい泡をお食でないヨ

亭「泡を食たんぢやアねま……」

光「入らつしやいまし誠に何うも失禮を申しまして御勘辨を願ひます……」

……エー何邊までお出に成ます

武「大橋迄

光「左様で御座いますか……造作はないから熊を起しませうか

亭「熊は起まいから河岸へ往て誰か呼で来て呉んねエ

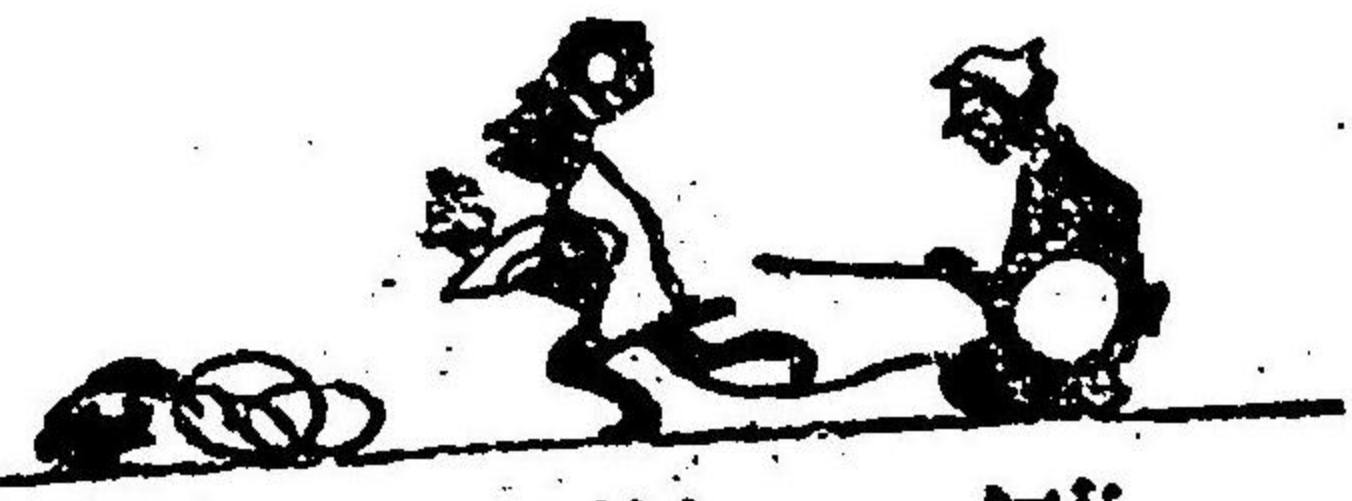
光「居れば宜う御座いますか……」

武「コラ熊五郎は居るのか

亭「ヘエ二階で寐言を申して居る野郎で







熊「欲しいな甘雨欲しいな」

亭「アノ野郎でゲス大變に欲張て居ますからお客様をお乗せ申すと酒代の無心を致し御氣の毒で御座いますから」

武「苦敷うない何卒呼起して呉れ固より少々の酒代を遣すから熊を起して呉れ」

亭「左様で御座いますか」

熊「熊公を起しても起ぬへ横着野郎だから怒鳴らう……熊や〜……」

熊「甘雨欲しいな」

亭「未だ云つてやアがる大橋迄屋根が一艘出るんだ往て呉んねエ」

熊「エ、……ヘエ……ヘエ……エー大橋迄往んでゲスカ申蔵言ツち

やア往ませんせ火鉢を抱へて居ても寒くて堪へ付られねエに之から船へ雪が掛つては尙往れやせん酒代にも成ないで誠にお氣の毒様で御座いますか  
疝氣が起つて腰が突張て歩行けません何うか交代を遣てお呉なさいな  
亭「然うか酒代になるから汝を起して遣らうと思つたが仕方がない河岸へ往て誰か呼で來て呉れ」

熊「親方……参りますよ」

亭「汝は腰が突張て立ねエと云たちやアねへか」

熊「へエ最う全癒ました」





「ア、云ふ野郎でゲス……早くしろ

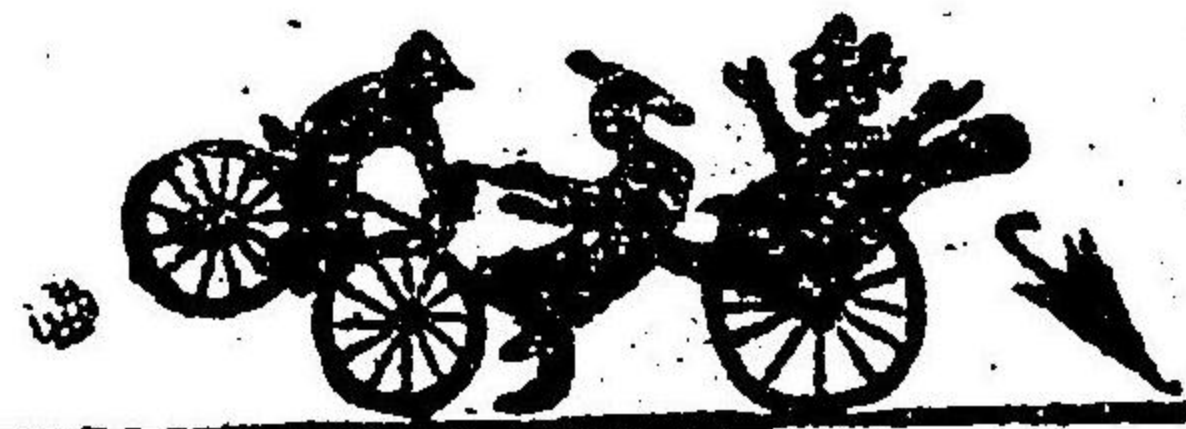
熊へイ畏りました

とグイ呑に酒を吞まして河岸へ参り細君さんはぶら提灯を左の手に持右の手にて舳を押ますがタンクには成りませんが其處は愛嬌の存る者で

一光左様ならお近い内に……

熊公は棹を一本空張りしましたから船は川の中へズイと出る水を掛けそ舳杭を濕し一生懸命で

熊「ア、寒いなア、寒い……ア、苛い寒さだ……ア、寒小寒山から小僧が泣て来る船頭も序でに泣て来る適々の雪の夜に起なくと起されて寝

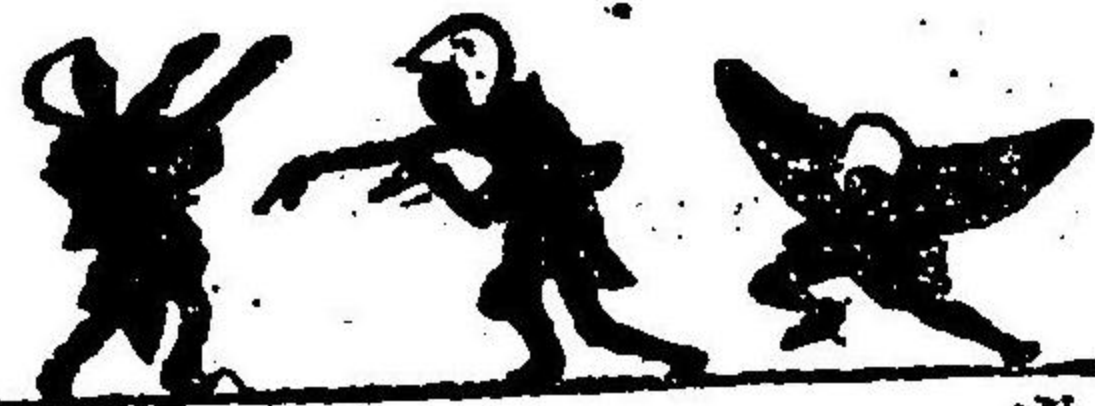


惚けた顔の有様は牡丹に戯る獅子の花堅川を横に三筋の渡守辛い家業で御座いますア、寒いな

と愚痴を翻し乍ら漕で参りました熊五郎は船の中をヒヨイと見ますと最前のお嬢様と云ふのが煙茶盆の火入と灰吹を取り出し箱を枕にして寝て居る亭主が細君の顔をデット見詰て居る

熊「コリヤア驚いた先刻二階で聞て居たが妹と言つたが可笑しいな早く酒代でも呉れよば宜い呉なければ體が續きません往に壹分呉れ向ふへ往て壹分呉れるよりは此處で呉れた方が漕振が違ふせ錢遣を知らねへサンピンだ早く酒代を呉れる





と獨言を言て居ますを船の中で彼の武家はガラリと障子を明け

武「船頭く」

熊公は腹の中で之れは聞えたか知らん

武「一寸繫へ」

熊「へエく、未だ参りませんので」

武「夫れは心得て居る……早く繫へ」

熊「今の事が聞えて威かされやア仕ねへか……へエ……」

武「一寸來い」

熊「へエ……へエ……」



武「只今何とか申したな」

熊「イエ何にも申しは致しません」

武「コレ船頭此娘は其方に何と見える」

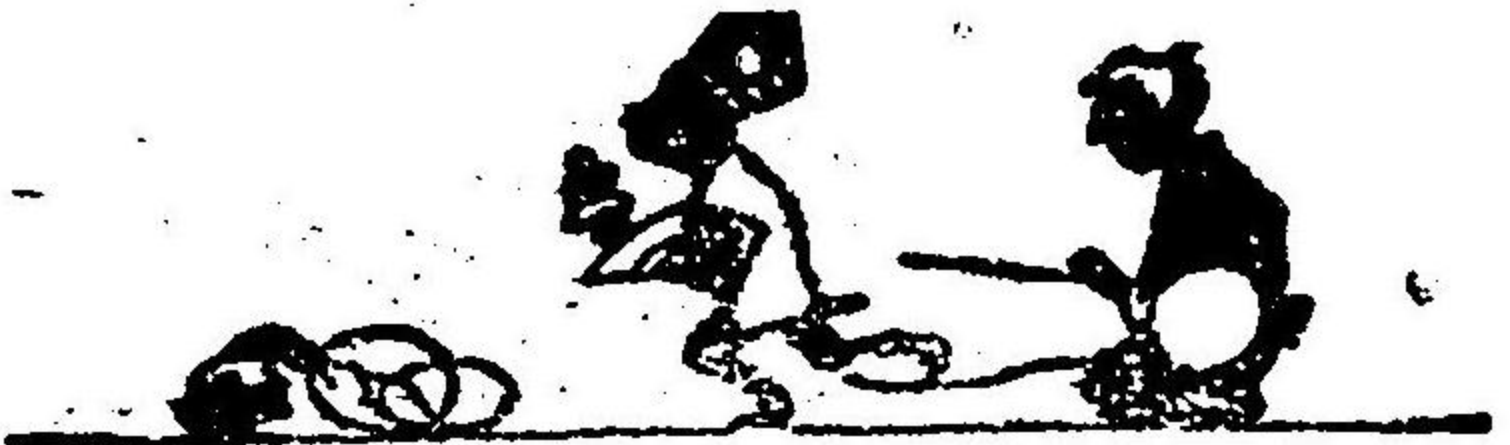
熊「左様で御座います先程二階で聞いて居ましたがお妹子では入らつしや  
いますか」

武「實は妹では無いぞ」

熊「然んならお樂みで御座いますか」

武「馬鹿な事を言ふな實は今日拙者が大千住迄用が有て歸りに吉原堤へ参  
ると此女が犬に取巻かれて難澁して居るのを追散したが驚いて癪を起した





から介抱しながら懐中へ手を入れて見ると二百兩所持して居るから此女を散々強姦だ上金を取って打殺すんだが貴様手傳つて呉れ

熊「エー……然なら泥棒で

武「静にしる

熊「コリヤア驚いた泥棒だ……眞實の泥棒だ……エー俺は人殺し、海

鼠は大嫌ひで御座いますからお断り申します

武「夫れじやア出来んのか」

熊「何うも出来ませんお断り申します

武「其換り一大事を明したからにやア命は無いぞ打放して仕舞う……」



熊「マア貴公君御前殿様マア〜待てお呉なさい大變な事に成た否てエば直にボカと殺されるしウンと言つたら人殺しの手傳ひだから惡事千里で知れずには居ない矢張命がねへんだ是は驚いたナ

熊「マア待てお呉なせエお手傳へ申します其代りお願へが御座います殺る丈止してお呉なさい熊の船に血が付て居るんで食へ込んだ日にやア詰らな

いから中洲までお出成さい俺がお嬢様を欺して中洲まで往き上ますから慰む共打殺す共勝手に成さい

武「ムー旨い氣が付いたナ

熊「夫れから殺すが宜敷う御座いませうか





と是から中洲迄船を漕いで参りまして武士は固より仕度して長脇差を抜  
居合腰になり先へ洲へ上り待て居て

武「早く致せ〜」

熊「へエ……」

武「早くしろ」

熊「へエ」

と云ひ乍ら熊公は向川岸の方を見て（尤も雪明りで能く見えます）隙を覗  
つて熊公は最う一生懸命で船を漕出したので武家は驚ろき

武「コラ船頭……コラ何うしたコラ……僕は此處に居るよ」

熊「僕は其處に居たつて君は此方へ歸るから」

武「コラ……コラ」

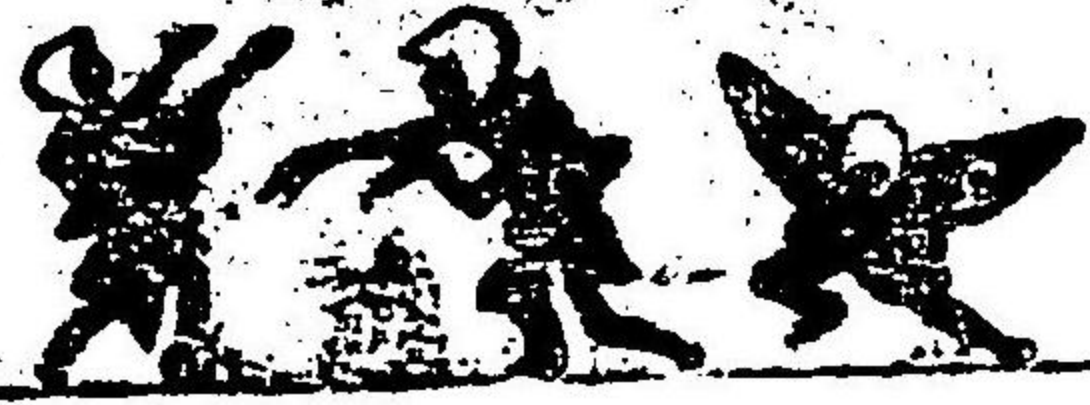
熊「笹棒め（船を漕ぎ乍ら）然な熊五郎じやアねへせ吾妻橋の熊五郎だ汝達  
に欺されて堪る者か宜い氣味だ泳ぎを知るめへ何時迄も其處に立て居る今  
に上汐に成て来れば土左衛門に成ツちまふぞヤイ馬鹿侍」

武「コラ船頭コリヤア困つたナ……助けて呉れ勘辨して呉れネ」

と云ふのを耳にも掛す向川岸へ船を付け娘に聞て見ますと本町三丁目の糸  
屋林藏と云ふ家の娘で養母に義理立より後先の考へ無く逃亡をする途中で  
斯云ふ事だと一伍四什を咄し全く親の罰で御座います







熊五郎は娘が何しても家へは極りが悪くて歸れないから止してお呉ん成

と云とのを無理やりに手を取て熊五郎は本町の糸屋林蔵方へ連れて参

りました親御様の喜びと云ふ者は大變で今日で三日目に歸て来たから一伍

四什を閉まして親御様は誠に喜びまして

林貴郎は娘の爲には命の親だ有難う御座います……是は誠に少々計り

ですが

と甘雨の金子を熊五郎の前へ出しました熊公は慾い〜と思て居るから

熊之れは大きに有難う御座エます……こんな嬉しい事はない眞實に下

なるんですか最返しませんよ……何うも恐れ入ます

と兩手に差揚て頂きますと火傷する程あついで眼が覺ましたら宵から抱

へて居ました畢九火鉢でござりました







### 羽織の女郎買ひ

エ、一席御機嫌を伺ひますエ、お話の方へ出ますものは眞面目では大概お笑ひには成りません何處か一調子容の變た人物が其處へ出ませんとお可笑く有ませんが落行く處は色情慾情に限りませんが殿方のお遊びでは女郎買ひ程愉快なものはないと申すが實に結構なものでお金さへ持て参ればお酒を飲んで旨い物を喰べて奇麗な娘さんに………歸るでんげすから此位の愉快は有ますまい中等社會から下等社會の者まで一度此お遊びにお往に成ますと随分夢中に成る事が有ます



### 狂女女郎買ひ振られて歸へる果報もの

てへ狂女も御座います振られるのは餘り果報じやア有ません同じ事ならば持てたいものでげす夫れだから朝吉原歸りのお方の歩行に付きを見ると持てたか振られたか直きに解ります持てた方は何處となく意氣揚々として往來を威張って歩行いて在ッしやいます振られた方は歩行くにも忌に萎縮くなつて圓太郎馬車の馬見たやうに盆鎗として軒の下を歩行しますから羨豆屋の招牌へ天窓を打附けたりして口を開きながら上を眺め

男成程昨夜は振られる譯だ茲にさせん豆と書て有る

と(い)を取て讀んじまひますが實にお女郎買ひ位ナ愉快は有ません





甲「ム、其奴ア豪氣だが金は有るけへ  
 乙「ドシと有るネ  
 甲「汝心易いのか  
 乙「ウン劇場へ往くにも寄席へ往くにも湯へまでも乃公と一緒でなければ往ねへんだ  
 甲「其奴ア豪勢だが如何だらう女郎買ひに往くかへ  
 乙「ム、ー……女郎買ひは少し六ヶ敷いヤ  
 甲「年齢は幾歳なんだヨ  
 乙「取て四歳なんだ



甲「エヲイ如何だエ往きてへナ如何だへ其方ア錢が有るか  
 乙「エ……ないヨ  
 甲「何時でもないね……汝は  
 丙「フ、生憎だ  
 甲「汝の生憎は二三年聞いてるせ  
 丙「ウン此鹽梅じやア最う四五年續かア  
 甲「仕やうがねへ奴だナ併し如何か爲て往てへナ何處かの金満家の若旦那を一ツ取巻いてランブで往きてへナ  
 乙「金満家の若旦那ア……有るヨ質兩替屋の子息だが如何だらう





甲「ナニ四歳ウ……毆打ヨ此ン畜生……小兒じやアねへか

丙「じちやア斯う云ふのは如何だらう四十歳てエのが有るが

甲「フ、何んだか芳町の桂庵へでも往たやうだナ四十二たア

丙「ウン

甲「女郎買ひにやア往くだらうナ

丙「其奴ア六ヶ敷い

甲「金が有てもか

丙「ム、一往けねへ

甲「何んだエ其奴ア

丙「エ、……取揚婆さんだ

甲「毆打るぜ……本當に申威じやア無へゼ人を馬鹿に爲やアがるね……

……何處に金満家の若旦那は……ウン横町の伊勢屋のキザ（半可通家の畧

言なり）をズツと取巻いて往うじやアねへか

乙「だッて彼奴はキザで堪らんもの

甲「夫れは忍耐をしる到底ヲンプで遊ぶんだから仕方がねへ……ア……

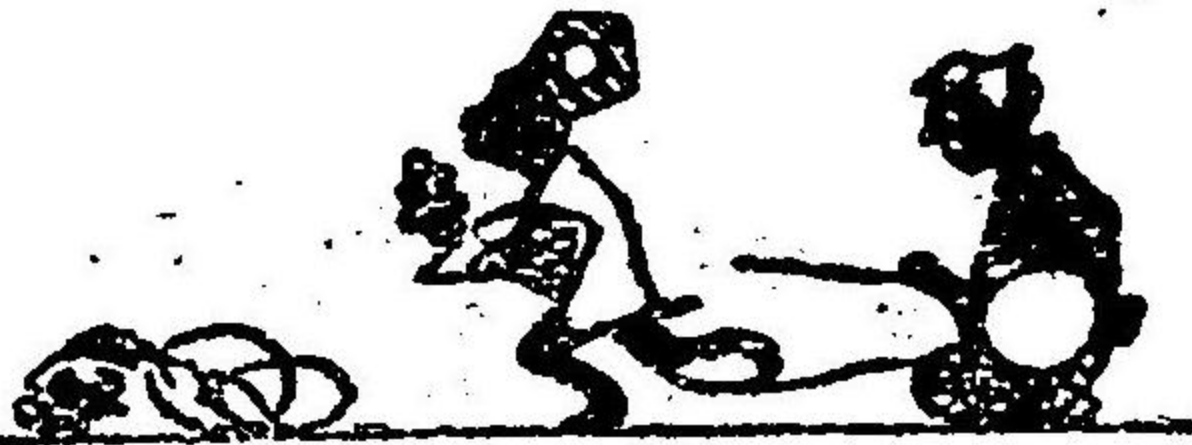
……噂をすりやア影だ向ふから來た〜……皆黙て俺に任せて置け……

へエ若旦那今日は……

若「イヤ是は何うも……（反身に成て扇を胸に當てバチ〜さす總て野







頼間の形容と知り給ふべし) 能く皆さんお揃ひでげすナ婦人殺しがお集り  
でげして.....

甲「へ、如何致やして狗殺しも覺束ねへので御座エやすが若旦那杯は男  
振が好ッてお金が在て其上身装が凝て、お持ち物まで行届いて在ッしやる  
から婦女の惚れるやうな器械に出来て居ますが昨晚杯は何處へお往なすッ  
たでげせう

若「昨夜杯はエ、樓へ参りましたヨ

甲「へエー.....何處でげすとへ

若「樓へ参りましたヨ

甲「牢エ.....へエ.....夫れは顔だ間違エで.....ヲ、皆んな聞いたか

若旦那は牢へ往たとヨ.....牢てエのは矢張りアノ懲役でげせう

若「へ、お解りが在やせんか青樓へフケたのでげすヨ

甲「へエー.....餅屋.....エ

若「フ、イエ北國へ参たのでげすヨ

甲「へエー.....大分遠方へ

若「イヤ未だお解りが在やせんて困りやしたネ吉原へ参たのでげすヨ

甲「エー.....然んならそうと早く云て下されば宜いに符牒で云ふから解

りやせん





剛勇伯父さんで

甲「加藤てエのは何んでげせう朝鮮で虎を殴り殺して二十四日が御命日の

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ア、是は恐入りやしたネ君河東杯を御存知でげすか

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

甲「拙杯は重に一中を唄ますよ

甲「彼は腰が冷へなくツて宜うがアすけれ共裸体に成た恰好が悪う御座い

ますネ帆掛船が難船に遭たやうな鹽梅しきで

若「ア、是は恐入りやしたネ君方のは藝ではない惡戯けなんで

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「加藤てエのは何んでげせう朝鮮で虎を殴り殺して二十四日が御命日の

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ア、是は恐入りやしたネ君方のは藝ではない惡戯けなんで

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「加藤てエのは何んでげせう朝鮮で虎を殴り殺して二十四日が御命日の

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ア、是は恐入りやしたネ君方のは藝ではない惡戯けなんで

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「加藤てエのは何んでげせう朝鮮で虎を殴り殺して二十四日が御命日の

若「ウ、夫れは感服でげすナ

甲「エ加藤ウ……彼は知てます

若「ア、是は恐入りやしたネ君方のは藝ではない惡戯けなんで

甲「エ加藤ウ……彼は知てます



笛

若「昨晚終夜婦人が私を寢かしませんでした

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー

若「二時頃に頬の邊を喰ひ附きやしたネ三時二十五分の時が臆で明方が喉

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー

若「二時頃に頬の邊を喰ひ附きやしたネ三時二十五分の時が臆で明方が喉

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー

若「二時頃に頬の邊を喰ひ附きやしたネ三時二十五分の時が臆で明方が喉

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー

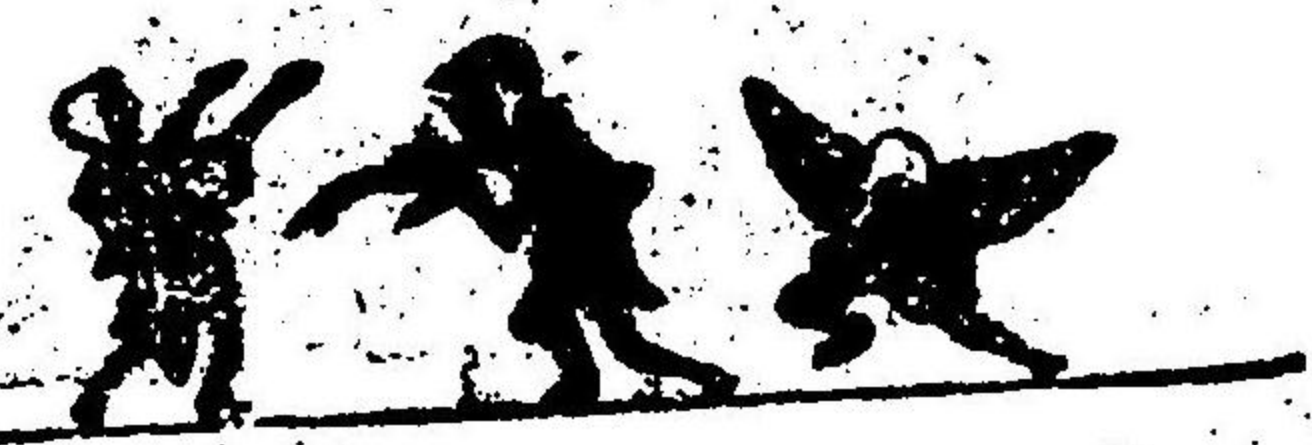
若「二時頃に頬の邊を喰ひ附きやしたネ三時二十五分の時が臆で明方が喉

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー

若「二時頃に頬の邊を喰ひ附きやしたネ三時二十五分の時が臆で明方が喉

甲「ホーラ徐々にお出なすツた……へエー





若「フ、君のは加藤清正で拙の云ふのは一中節河東節の事を申すのでけ

すヨ  
甲「へエー……節は矢張りイ（瀬戸物町にて有名なる燈節問屋の通稱）

が宜いそうでダシが一番利くそうでげす

若「ホ、何にしる拙の申す言が些とも感じないのは恐入りやしたネ併し

御同伴致やせうか

甲「へエー

若「御同伴致ませうかネ

甲「へエ……竹エ……

竹「ナニ

甲「汝御同伴てエものを知てるか

竹「知つてるのヨ

甲「何んだ

竹「何んだつてム、ウ御同伴は買ったんだがア………火事の時焼失まつた

甲「夫れッ切り御同伴を買はねへのか、大切に爲て置けば宜いに………へ

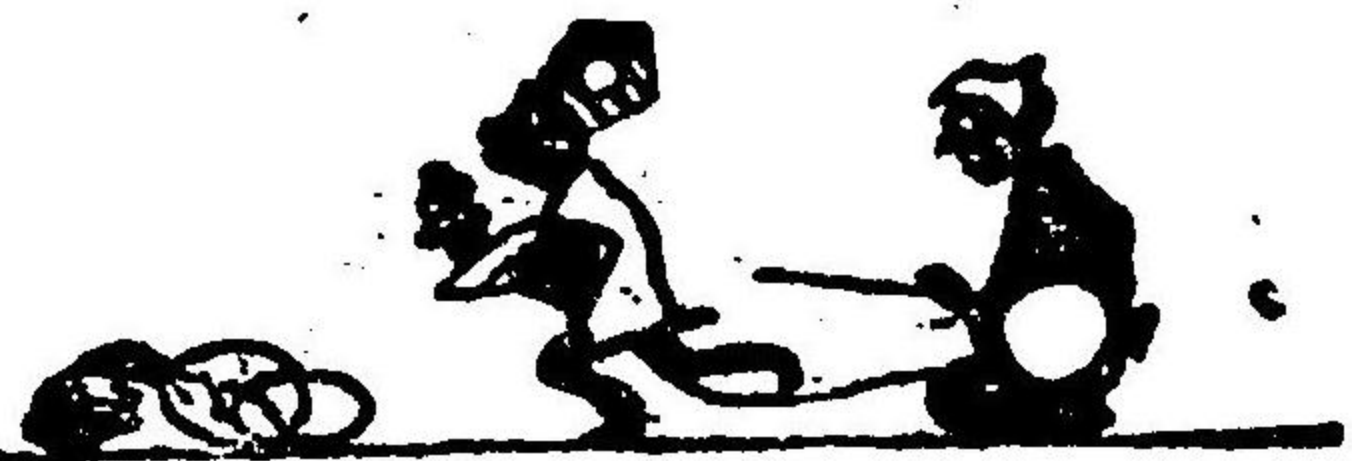
、若旦那御同伴はソノ竹の野郎の處に在たんでげすが火事の時みんな

無くしつちめへやしたがへエ賊にお氣の毒さまで

若「フ、實に如何もフ、君方はフ、お腹を捻ますネ御同伴てエのは







品物ぢやアないヨ御一緒に参ます事が御同伴で

甲「エ、然うでげすか……ヤイ此ン畜生ウ

竹「アハハ、

甲「笑ふねへ笹棒めヨ知らなければ知らねへと云やアがれ詰らねへ言を人に云はして耻を搔せやアがツて

竹「フ、予も何んだか知れねへから汝に云はして見たんだ

甲「悪戯るねへ若旦那が御同伴に連れてつて下さるとヨ……へ、何卒

か願エます

若「併し君方の三尺帯では不都合で何卒お羽織と帯を算段して呉れ給へナ



拙の活花の朋友の積りに爲ますから

甲「エ宜しう御座エやす……皆な三尺帯では不可へんだ羽織と帯を算段

すれば只連れてつて下さるてエから皆算段しやうぢやアねへか……ぢやア

若旦那横町の碁會所に少し待て、下せエ逃げると罰金を取りますヨ

と是から夫々皆支度を爲に参りました暫く経て歸て参り

甲「へエ若旦那お待遠うさま……

乙「へエお待遠うさま……

丙「お待遠うさま……

若「是はくお支度が出来ましたナ源ちゃん黒の紋附でげすネ……民ち





やんは小紋ですナ御帯が唐更紗でイヤ是はどうも始めて拜見致しましたが餘程奇體ナものでげすナ

民へ、面目ねへが實ア是りやア帯ぢやアねへんでげす年玉に貫た鳳は敷を四ツに疊んで三尺へ挟んだので前から見ると帯のやうだが後から見れば三尺だから前帯の後三尺で實は風呂敷です

と云はれ若旦那はボンと手を拍ちながら  
 若さうも是は宜うがアすナ……定ちやんのお羽織は大層短かいやうですナ  
 嵐小僧の知てる處の坊ちやんが學校へ往くてエのを無理に借りて来たんでげす



でげす

若餘程短かいネ

定エ、取て十一に成るん

若夫れぢやア短かい筈で

定ナニ是はネ疊んで傍へ置いて羽織の有る積りに爲やせう

若成程是も宜しいイヤ御趣向……流ちやん君はお夾襖まで所持は恐

入りやしたネ何うも中々夾襖まで氣の附くものではないが實に恐入りやしたチヨイと拜見したいネ

嵐へ、實は夾襖ではないので小僧ア全體瘦て居るから何んか懐に入





れねへと體裁が悪いからへ、是は煉瓦を一本渡ひ込んだんで

若、フ、煉瓦のお夾着此奴ア宜うがアすネ

熊ナニ冷えて参り宜うがアせん此奴を懐中へ入れてから最う小便に六通

往きやした

若面白いネ……熊ちやん君は帯がないやうでげすナ

熊エ小哥ア御座エやせん

若無くつちやア不可んぢやアないか

熊無くとも宜うがアす此野郎と彼奴と二人並べて其間から顔を出して往

きやす

若小便に立つ時坏は如何爲ます

熊其時は兩方のお臂をチヨイ〜と突ついて二人が立つに從て小哥も

摺り出しやす

若摺出すツて後から見えませう

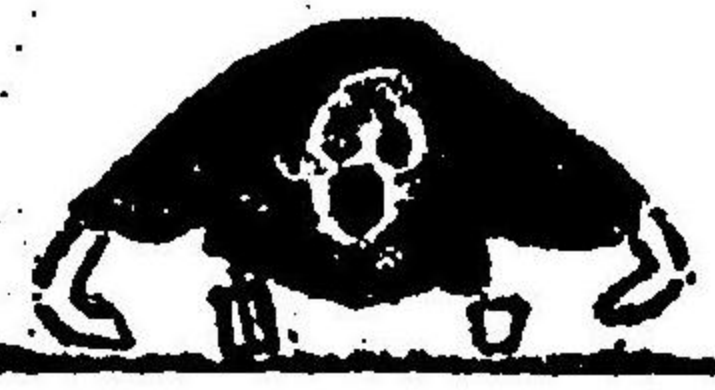
熊ナニ横に歩行いて往きやす

若フ、蟹ぢやア有るまいし夫れでは君丈けは後しての事サ

熊エ、宜うがアす今度に爲ます

若イヤ夫れは不可い君一人位無くても宜い……が那處で借りる處はな

いかネ隠剛な言な云ふやうだが







熊 差配人の處へ未だ往かねへから往て見やせう……エ、今日ア……

内熊 オヤ誰かと思たら熊さん

熊 誰かと思たら熊さんデ……(親指を出してレコは)家に居ますか

内 何んだニ親指なんぞを出して良人は少し用が有て山の手まで往きまし

たヨ

熊 羽織を着て往きましたか

内 當然へサ羽織を着ずに往くものが有るかね

熊 ぢやア最う跡に在るめへチ

内 失禮な言をお云ひでない貧乏しても羽織の壹枚ヤ貳枚は有るヨ

熊 有るウ……夫れを出してお呉んねへ

内 何んだエ突然けに……

熊 オヨイと今羽織が有れば儲るんで

内 然んなら然うと早く云へば出しても進やうぢやアないか……サア……

……

熊 成程……紋が附いてらア……大蛇の紋だ

内 ホ、大蛇ぢやアない澤湯だヨ

熊 然うか成程……(引掛けて着て)是は宜いが如何でけすニ能く似合

ひやせう





内「然うサねへ

熊「左様なら……」

と云ひながら歸へりに係るから慌て押留め

内「チヨイと和郎何處へ往くんだ夫れを着て

熊へ、實はお内儀さん斯う云ふ譯で今伊勢屋の若旦那が今夜女郎買ひに連れて往くてエんだ處が帯と羽織を算段して來いてエと他の者は皆な出來たんだ小哥計り出來ねへんでげす直に返へすから何卒少しかして下せへまし

内「イエ不可いヨ往けません和郎は何にを貸したッてちやんと返した事が

ないもの

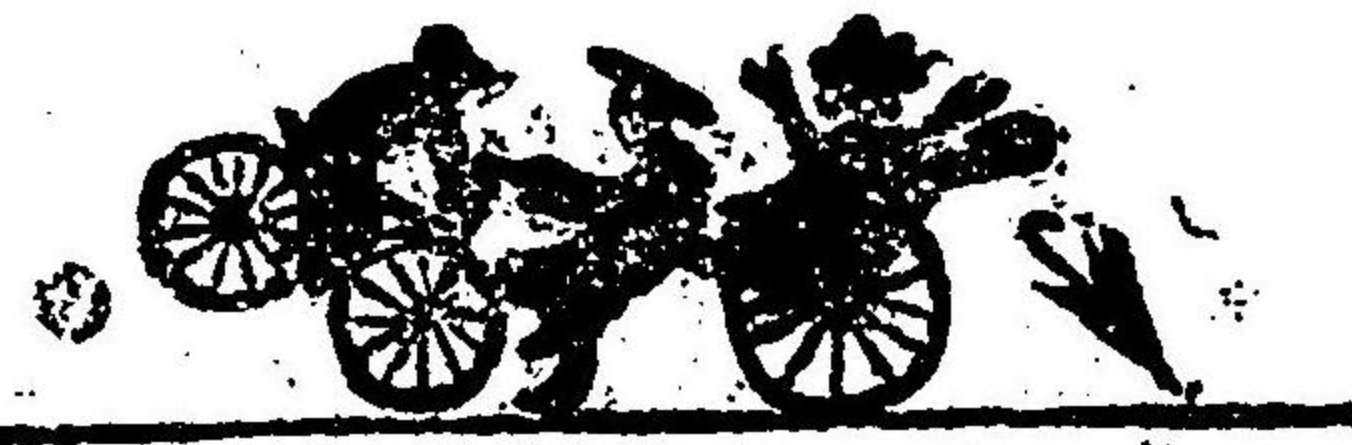
熊「アレ何んだッてちやんと持て來て返へすぢやア有ませんか

内「虚言計り去年の大晦日に帯を持てッた切り未だ持て來ないぢやアない

か

熊「エ、彼を未だ覚えて居ますかイ

内「誰が忘れる奴が有るかイ夫れもお葬式に往くとも云ふのなれば宜いが女郎買ひ杯に往くてエものに貸しては良人が歸て來ると妾が叱られるヨ  
熊「フ、實はソノお葬式なんで然う云たら縁起が悪からうと思て虚言を吐いたんです







内「ム、ウ誰が死んだノ」

熊「ム、ソノ彼が死んだんでげす

内「誰が死んだのだヨ」

熊「お長家のものでげす

内「長家……誰が」

熊「お爺さんで

内「小間物屋のお爺さんが死んだのかイ

熊「へ……」

内「解らないもんだネ

熊「エ、知れねへもんですネ

内「何時だエ

熊「明方で

内「明方……和郎明方に宅の前を包を背負て通たヨ

熊「エナニ……ソノ實は洗濯屋の婆アさんで

内「ホ、可愛想に和郎洗濯屋のお婆さんは二階へ来て裁縫を爲て居るヨ

熊「エ……其内に誰か死にませう

と其儘飛出して参り

熊「ア、……驚いた若旦那往て來やした







若「オヤ羽織が出来ました子是は結構

熊「エ、種々心配して漸々の事で出来やした

若「イヤ是れで宜しいくぢやア是から往くんでけすが君方に云ふ言が有

やす君方は先方へ往ても無闇に饒舌ては不可せんヨ口を利いて呉れるてエ

と拙が困りやすから

熊「エ、宜うがアす若旦那が呼んでも返事も爲やせん

若「瀧ちやん君に願ひたい事が有ると云ふのは君を床の間の前の上座へ坐

らせるから背後の容齋の掛物を見て善い筆に出来て居ると譽めて貰ひたい

んだ

「宜しう御座エやす譽るのは小哥ア名人だ太陰奴だツて譽めるんでけす

か

若「ア、然んな譽めやうぢやア不可い先方へ往くと帮問が来やす

「夜番のでげすかい

若「ナニ座敷を浮せる男藝者が其處へ来た時に君が少し反身に成て容齋の

鯉は餘程善く畫て在るが惜しい者を故人に爲たネと云て貰ひたい

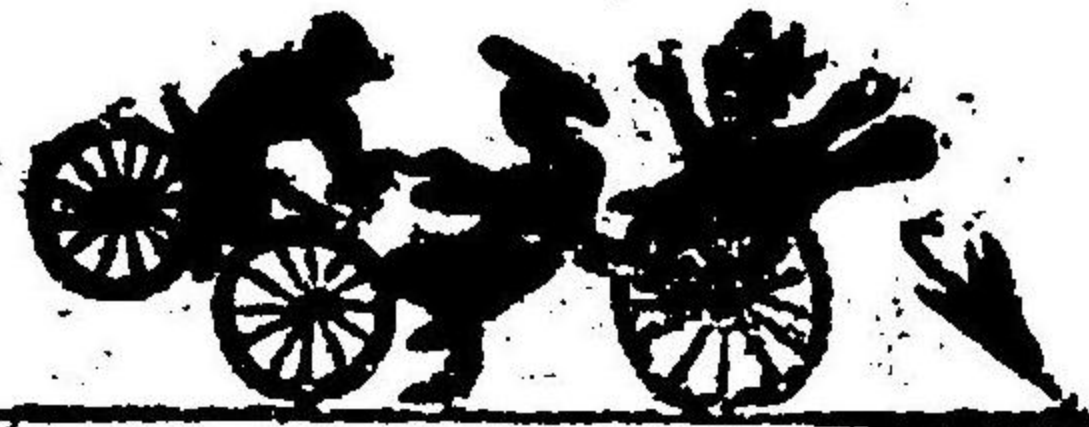
「成程……最う一遍

若「容齋の鯉は餘程善く畫て在るが惜しいものを故人に爲たねエと

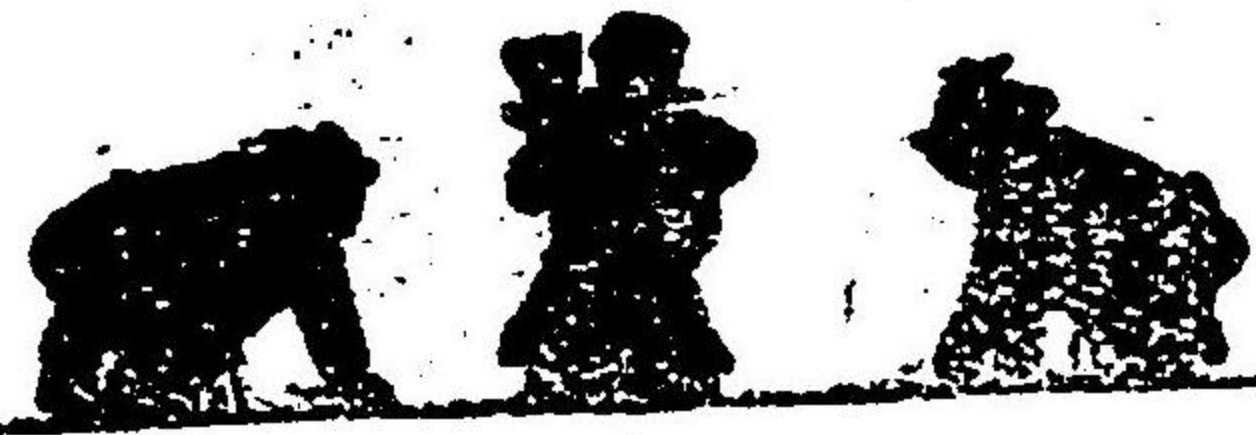
「容齋の鯉は餘程善く畫て在るが惜しいものを故人に爲たツてエんでけ





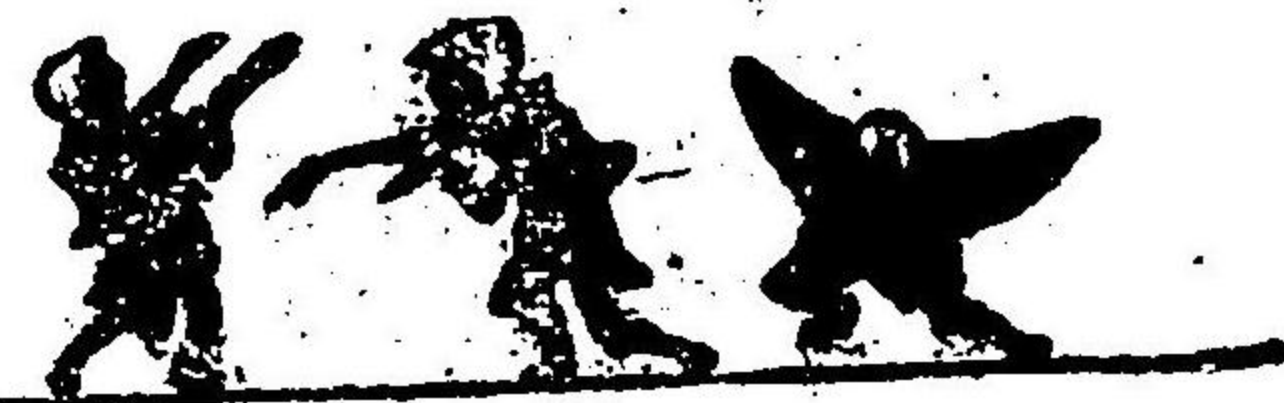


若「當今では  
竹「當今では  
若「重箱の総でもねへのーツてんで反身に成て貰ひたいよ  
竹「是は六ヶ敷い……ねへのー……（反繰り返へる）  
若「もつと沈着いて  
竹「ねへのー  
若「ソノ呼吸で  
と是から吉原へ参て或樓へ登りズツとお座敷へ着きますと新聞記者が其處  
へ道て來まして



すか  
若「然うで……竹さん  
竹「へエ  
若「君か子  
竹「へエ  
若「君達の前だけれども當今では重箱の総でも無へのうと  
竹「是は大變で何んでげすとエ  
若「君達の前だけれども  
竹「君達の前だけれども





蟹「へエ今晚は……櫻川善孝で

蟹「へエ民仲今晚は石町さま……

若「是は皆私の友達だヨ

蟹「へエ左様でげすか何卒また何分御最負を願ひますは善孝でげす

蟹「來た〜……エオイ俺の後方に在る化物(掛物)を見ろ

蟹「へエー

蟹「容齋の鯉なア

蟹「へエ〜

蟹「善く書て在るなア

蟹「左様でげす餘程善い筆だそうでげす

蟹「惜しひ者を乞食に爲たなア

蟹「へへ、御戯談もんさまで

竹「オ、〜今度は乃公の番だ君達の前だけれ共

蟹「へエ

是より非常の大聲にて

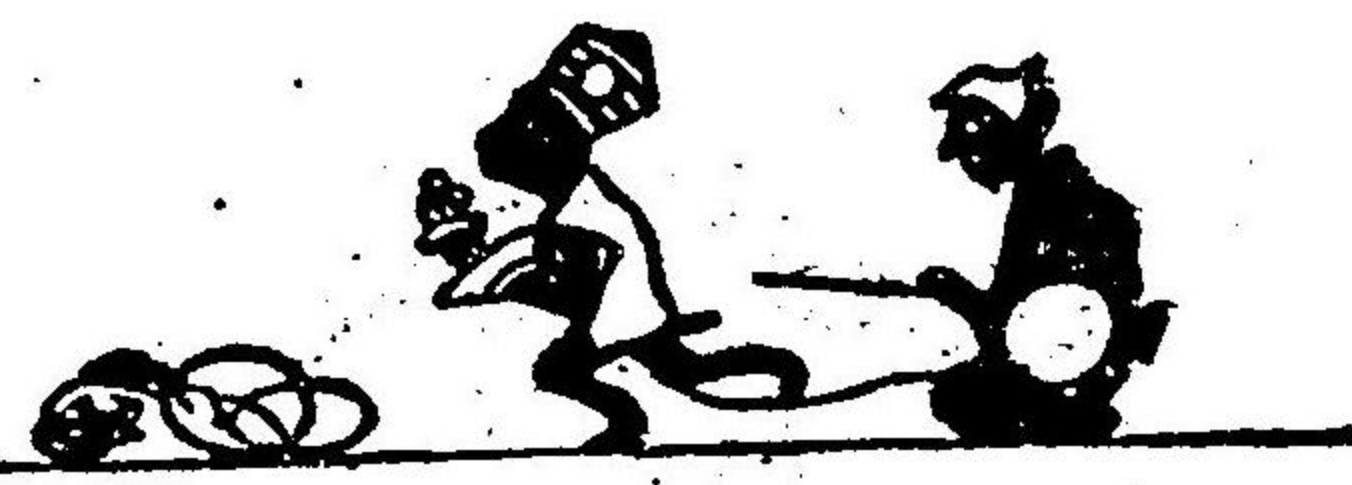
竹「君達の前だけれども

蟹「へエ

竹「當今では箸箱……ぢやアねへ







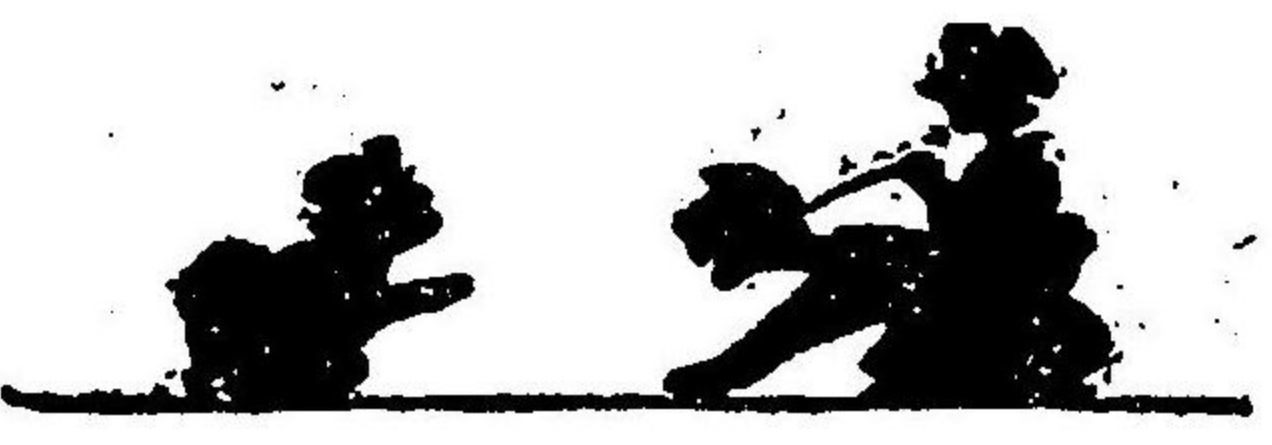
替へエ

竹「香箱……でもねへ

替へエ

竹「重箱の餘でもねへーノ……」

と一生懸命に餘り反たので後へ顛覆りましたへエ御退屈さま……」



### 二十四孝

エー一席辯じ上りますこゝに一の風流家が御座りまして、主客相對して談話をして居りますると、隣の家で野蠻人の八五郎が何か怒鳴つて騒いで居る、

八「ナニ笹棒め出て往け、何を吐かしやがる

と申して居りますれば一方の妻は

妻「そんなら離縁状を下さい

と云つて居る





「ハ」離縁状が欲しいか、望みならば遣る、己には書けなくも今隣のデコボ  
 コに頼む

と申して居ります。すると此方では

客「只今何か高聲でデコボコに頼むと申して居りますがオツツケ頼みに参  
 りませうが、一體デコボコとは何んのことと御座いますか

「主」ナニ私の頭が禿げて段になつて居りますから、私の名前を呼ばんでデ  
 コボコくと申すのです、イヤナニ心の悪ものではない口先きの悪いので  
 御座います、

客「左様で御座いますか

と云つて互に談話をして居る折りしも八五郎が参り

「ハ」御免なさい

と云つて大きな聲で這入つて來ました

「主」お前、私と差向ひの時は宜しいが御客さんのある時は少し静にしてお  
 呉れ

「ハ」へエこれは御免なさい、御客様ですか、御寺様で御座いますか

「主」何せそんなことをお言ひか、

「ハ」頭が圓いから御寺様だと思つた、

「主」何んば頭が圓くいらしつてもそうではないよ、此人は醫道で入つしや





る

ハへエ井戸で………木挽町の名倉屋の源兵衛さん杯は井戸の方では中々評判は宜いですな

井戸ではないよ………醫道だよ………お醫者様だ

成程然うですか、何うか御心やすく願ひます。お前さんに斯う御目に掛つて御心やすくなつて置くと以後先方の頭を割ると直ぐお前さんの所へ往くから何うか廉く縫つて遣つてお呉んなせい、お前さんの方へ廉い仕事をさしては氣の毒ですが、併しまだ段々考へると頭の方は數でこなしますからなア



オイ、人の頭を割り數でこなすと云ふやうな馬鹿のことを言つては往かん

八五郎が餘りのことを云ふから此醫者は呆れ果て  
「何れまた伺ひます

と云つて歸りました、あとは八五郎主人の隠居と差向ひで

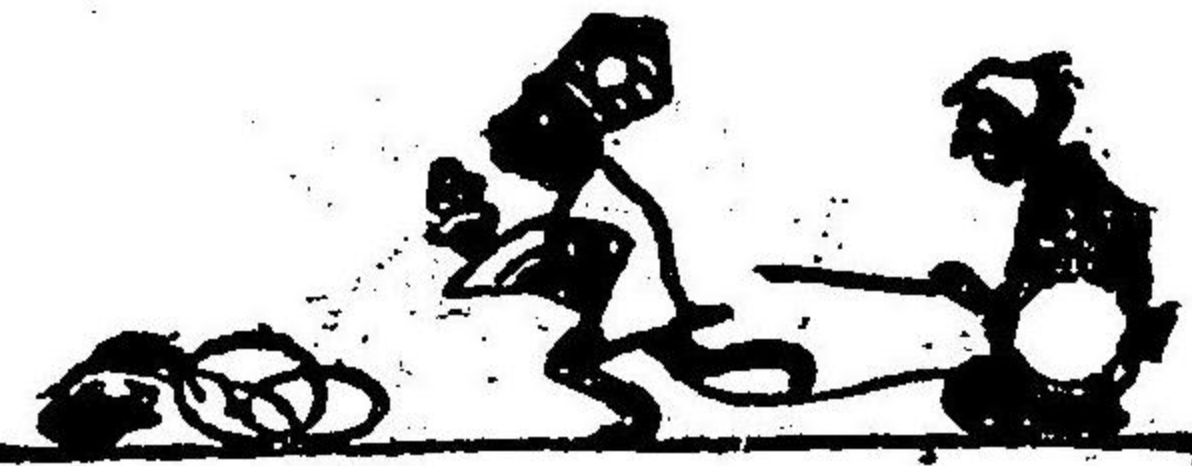
「お客のある時分お前が來ると私はヒヤ〜するよ

ハへエ

「お前が話をするのを聴くと顔から火が出るよ

「不用心の顔ですなア………此間のボヤはお前さんの顔が火元だな………





主「そんな馬鹿なことをお言ひでない、一體先刻喧嘩をして居つたが何を云つて居たのだい」

八「家内に出て往けと云つたら出て往くから離縁状を書いて呉れると云ふのです、所が離縁状は己には書けないから隣のデコボコの家に往つて書いて貰つて遣ると云つて居つたのです、」

主「デコボコとは誰のことだエ」

八「左様で御座ります……お前さんのこと」

主「私のことをデコボコとお言ひかねエ」

八「マアそんな譯でもないがツイ口走つてデコボコ〜と云つたのです」

主「外見もない、人のことをデコボコと云つて……」

八「何うか御勘辨を願ひます、直しますから御デコボコ……」

主「そんな所へ御の字を使ふ者があるものか、」

八「何しろ二三通書いてお呉んなさい」

主「何を」

八「離縁状を……」

主「離縁状を二三通も書いて貰つて何うする積りだい」

八「何うしても構はんからマア書いてお呉んなさい」

主「離縁状は女房に遣はすべきものである二三通も女房に遣る積りかい」







ハ「母親にも……」

圭「物書ざれば利に疎し……母親に離縁状を遣ると云ふ奴があるものか  
馬鹿のことを言はずに親には孝行をしなければならん、

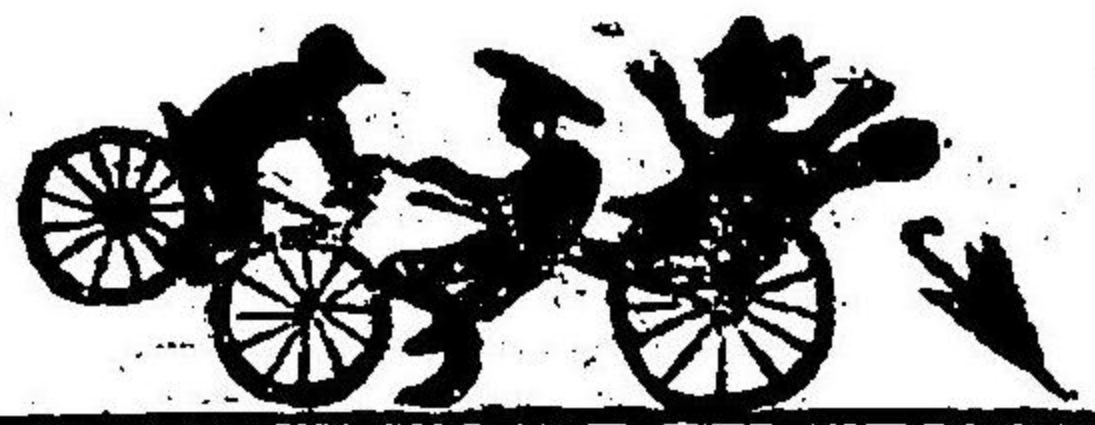
ハ「ヘエ」

圭「子たるものは親孝行をしなければならん

ハ「ヘエさうで御座りますか

圭「お前は譯が判らんから洵に困る、お前とは少しも話が出来ん……」

昔孝行を以て名を顯はし政府より御褒美を頂いた青銀五貫と云つて今の  
五十錢を下ると云ふ譯だ、



ハ「都合が宜いなア、日に五十錢も貰へると勝負しなくても済むから己も  
これからは親孝行を致します

圭「やるが宜しい

ハ「これからやります、何んだか急に親孝行がしたくなつた……五十錢  
になれば結構だなア

圭「氣に入らぬ風も有ふに柳かな

ハ「それは何んのことですか

圭「柳を見なさい、柳はニユツと立つて居る、併し南風が吹けば南に、北  
風が吹けば北に向く、むつとしてかへれば門の柳かなだ





八へエ

圭「柳を見て自分の了簡を取り直すことである、なる勘忍は誰もなる、ならぬ勘忍するが勘忍だ」

八「成程旨いなア」

圭「お前さんは物が分からぬから孝行の話をしたいが往かんと」

八「話して教へてお呉んなさいナ」

圭「お前さんは馬鹿のことを言ふから話をしても分からぬが……昔の孝子に二十四孝と云ふ事がある」

八「二十四孝とは花合せの事ですか」

圭「何せそんなことをお云ひかエ、孝行をした者が二十四人と云ふのだ」

八へエ

圭「お前は大變の考へをするので困る……二十四孝の中に王祥と云ふものがある」

八「寺の坊主かね」

圭「王祥と云ふ人の名だ」

八へエ 成程……

圭「此王祥の母がナ……」

八「は、とは何んで御座いますか」





主母とはおふくろのことだよ

八「それが何うしました



主母が鯉を喰べたいと云つた、然るに其時寒中のこと故中々六ヶ敷い、併しながら母の言葉を背かんで鯉を漁りに往つた、然る處池水は一面に厚氷り、いかにも鯉をとることが出来ん、斯く厚氷が張りつめて居つては母の望める鯉を興へることが出来ぬから自分の腹を氷にオツツケ腹の温氣で氷を融かし、其融けたる穴から鯉が飛出た王祥喜びてそれを捕へ持歸つて母に喰べしたと云ふ孝行の話である

八「成程感心の奴だ、併し其奴が腹を氷にオツツケ融かしたが、若し其時身體が其池の中に丸でオツツツて仕舞つたならば何うで御座いませう死んで仕舞ひませう

主「けれどもそれは死ぬ氣遣はない

八「何せねエ

主「何せ氣遣ひないかと云ふと元が孝心の者である故親へ對しての孝行が天に通ずるに依つていある、先づ一口に言はゞ天が感ずるから

八「成程旨い所ですなア……天公も旨い所を感ずるなア

主「また吳猛と云ふ人がある

八「牛蒡が何んです







主「牛蒡ではないよ………吳猛と云ふ人だよ」

八「成程」

主「其吳猛と云ふ人は至つて窮して居る」

八「窮するとは何んですね」

主「窮するとは貧乏と云ふこと………吳猛は貧乏人で御座る」

八「それから」

主「それゆゑ夏蚊帳をつることが出来る」

八「成程」

主「蚊が親を喰へて往かん」



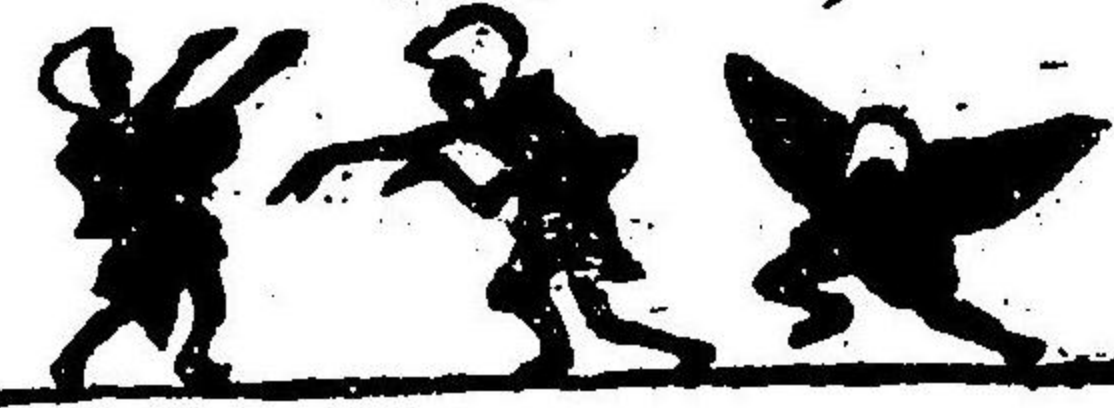
八「へエ」

主「所が吳猛が親孝行だから或酒屋に往つてすたり酒を貰つて来て自分の身體に酒を吹きかけ蚊が己の身體に寄るやうに圍り蚊をして父の身體を喰べさせまいと思ひ親の枕邊に居つた然る處蚊の如き小さき蟲であるが此吳猛の孝行に恐れて其處へは蚊が出んやうになつたと云ふ事である」

八「旨いなナ………旨いことをしやがるはア己の身體に酒を吹きかけて蚊の出ぬ禁厭をしやがつたが併し其時酒が身體に吹いてあるから旨くツて蚊がメチャ〜に喰付いたならば何うしまするか」

主「さう云ふ事はない」





八「へエ………ないと云ふ事はありますまい

圭「お前さんは然う強情張るがそこがそれ親孝行………孝子の威徳を以て

天が感ずる

八「天が感ずる………怪しくなると天が感ずる………旨い所で天が感ずる

なア………まだありませう

圭「孟宗と云ふ人がある

八「それが何うしました

圭「其孟宗と云ふ人には一人の母親がある、其母親が寒中に筍を喰べたい

と云つた

八「寒の中は筍はないではありませんか

圭「所が孝子であるから母親に向ひ何か召し上がりたいたいものはありません

かと云つて尋ねたら母の言ふには私は筍が喰べたいと云つたので

八「成程

圭「けれども寒中に筍のあらう筈はない、ないがそこが孝子だから鬼に角

鋏を擔いで竹藪に往つた

八「へエ成程

圭「往つた所が見える譯はない雲は降つて一面を蔽ふて居るから、そこで

呵「筍はないかと云つて歎息しつゝ竹藪を覗んだ







八「其野郎の眼は藪睨ですな」

主「藪睨ではない、そんな馬鹿を言ふから困る……そうすると笥がニユ

ツと顯はれた、すると孟宗喜びてこれぞ天の興ふる筈だと悦び勇んで持ち

歸り母に食べさせたと言ふのである、今迄無いものが故なくして急に出る

譯はない、然るに此出る譯はそれがそれ孟宗の親孝行を……

八「オツト天が感ずる」

主「天が感ずるからである」

八「大變天が感ずる旨いなア……怪くなると天公が感ずる」

主「全く孝行を天が感ずるからである」

八「まだありますか」

主「ある、黄山谷」

八「それが何うしたんですな」

主「此人が父の大小便の掃除をした」

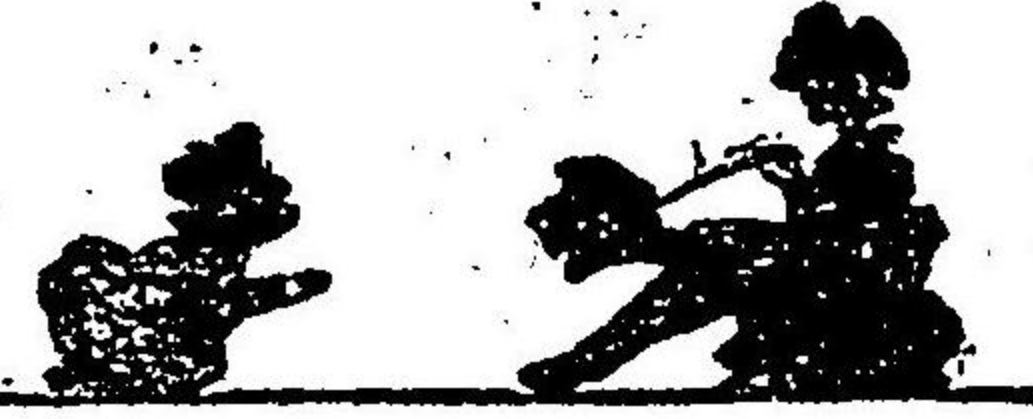
八「大小便とは何んですな」

主「下の掃除をしたのだ、下の掃除と云ふものは人に任せると多くは疎略

に流れる、縦令祿を興へてあるにもせよ下の掃除をさせると三度に一度は

厭な顔をする、故に人にさしては不孝になるから更に自から手を下ろして

下掛りの掃除迄したのである、これは唐土で有名なる黄山谷だ」







八「まだありますか」

三「まだ曾参だの郭巨杯と云ふやうな親孝行の人がある

八「成程親孝行は何處迄もしなければなりませんなア

三「お前のやうにイツも亂暴の事計り云つて居つては往かんよ……大抵

今の話が分つたかエ、

八「へエ少しは分かりましたからこれからは親へ孝行をして二十四孝を始

めやうと思ひます

三「それは宜い心掛けた、悪き事は固より學んで悪い、善い事は真似をし

てもよいからマア、悪くはないから此方の真似ならしなさい

八「これからはやります……左様なら御八釜敷う

と云つて例の野蠻人八五郎は隠居の家を飛出しまして

八「占めたナ己の隣の野郎に云つてやる……五十錢占めた何か面白い事

が打かつて来るやうな事はないかしらん

と一人云ひつゝ、

八「ヤイ何處に往く熊……己はなア是からは親孝行をしてナ御褒美を貰

ふんだ己は大變に親孝行になつた……一體汝は何處に往くんだ

熊「銚屋の金平の家に往くのだ

八「何しに往くんだ







熊金平が親父と喧嘩をしたからだ

「ハひどい野郎だな、親父と喧嘩をするチウ事があるもんかい、已も往つて説聞してやらう」

熊止しねいお前が往つて云へば喧嘩が大きくなるよ

「ハナニ往つて親父に謝つてやるのだ」

熊謝るやうな奴なら宜いが……親父に打て掛るやうな奴だからヨ、今迄相當に口もきいてやつたが、とんでもない奴ではないか親父の頭に手を下すとは

と云ひつゝ、金平の家へ往きました

「ハ金平……汝は親父と喧嘩したさうだなア」

金少しまづい事をした、親父に悪い事をした

「ハ汝は親父を何んと思つて居る」

金親父は矢張親父と思つて居る

「ハ一體子としては親に向ひ手を下す事は出来ぬ譯のものであるぞ」

金氣に入らなんだからだ

「ハ氣に適はぬ入らんと云つてもムツとして戻れば門の柳哉むへ山風をあらしと云ふらんだ假令親父が分からぬ事を云つても子たるものは何に迄も親孝行をしなければならん筈だ、子にして親に手を下すと云ふ奴があるも





のか能く孝行しろ

金「お前も親子でありながら亂暴するではないか

八「汝は本當の親子ぢやアないか

金「オツな事を言つて居るなア

八「二十四孝の引き事を云つて聴かさうか

金「二十四孝の事を言はれると最う一言も無い

八「さうだらう……二十四孝に王祥と云ふ奴がある

金「おうしやうとは何んだ

八「王祥と云ふのは人の名だ

金「成程

八「此人が窮して居る時に母親が筍を喰べたいと云つた、そこで王祥は母親が喰べたいと云ふから何でも彼でも喰はせなければならんと思つて雪中をも厭はず簞笠を着て掃溜めに飛び込んだすると氷が一ツベイ張ッて居て氷を融かして喰はせて親孝行をした己は此事を思へば涙が灑れらア

金「オイお前の話は少し違つて居るやうだ、何んだか譯が分からねエ

八「違ひない、親孝行だに依つて天が感ずるのだ……まだあるぞ

金「何んだ

八「吳猛と云ふ小兒があらア







金「しやうにとは何んだ

八「小兒とは小供の事よ

金「成程

八「所かな夏蚊が出るから小穢ねエ酒を吹いて親の肉を吸はずに己の肉を吸ひていと云ふてそれで大孝行になつたからえらいよ

金「何んだか話が分からないよ、己が小供の時分に聞いたには二十四孝とは二十四人の大孝行ものがあつたと聞いて居るが何んと云ふのだ

八「二十四人ある、曾參に……王祥に……孟宗に……郭巨に……

吳猛に……黄山谷

金「それから

八「それで二十四孝よ

金「それでは足りない

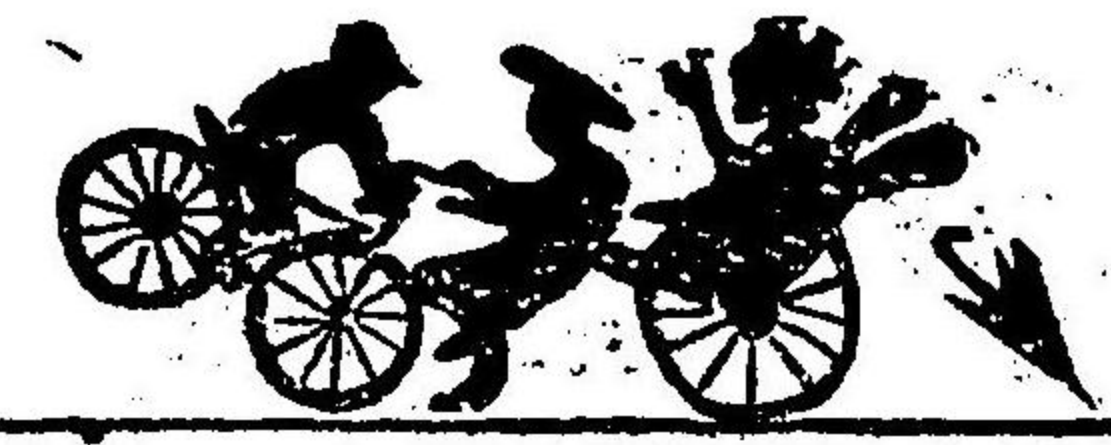
八「何んでも宜いではないか

金「けれども二十四人居なくては二十四孝ではないよ

八「曾參に……王祥に……孟宗に……郭巨に……吳猛に……黃

山谷に……之で二十四孝ではないか

金「廿四人居ないよ、それでは六人しか居ない六孝だよ……廿四孝と云ふのは廿四大孝行の者を集めて始めて廿四孝になるのである





「ナニそれは六孝に至孝の至(四)を乗すれば即ち四六廿四孝になるから

だ



### 粗忽の使者

エー今日は極粗忽のお話で御坐いまして、粗忽の使者といふお笑話を一席  
辨じ上げます

牛込に粗忽長屋といふのが有まして、此の長屋に居る人は残らずお差配か  
らして粗々ツかしいお方が居るンでげして、また粗々ツかしい人でなけれ  
ば長屋を貸さんと云ふ位の差配人さんの心持と云ふんで、夜が明けると長  
屋中残らず間違た話ばかり

○「サア此の亞魔ア只ア置かねへ、サア此の亞魔ア本當に何するか見やア







がれ、人を馬鹿にしてやアがって、ヤイ

◎「オイ〜お前何んだって夫婦喧嘩をするんだなア、止しねへナ、見ッ共ねへちやアねへか、本當に、何云ふ理由なんだ

○「ナニ夫婦喧嘩を爲やアしめへし、ナニ干差配人さん、狗が馬の糞を放れやアがって、夫から吾儕が憤つたんで

◎「ハ、然かへ、

○「今此奴を叩ッ殺して熊膽を取らうと思つてるんで

◎「へエー、夫は違ふ、熊膽を取るには大方鹿の方が宜からう

なんてンて皆間違つて居ます、隣の家はお職人で

△「サア〜仕事から歸つて来たから家の坊ヤを湯に連れて行くから支度をするが宜い

△「お前さん其處に居らアネ

△「ム、茲に居たか、餘り鼻ッ先に居たんで見損なつて仕舞つた、大層顔へ手習を爲やアがつたなア、何だツて其んなに面へ墨を塗つて来たんだ

△「お前さん何を猫に云つて居るんです、

△「然うかへ、サア湯に行くんだから、おぶッされ〜……や、どツて

いしよ、チヤンと脊中へつかまれ、オヤ大層お前は重く成た

△「お前さん柱を脊負つてるんです







▲「柱か、道理で恐ろしく重たいと思つた、ドッコイショ、

◎「阿父ヂョ〜が脱げた

▲「ナニ鱒が喰ひてへ

◎「ヂョ〜(草履)が脱けたんだてエば

▲「ナニ草履が、然う〜俺は粗やかしいから間違へて仕舞つた、宜いかへ、ソラどつこいしよ、ア痛エ頭を打附けて

◎「痛からう、當つて

▲「當たつて俺の頭だから餘計に利いたと思ふ……………ハイ御免なさい、モ

シ親方

▲「モシ親方、貴公は宅へお入來なすつて鳥目を置かず、此方の錢を搦んで行つては困ります

▲「失體致し升た、ツイ置くのを忘れまして、……………ヂョイ〜此方へ仕

舞ひましたので

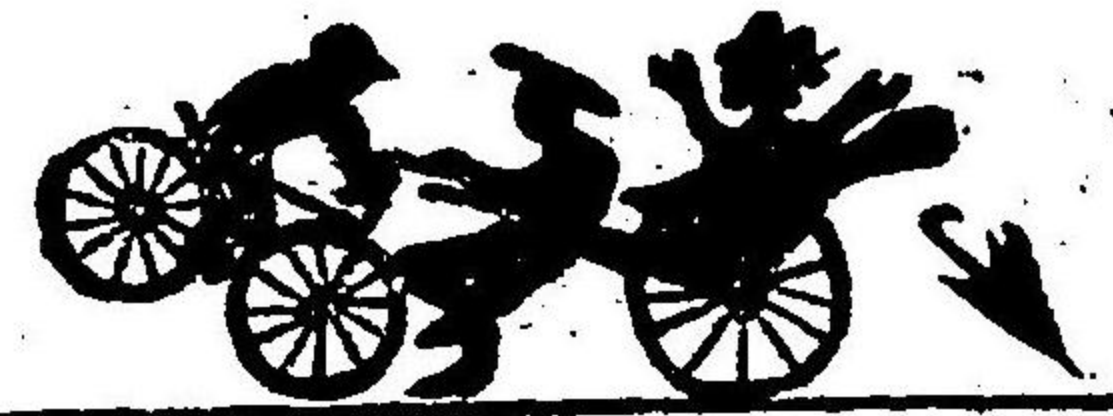
▲「困りますナ

▲「ナニ悪い了簡では有りません

▲「餘り善くもない

裸躰に成て

▲「ハイ御免なさい〜、本當に忤は大きく成たなア







男「何んだって俺の脊中を洗ふんだ」

▲「是は恐入りました、ツイ悴とお前さんと間違ひました、是は恐ろしくヌルイなア……ア、此處は水槽で、恐入りました、私は誠に粗々かしくツて仕様が有ません、斯いふ時にア早く歸りませう  
歸りに他家の小供を脊負て來て

▲「エー今歸つたよ」

女「お宅はお隣なんで」

▲「是は恐入りました」

我家をガラリと開けて

▲「只今は失禮を致しました」

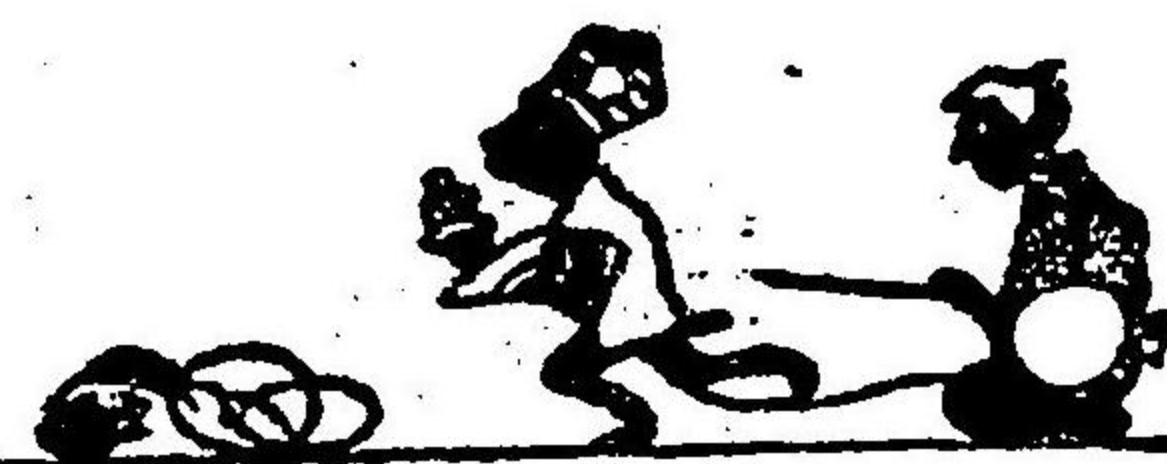
然云ふ人が集りますと始末に往けません、然うかと思ひますと、元祿の昔武林唯七といふ人は淺野内匠頭さまお氣に入りの御家來で御座いましたが粗々かしい事に於ては随分馬鹿造と云つても宜い位のもので或日殿様が室の梅を大變御寵愛で御自慢で御座いまして早咲を御賞美なすツて

殿「コレ〜武林〜」

唯「へエ」

殿「今日は予が自慢の紅梅を此處へ飾つたんだが餘程何うも梅は香ひ、櫻は花よ、と申して實に好い薫りだから嗅げ」





唯「へエ、誠に何うも私には少しも香ひませんです」

殿「貴様は風邪でも引いたか」

唯「風邪の氣味は御座いませんが、少しも香ひません、スーハ、く  
無闇に嗅いでプツリ只一輪の花を取つて仕舞ひました」

唯「是は頓でもない事を……」

殿「予が秘藏の花を何んだつて其方は落したんだ、手討に致して仕舞ふ」

唯「エレハ恐入ります」

と頻りに植木鉢の前に両手を突きお辭儀をして居ます

殿「此處へ出る」

お側へ行つて武林殿

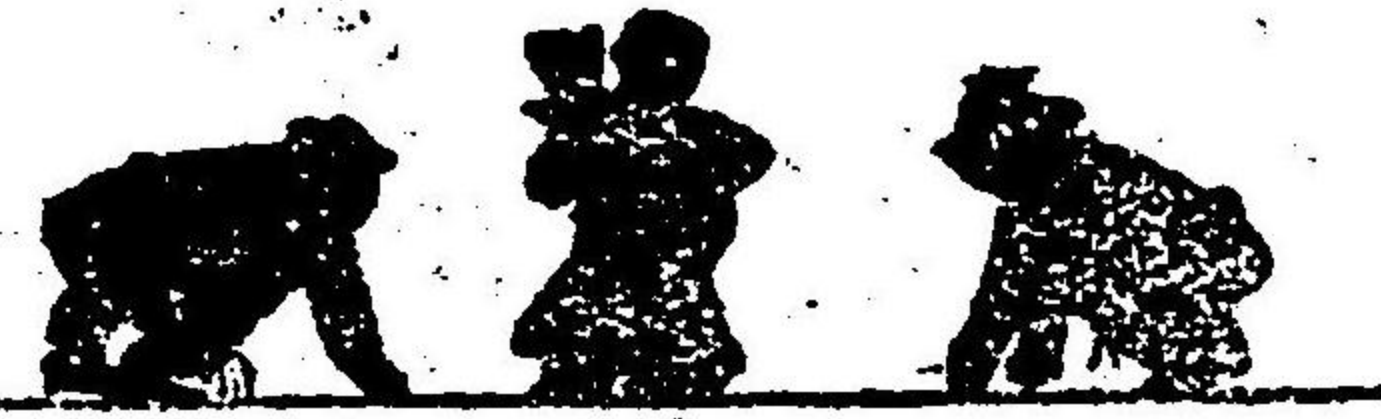
唯「グー」

と眠ちまいましたんだが、恐ろしく膽の据つた人が有つたもので、然云ふ  
人物には随分お話らしい事が幾らも有ります、

是は或お大名の御家來で御座いまして、松平家を名乗つて居る立派な柱目  
正さまと云ふ殿様の御家來で、地蓋治部九郎さんといふお方が御座いまし  
た、此の仁の粗忽の事は餘程粗々かしい男で御座いますが、殿様には大變  
にお氣に入りで、或日の事、丸の内の赤井御門守様へ御使者の役で参りま  
した、此の赤井御門守さまの御高は十二萬三千四百五十六石、七斗八升九







合、一掴み半分三粒といふお高で御座います、成丈お名前はお差しに成らんやうにやつて置く積りで御座います、勿論お醫者がお引台に出ると、甘井羊羹さん、三角銀杏さん、横濱交易さん、なんと云ふ餘り世間に無いやうなお名前で、お勇み衆は、源次、ガラツ八、腦天熊、オアイダの文吉、二分五厘の吉、是は五粉屋の娘を半分口説き落したから二分五厘の吉さんと云ふので餘り無い名で、さて今チヤントお供揃ひで使者のお役は地蓋治部九郎、五千石の格式で

○「今日は御使者のお役御苦勞千萬に御座います

治「イヤ主用なれば恩に係る處もなく、是から行って参ります、コレ〜供

揃ひは出来て居るか

○「残らず揃つて居ます

治「コレ〜辨當〜……辨當じやアない馬丁、何にをソレ狗ぢやアな

い、アノ馬ア曳け

○「へエ……是へ参りました

治「ヨシ

ちやんと上へ乗かると馬頭を後ろの方にして

治「コレ〜馬丁

○「ハ







治「此の馬は奈是手綱を附けて置かん

○「夫では逆さまにお乗り遊ばしたので

治「ウーン、成程是れは大きに困る、斯う乗つた儘でグルツと廻はして貰ふ譯にはいかんか

○「然うは参りませんからお乗換を願ひます、

治「誠に不自由の馬だ、兩方に頭を附けて置けば宜いのに、

○「恐入ります、其んな馬は有ません

治「兩方に頭の有る馬は漢土に在るさうだ、夫を持って來ないのは不都合で有る



○「然う云ふ譯には参りませんでけす、何うかお乗換を願ひます

治「ドッコイシヨ、是れで宜し、供揃ひは宜しひか

○「宜しう御座る、

是より五千石の格式で、治部太夫殿は上下を着してお馬に召し、兩徒士に草履取、合羽籠籠、紺看板に梵天帯、リユツとした扮装へで

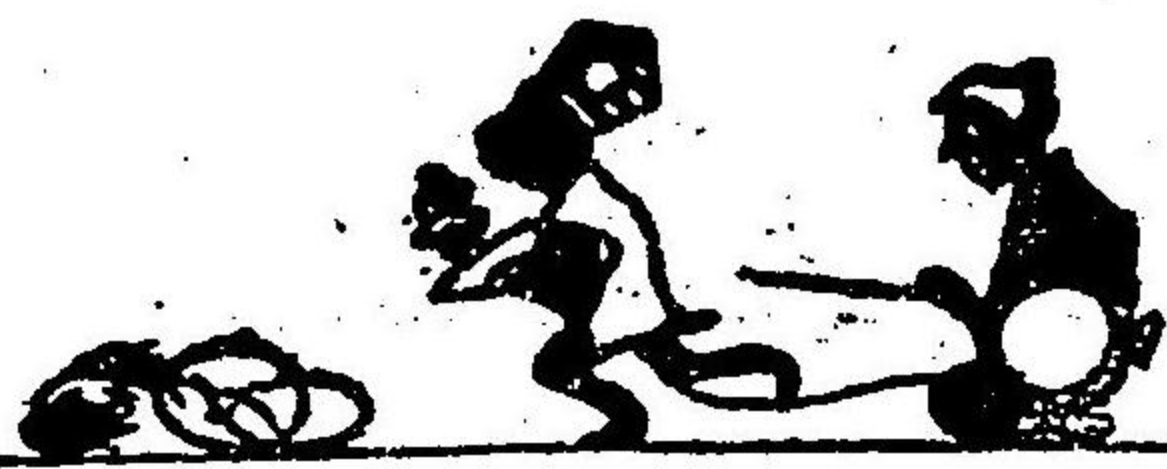
○「ハイ、

と丸の内の赤井御門守様の御門前まで参りました

●「松平権目正様より御使者ア

御門が八文字にギイーと開きました、大抵御門はギイーと開きますが、落





語家の家の御門杯はギイーとは云ひません、ガタビシ、ガタン〜と云ひ  
ます………お大名の御門はさうでもありません少しも金銭に糸目を附  
けずに拵へた赤門で御座いまして、左右に開きますと正面は紺色縁サヤ形  
のお唐紙にして、使者のお役は只今ならば辨理公使とか、全權公使とでも  
云ふお役で、案内が同道して使者の間へズイト通りました、お出迎ひに出  
ました者は當家の重役で、黒羽二重の紋附に麻の上下を着けて夫へズイト  
出まして

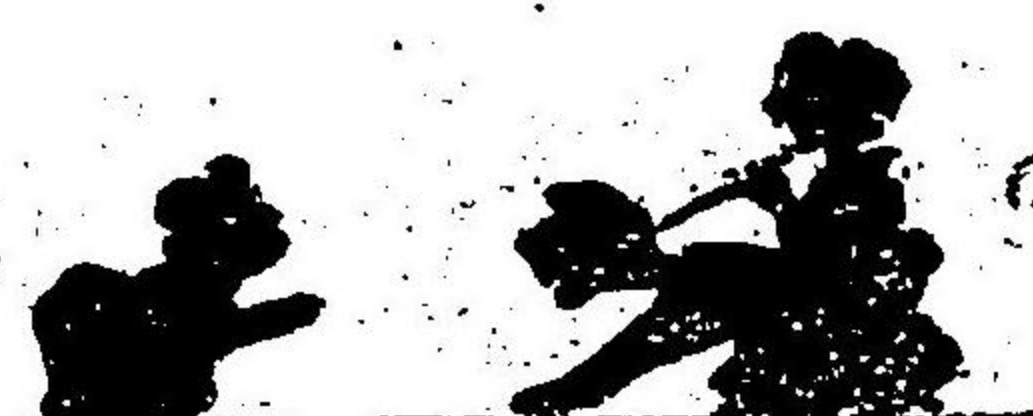
○「エー今日は遠路の處御使者の御役、御苦勞千萬に御座ります、手前は  
當家の家來田中三太夫と申す、お見知り置かれまして御別懇に願ひます

治「ハイ、手前は松平榎目正が家來で地蓋治部九郎と申すもので、至て  
粗忽者で御座います、以後お見知り置かれ御別懇に願ひます

三「何うか何分共に手前も願ひます、さて御使者の御口上を手前迄へ願ひ  
度事で

治「手前は赤井御門守……イヤ夫は御當家のお名前、手前は田中三太夫  
コレハ貴公様の御姓名、手前は松平榎目正の家來で御座いまして地蓋治部  
九郎と申す至て粗忽の者

三「夫は只今伺ひました、御使者の御口上を  
治「エー誠に何うも今日は、エー思ひの他快晴致して御座るア







三 左様で御座います

治 エー手前は松平権目正が家來

三 貴公様は地蓋治部九郎さまと被仰るお方で

治 左様で御座る、全く治部九郎で御座いますから以後お見知り置かれて御別懇に願ひます

三 手前も宜しう願ひます事でげして

治 エー誠に何うも貴公、恐入つたる儀では御座い升が、エー誠に何うも手前はソノ物を忘れるのが一ツの持病で御座いましたナ、使者の口上をガラリ失念を致しましたンで御座るか、誠に何ん共何うもエ、申さうやうも

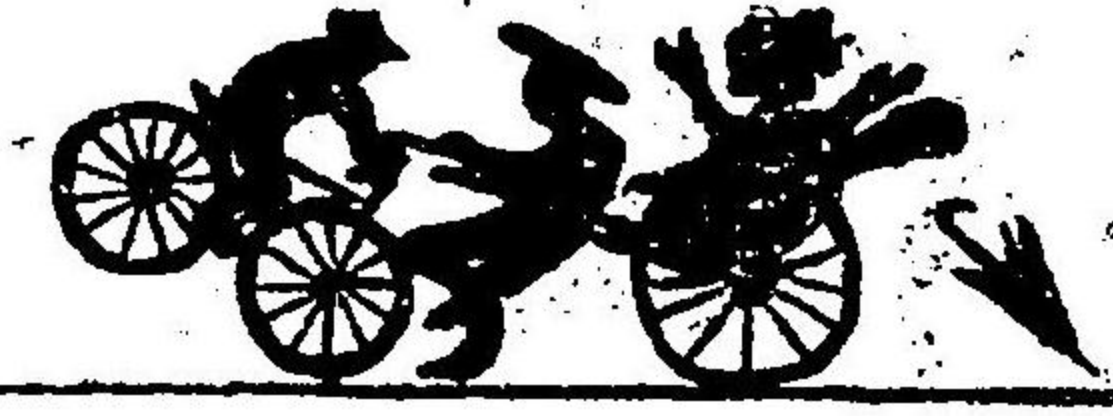
ない儀で御座いますが、何うか武士は相身互ひで御座るから、何うかお考へ下さる譯には往きませんか、手前の口上を

三 ハー、是は何うも恐入りましたなア

治 エー何にか貴公様の御主人と手前の主人と何にかお引合つたやうな事をお聞きなすつた事は在りませんかア

三 一向にお使者の嘶も御座いませんでしたが、何云ふ御用事なんですか  
お思ひ出しはなかく附きませんか、なア

治 ガラリ失念して更に浮んで参りません、誠に情けな、譯で手前はコレ何うもお使者に参つて此の事を貴公に申上げられませんかやうな事に成ります







と手前切腹を致さんければならん事で御座いますが、何うか神信心でも致し度心持も有ますが誠に不信心で御座いまして、苦しい時の神頼みはいかんと思ひますが、何分思ひ出しませんで御座います

三 夫は頓でもない事で、手前は尙お使者の御口上杯は少しも心得んで

造 貴公の心得のないのは御無理は有ませんが、手前でさへ知らないんですから、左様なら手前折入てお頼みが御座いますが、お背さ下さる譯には参りませんか

三 手前身に相叶ひました事なれば何の様な忠義でも盡します事で、

造 イヤ誠に其のお言葉を下し置かれ有難ふ御座います、實は手前幼少の

折柄より粗忽の病氣が御坐いましてナ、其の時には兩親が手前の尻を捻り呉れます、其の度に忘れる事を思ひ出した事も御座いますが、誠に何ん共相濟まん儀で御座いますが、御當家に指の頭に力の有るお方は御座いますまいか、在つしやるなら手前の尻をニウ捻りばかり捻つて下さる譯には参りませんか

三 へエ、貴公の尻を捻りますと、忘れた事を思ひ出すのが貴公の幼少の内からの習慣しで御座いますか、

造 左様で御座います尻が岩のやうに成て居ますからチヨイ／＼捻りましたんでは容易な事ではいけません、願くはお方の有るお方を御家來の内







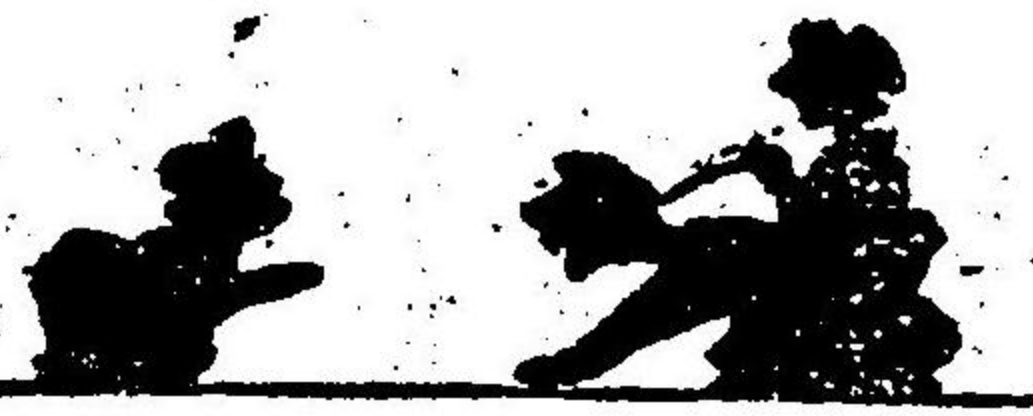
からお選り出しを願ひ度もので

三何云ふやうに成て居ますか、チヨツクラお示し下さるやうに

追始めてお目に懸りましてお尻を御覽に入れますのは面目次第も御座い  
ませんが、人を助ける思召でチヨツと御覽に入れます。

三手前も拜見致して置きませんと何の位のお尻だか分りませんと云ひ付  
ける者でも困りますが、チヨツと拜見を……

追只今袴を脱りませう、肩杯を着けて居るから餘程手数が係ります、宅  
に居ると着流して御座るからグルリと捲れますが……此の通りの譯でチ  
ヨツと御覽なすツて



三何うも是は餘程念の入た御尻で御座いますなア、大層肉が堅まつて瘤  
がいつて居ますなア、

追最うちヨイ／＼捻りますので鎧の如くに成て居ます、イザ戦場と云ふ  
場合にも御尻丈は鎧なしで勤まるだらうと思つて此處丈は自慢で居ます

三餘程御美事なもので御座いますなア、手前少々御捻り申ませう、随分  
手前も指には力が御座います

追貴公様が御捻り下されば何共有難儀で御座いますが、然らば少々願  
ひ度もので

三宜しう御座います、やつて見ませう、マ斯云ふ鹽梅しきにソーラ……





…随分強い積りで御座いますが、如何でゲス、お思ひ出してゲスカ  
 漁一向に通じませんで、何處へ捕まつて在つしやるんですか夫も分らん  
 位で

三「ハ、是は餘程のもんですなア、精一杯力を入れてやりましたが、何  
 處へ捕まつてるんだか、何んだか御通じか有ませんか

漁「少しも身軀に利きませんが、誰方かもそつと強い御方を願ひ度もので  
 御座います

三「宜しう御座います、只今同役と能く此の事を打合せを致しまして申上  
 げますから少々御控へを願ひます

漁「何分何うか宜しく願ひます

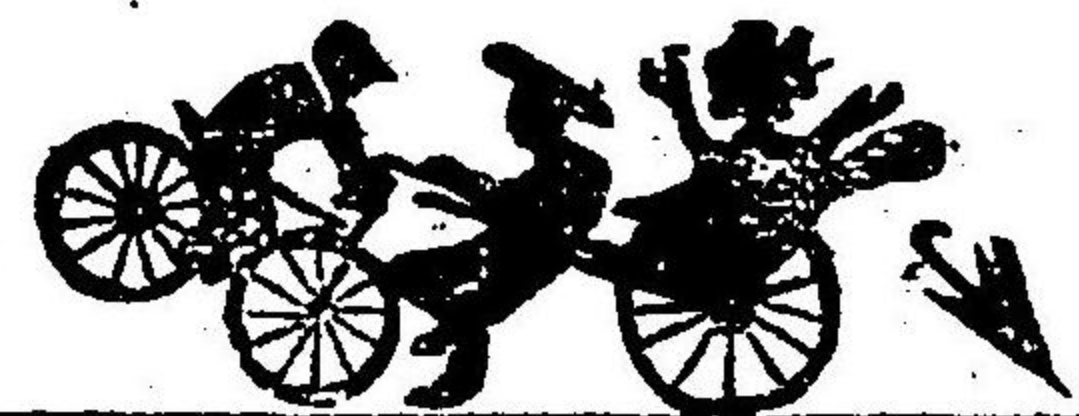
三太夫は驚きまして次の間へ下がつて、同役松木脂十郎石垣蟹太夫杯残り  
 す集めまして

三「同役何うしたものだらう、

三「今何にか聞くとお使者が云ふ事を忘れるとは實に情けない譯で、夫を  
 お上へ申上げれば治部九郎さんは切腹を爲なければならん、武士は相見互  
 我々だつて随分忘れる事が無いとは云へない

三「併し使者の口上を忘れるなんてエのは實に馬鹿氣て居る

三「お前だつて新宿の娼妓の處から吾儕の處へ傳言の有たのを忘れたぢや







アないか。

「鶯媚妓の事と使者の役と一緒にはならねへ、お前もチヨイ〜忘れるぜ  
八百膳へ一盃飲みに行た割前を未だに忘れて居るだらう」

「頼だ處を催促をスる、コレ〜職人貴様は作事に參て居るものが、何  
んだツて此處へ這入つて來た」

「エヘエ、御免なせへ、小哥アなんです、大工の長八の處から參つて居ま  
す職人ですがお椽側先の損じて居る處を手入れをして居りましたが、エヘ、

三「何ニを笑つて居る、ド何うしたんだ」



「何うしたつて……ナニを、宜いてエ事よ、何にを笑つてやアがるん  
だ」

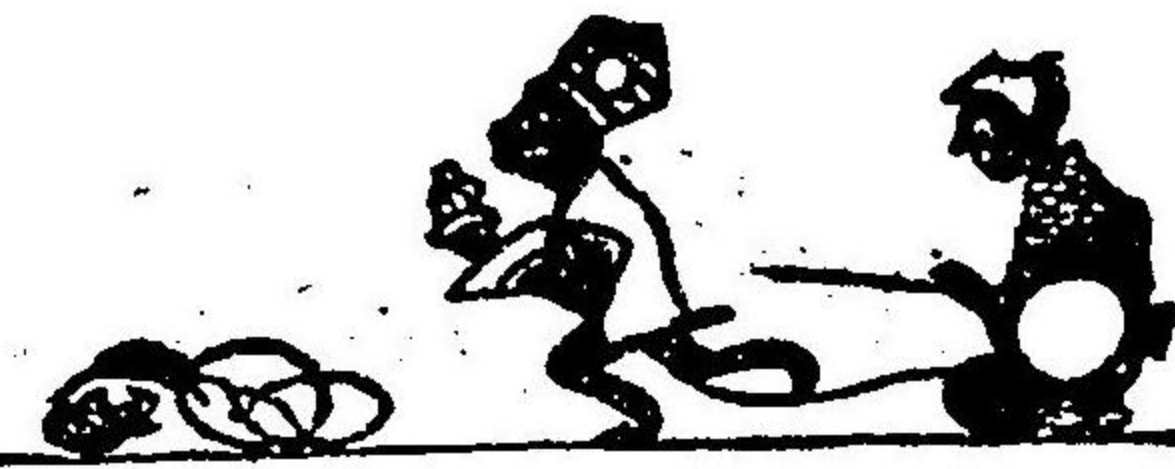
〇「チヨツと來て呉れ」

「エ友達と呼んで居ますから」

「三案内なしにズカ〜這入つて來ては困る」

「エチヨツと申上げ度事が有るんでエヘ、……何んだよ、聞きア使者  
が口上を忘れて尻を捻ると思ひ出すてへから一番俺が使者の尻を捻つてや  
らうと思ふんだ、此方は道具が有らア、釘拔でグーイとやつたら、思ひ出  
すたらうと思ふ、何んな岩ア見たやうな尻だツて大丈夫だ、打棄て置けば





腹を切るてエんだ、人間一人助けるんだから宜いじやアないか

〇「旨く往くか

エ「笹棒めエ、今腹ア切るてエ最中だ、構アものか、

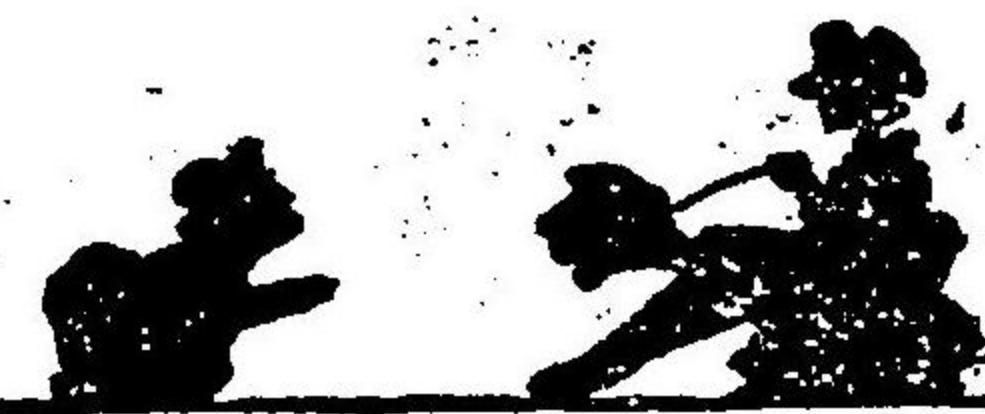
〇「失策るナ

エ「大丈夫だ、シトツケ、愚圖く云ふナ、大工は流々仕揚を御覧じろ、  
黙つてる、情婦が附いてらア

〇「情婦が捻るのは違はア

三「何にを其處でグズく喧嘩をして居る

エ「友達が異見しましたンでげす、ま、御免なせへ、實は今庭前でチヨ



イと承はつたが、ソノなんです子、お使者が極目正さまからお入來に成て  
口上を忘れたてエので餘り馬鹿氣た話で大笑ひをしたンでげすが小哥が一  
番使者の尻を捻らうと思ふと友達が止せッてエか、止すと云ふ仕事はねへ  
から、捻つてやらうと思ふが三太夫さん小哥に捻らしてお呉ンなせへナ

三「アレを聞いたか

エ「残らず聞いた

三「仕方がない、聞いたなら話をするが、當家から指に力の有る者を出し  
て呉れエと云ふ強ての頼み、實に大變な尻だぞ

エ「何んな夫りア石を見たやうな尻だツても構ア事はないから、やつちめ





へます

三「やるてエ、位ではいかんよ

五「心得てます、小哥ア小兒の中から捻るのに妙を得てます、仕事は旨くアねへが、捻る方では腕が鳴つて居ますンです、

三「旨いな、全く上手か

五「なんなら捻らして御覧なさい

三「全く指に力が有れば捻らんでも宜しいが、同役何う致しませう、貴様は何んてエ名だ

五「留ッ子てエんで

三「留ッ子と云う名はなからう、留次郎とか留造、留吉とか申すのだらふ

留「其の留吉で

三「貴様の苗字は何んと云ふのだ

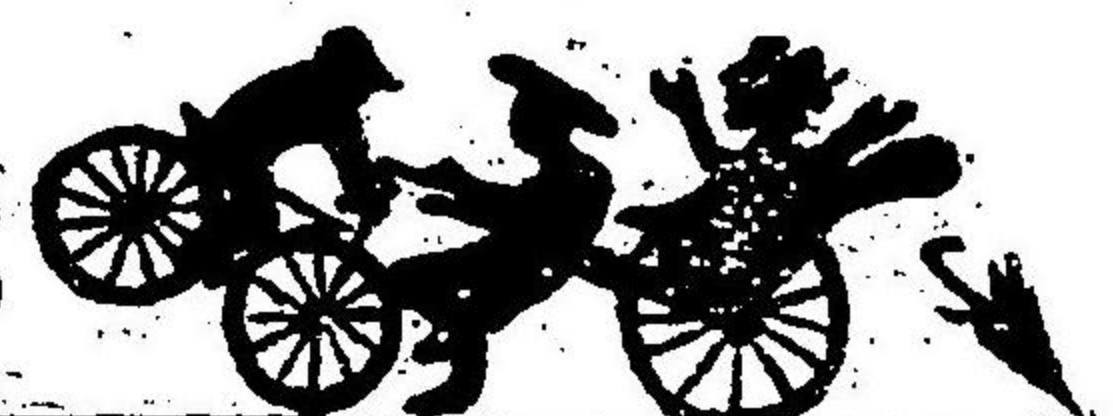
留「小哥ア明神下ぢやアない、壁大工町で、苗字は知りません子

三「不都合だナ、留ッ子殿は可笑いヤ、

留「職人は殺伐の者だから其位のもので御座いませふ、が留之進として當家の家來筋に仕立て出したら先方も困つて居る處だから宜しう御座いませ

う

三「左様なら、貴様今日は留之進と成るのだよ、少しの間







留「是は何うも恐入りました

三「先方は大家のお使者だから失禮が有てはならんよ

留「宜しい小哥は彼處で

三「吾儕が彼處で留之進殿と云つたら、ハーと云ふんだ

留「ハー、と云ふのは六ヶ敷いネ、

三「萬事物の頭へ「オ」の字を附けて、言葉尻に奉るを附けて丁寧に宜い

か云はんやうに

留「何にもクス／＼云はず、チヨイと云つてチヨイと捻つちまひませう

三「然うわいかん、丁寧に云はんければならんよ、何んでも口を利く端に



「オ」の字を付けるのだ

留「是は驚いちまふ子、夫を抜きにして直にグイと捻ちまふ譯には往せんか

三「少し丁寧に口を利かなければならんよ

留「エ、やつ／＼けませふ、物の頭に「オ」の字を附けて言葉尻に奉ると云ふので御座いませう

三「夫は宜いが、大紋附は困りましたナ、何う致しませふ、貴公の社杯を貸してお遣りなさい

留「手前の社杯が有るから着換る、





留「其奴ア有難い、是ぢやア出られない、腐つた半纏ぢやア」

三「股引を脱つて褌袴を着る」

留「恐入りますネ、是は黒い着物ですネ、成程紋が附いて居る、方々に…」

三「是は五ツ紋と云つて屋敷では然云ふ紋を附けるんだ」

留「始めて着たが、劇場で能く殿様が斯いふ着物を着て出て来る、小哥に

お呉んなさい

三「慾張るナ」

留「是は帯ですか、帯をぬめた事がねへから締めて下さいナ、

三「困まつた奴だナ、仕方がない何うも……旨くやつて呉れ、袴より先に肩を附けるんだ、

留「是は、驚きましたナ、……斯うやるんですか、之を斯うやつて扱ひ

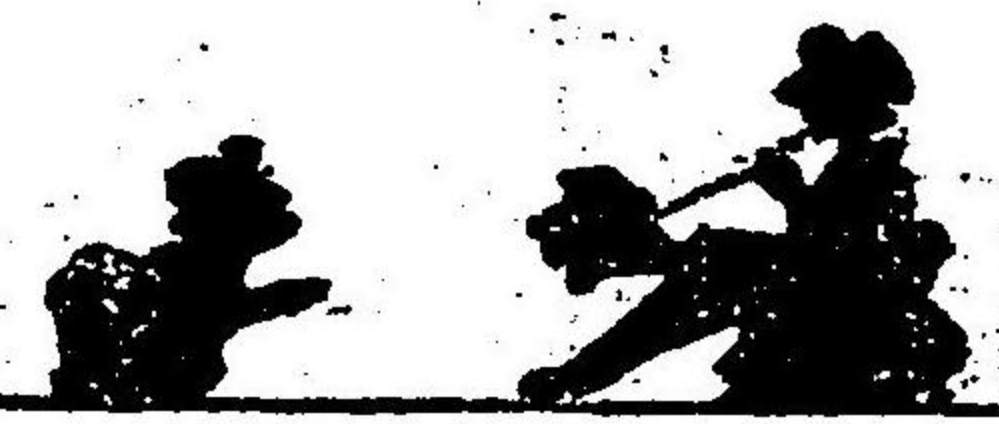
三「グズ／＼云ふナ、直に袴を穿くんだ」

留「斯云ふ鹽梅に……可笑いネ、……何んでせう前に板が来たが

三「夫は腰板と申して後ろに參るのだ」

留「夾襖の棚かと思つた」

三「夾襖の棚でエ奴が有るものか、其儘廻はしてもいかんよ、廻はしたッ







て廻はらんから穿き直さんではいかん

「手数が係るネ、片ツ方に穴が明いてるが、是は小便をする穴かへ……」

「両方へ足を入れるのかへ成程究屈袋とは旨く云ひましたナ、ひといもんで

汗をかいて仕舞つた

「奈是後の柱を一緒に結ひて仕舞つたんだ

「道理で變だと思ひました、

「サ、其處に座つて居る

「是は驚きましたナ、

「頭髪が少しまづい、チョン鬚でハケ先をばらりと散かして居てはいか

んネ、水を附けてこけ

「成程真直に成た、是でお武家さまと見へますか

「なか／＼以て品格が宜い、役人のやうだ

「戲談云つて居る

「旨くやれば褒美をやるぞ、無闇に言葉を丁寧にして失禮のないやうにするのだよ、吾儕が留之進と申したら出て来い

「大丈夫で、コレハ恐しくゴソ／＼するナ、丸で久米の平内様見たやうで

「黙つて居る







大工の留ッ子を留之進と仕立て麻上下で立派なお武家が一人出来ました、  
三太夫さんは一足先へ襖をがらり

三 嘸かしお待遠さま、

留 是は〜誠は何うもお手敷を掛けて何共相済みません儀で、如何で御座います、御當家の指の強い方は御座いましたか

三 ハア、家中の内から留之進と申す者が御座います、是は誠に力の有るもので、一人召連れしましたから宜しく

留 是は有難い事で、何んとも何うも……早速お招ぎを願ひます

三 ハア……コレ留之進殿、……留之進殿、何う致した

留 未だお出は有りませんか

三 留之進殿……コレ〜其處に居るじやアないか、何故返詞をしない  
留 オ、然う〜驚いたネ、此奴ア留之進殿てエものだから、ツイ氣が附

かなかつた

三 いかんぞ、其んな工合で宜いか

留 留ッ子と云はねへから、小哥ちやアねへと思つた、

三 貴様を呼んで居るのだ……此者を留之進と申ます

留 是は何共何うも、何うか此方へお進みを願ひます、

留 三太夫さん、後をピツタリ閉て下さい、見ちやア往けませんよ







三 然らば此者を是へ置きますから宜しく何うか願ひます  
 留 後を確かり閉て下さい……エ、能こそ、エーお使者様の何んで御座  
 いませう、エ、御口上をお忘れ奉りましたんでげせう、夫でエ、私様がエ  
 指の御用を仰せ付けられ奉りまして、乃で此處へお出奉りましたんでげす  
 治 ハア、誠に何うも貴公様が留之進様と云ふお方で、何分共にお捻りを  
 願ひます

留 エ、夫りア何んですお承知奉つて居るんですか

治 何うか宜しう願ひます

留 宜うがアす、サアお尻様を此方へ何うかお出し奉るやうに其處をお頼



み奉りますんで

治 左様で御座いますか、失禮では御座いますが、御覽に入れます……

へエ斯様な譯で御座います

留 成程此奴ア餘程何んですナ、お固まり奉りましたナ、お蛸が餘程何う

もお寄り奉りましたンですから此奴ア餘程のお尻様ですナ

治 何卒お早く願ひ度もので、時間の障りに相成ますから

留 宜しうげす、ム、何うでげす此位の鹽梅では如何で御座る、

爪を立つてギューと捻る

治 一向に通じません、失禮ながら其んな事位では通じません





留「此方を向いちやア往けないよ、

懐から針拔をソーと取出し四邊をキヨロく見廻し

留「方々見たつてお前さんを打つ譯じやア有ませんよ

治「私は何の様な事に成ましてもギューと心に通じますやうに成ますれば

少々位打たれても宜しう御座います

留「直にお捻り奉ります、随分お痛く奉りますからお驚さ奉つては往け

ません、ド何うで御座る此位の痛さは、何うで御座る

治「成程是は……少々……是は少々感じますナ

留「少し利きましたかネ

治「チイと利かんから、モそつとお強く

留「もそつとお強く……其ンなら何うで御座る、コレならばエンヤラヤ

ーノーニー

治「ア痛タ、ア痛タ、ア痛タ、思ひ出し升たく

思ひ出したと云ふ聲を聴いて三太夫さんが、襖をがらりと開け、夫へ出ま  
して

三「お使者の御口上は

治「能く考へて見ましたら、屋敷を出る折聞かずに参じまして御座います

(完)





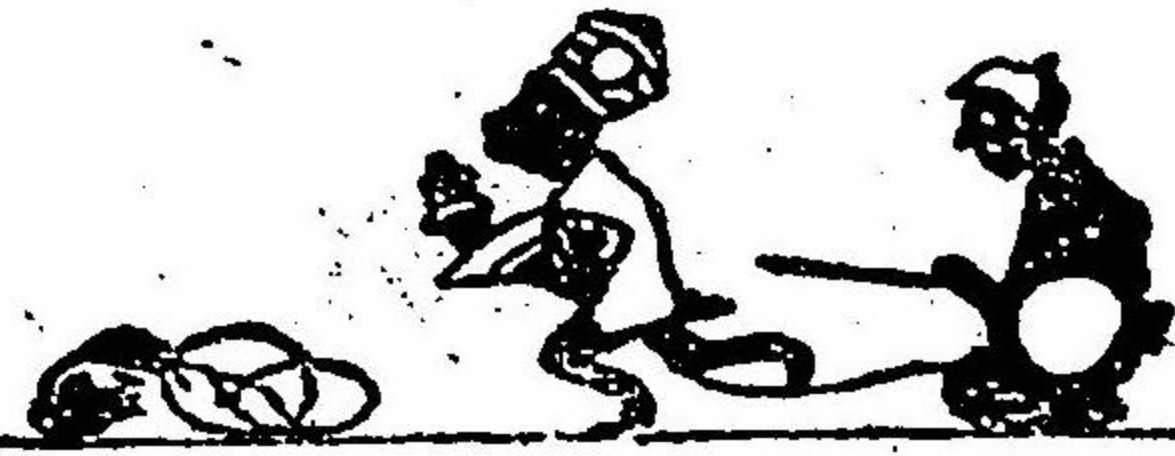
素人淨瑠璃

エ、今日は極々お柔かいお笑ひの澤山有るお話を申上げます素人が義太夫を語りまして未熟處から自然聴衆を煩はせると云ふ素人義太夫のお話を申上げますが總て義太夫に拘らず御覽なさる事でもお聴なさる事でも現行ます當人より力を入れ骨が折れます、されば上等演劇を御覽なさいますのと純帳の中等芝居を観るのは餘程心の入れ方が變て居ます、されば落語をお聴なさいまして講釋を聴きましても下手の長談義に出會ふと途中で歸へる譯には不可から終まで聴なければ成るまいと勤めて之を聴いたり觀たりする位當人の身體の毒と成るものはムいませぬ古い川柳に



川柳「河東節親類だけに貳段聞さ  
一寸之を考へますと河東節を悪く申したやうだが深く考へて祝ますと然うで無いテ是は面白い譯では有ませんが淨瑠璃の中河東節は始めから文章が約やかに克く出来て居ますから一寸語るにも中々六ヶ敷うムいます尋常の稽古で出来るものではないされば當節に至て淨瑠璃の中猥褻の文句が盡く添刪されましたが獨り河東節ばかりは改されません文章が寔に約やかにして音律に適ひ何處まで點の打ち處が無い程本統に善く出来て居ますから親子連れにてお聴なさいまして顔へ紅葉を散らすやうな怪からん言は有





ませんが一段聞くには中々骨の折れるもので處が貳段と來ると他人ならば  
聞き度ない親類だから跡の一段を聞くので甚しきに至ては

川柳「河東節三段聞いて眼を廻し

最上一層甚しいのは

川柳「河東節六段聞いて蘇生り

是は毒藥變じて薬と成るので有ませうまた太田蜀山が素人淨瑠璃を詠まし

た狂歌に

狂歌「まだ青き素人淨瑠璃黒がつて赤い顔して黄ナ聲を出す

で當人五色の聲を出して居ますから之を聴いて居る者は残らず之が爲めに



苦められます

且「コレさよ誰か居ないか予も疾からの約束だから充分語て衆人に澤山聴  
して遣る積りだ疾から語らう」とは思て居たが二三段ツハは平生も語て  
居るけれ共商賣が忙しくツて充分に語る事が出来なかつたが今日は兼て長  
家の者が何時旦那お淨瑠璃がムいます何うか爲ろツて近所中で頼むか  
ら今日實行から支度を爲て置けナニが佐吉が方々へ迎ひに往たヨシ／＼予  
の家作の奴も平生聴たいと云て居たから皆然う云てやんな……コレ／＼  
床は出来たが中二階に師匠が居るから最うそろ／＼支度して下さいまし只  
今御案内を致しますと然う云へ……此六疊の座敷は今日だけは予の樂屋

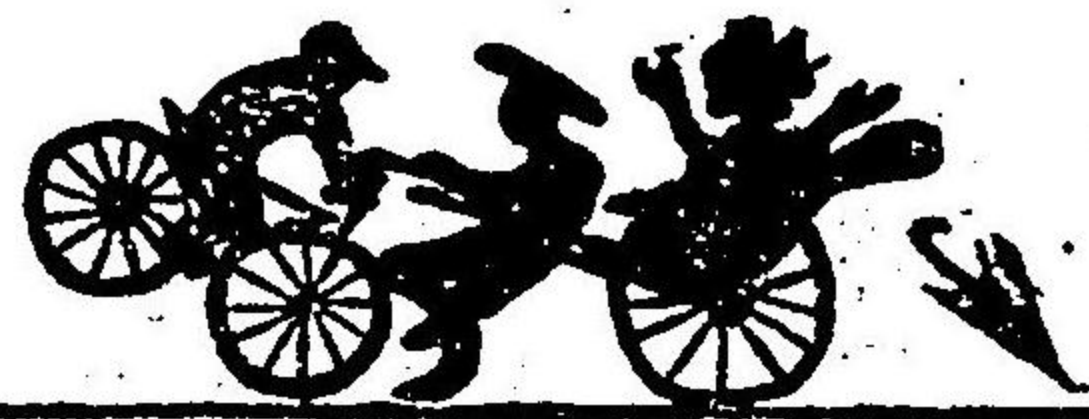




だから来た客に這入て来られると困るから入れねエやうに爲て呉れ……  
仕出屋より幾人来てエる二人だと六十人前の處ろを二人で間に合ふかな座  
布團の善いのを六十人前ナニ倉庫から出て居るか然んなら宜い鹽梅に布團  
を座敷へ配置して置きなさい酒を出す支度は宜いか

「御名々にお膳を出しますのですか」

「且何うして然んな事が出来るものか真ん中へ出して置いて皆さん御隨意  
に召上れと云ふ工合に爲て置けば上戸の方は夫れで宜しと併し下戸の方は  
一緒に菓子を出して置いたら遠慮して喰べない者も有り中には三人前喰べ  
て五人前袂へ入れて歸へる杯と云ふ者が有ては不公平で能くないから糊入



へ包んで名々に渡して遣るが宜い今夜は乃公が充分語て聞せるから嘸も皆  
も聞きたからう早く用を仕舞て前へ廻て聞け併しナ御簾が結構のもいだか  
ら小兒に徒らをされると不可から氣を附けて呉れ夫れに鐵瓶立て薄茶を一  
月原ひ度杯と云ふ贅澤者が来るかも知れねエから鐵瓶の中へ無暗に燭徳利  
を打ッ込まれてお花見に往たやうに酒臭い湯を飲ませるのも可笑くねへか  
ら所々へ燭銅壺を出して置け皆自分で燭をしてズン／＼飲めるやうに爲て  
置け最う徐々皆も来るだらう乃公も斯う遣ては居られねエ今日は澤山語る  
のだが喉の工合は如何だらう……ウー……ウー何うも工合が宜くない  
から鶏卵を三十計りに白布を三反計買て来い





と怪我人でも預たやうな騒ぎで此意氣組でやられては堪りません

馬佐吉が歸て來たらソロ／＼始めやう

オ、佐吉先へ提灯屋へ往たか

佐へ、只今……提灯屋さんへ参りましたら私も淨瑠璃が好きだから時々旦那に會ふ度に何時お淨瑠璃がムいますと云て楽しみに爲て待て居ました處急にお断わりに成ました

馬何にお断わりだと如何か爲なすツたのか

佐へエ誠にお氣の毒さまだが大變忙しいので據有ません今日は晝間から支度を爲て充分伺ふ積りで居ましたが急に得意先に開業式が有て鬼球提

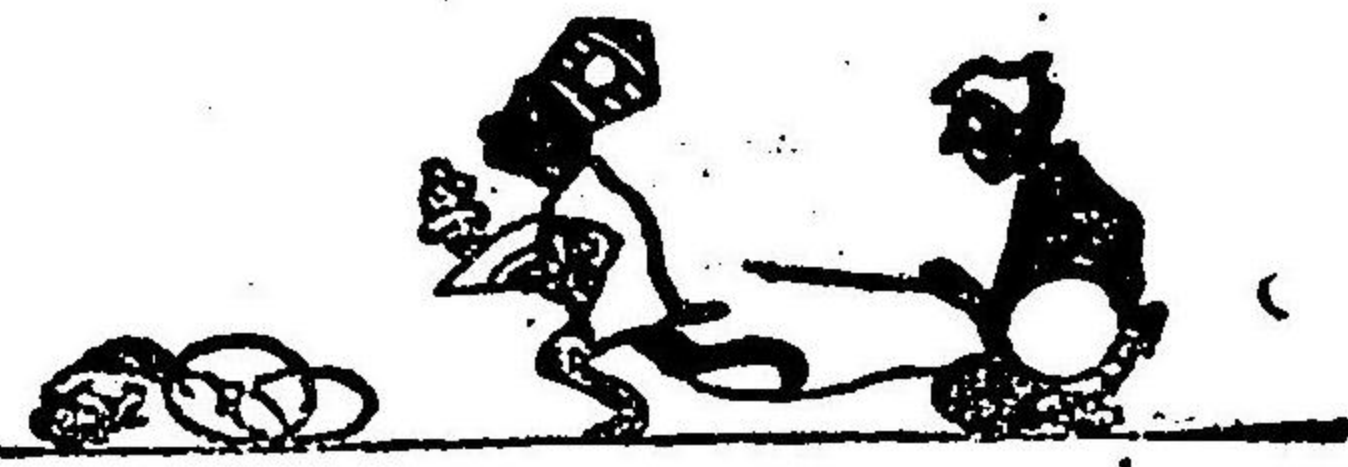


灯を三百個誂らへられ今夜中に間に合せなければ得意をしくじるから旦那のお淨瑠璃を伺へば註文の品が間に合す寔に残念で御座いますがお断わりを申しますと云てお内儀さんまでが手を蘇枹だらけに爲て居まして幾ら好きな淨瑠璃だつて眞逆家業には替へられない御覽の通りの次第だから悪からず旦那さまに詫びて呉れると申して日頃好き丈けに甚く残念がつて居ました

馬ム、ウ其奴ア可愛想に彼奴ア好だからな併し家業には替へられめエ……豆腐屋は來るか

佐「イエ其豆腐屋さんも亦生憎の時には往けませんもので何にか得意先に





年回が御座いまして急に雁擬きを五百個生揚げと油揚げとで醋か七百個も誂らへられて生揚げを厚く切り油揚げは薄く切り雁擬きへ入れる昆布や胡蘿蔔を刻むのが中々容易な事では御座いませぬ

旦何んだ其處で豆腐屋の講釋を爲なくツてもいゝ

佐右の次第で御座いますから伺ひ度も伺つて居られませぬ家業には替へられませぬかと云てお断わりで御座います

旦吉田さんでは何んと云た彼の印紙や半紙を賣て居る處の息子さんは

佐彼家の息子さんは早朝から濱へ参りましてお袋さんは居ますか時候に胃されて寒氣がして堪らないと申してこの熱い自分に懐爐を三個抱いて暖

爐に暖て居はして妻は此通り病人で仕方がないが件が歸たら早速出ますから旦那に悪からず然う云て呉れろと申ました

旦ッン鳶頭は如何した期う云ふ時杯には鳶頭が早く来て呉れねエでは困るなア

佐「鳶頭は誠にお氣の毒さまだが今晚は出られませぬ兼て御承知の通り私は不動さまの世話人を爲て居る處が講中に少し葛藤が起て深川の出張では解らないから明早朝成田へ立たなければなりませんので今晚旦那のお淨瑠璃を伺つて居ますと明日未明に出立する事が出来ませぬ何うも信心を棄る譯には行きませぬ残念ながら信心の事ゆゑ宜しくとの事で

